9世紀東アジアの中世イラン語碑文2件
――西安出土のパフラビー語・漢文墓誌とカラバルガスン碑文の翻訳と研究――

吉　田　　豊

0　はじめに

安史の乱（755–763）以降，陸路を使ったソグド人の交易活動は衰退に向かい，それに代わって海のシルクロードを通じた交易が盛んになるというのが一般の理解であろう．そして交易の担い手の主役は，ソグド商人からペルシア人（波斯）やイスラム教徒（大食）の商人になったようだ．9世紀はほぼ晩唐の時期に当たるが，この時代に属し，東アジアで見つかる中世イラン語で書かれた有名な碑文が二つある．一つはオルホン河流域の東ウイグル可汗国の都の遺蹟で，19世紀終わりに発見されたカラバルガスン碑文であり，もう一つは1955年に西安近郊の土門村で工事中に偶然発見された，漢文とパフラビー語で書かれた墓誌である．カラバルガスン碑文はウイグルの第8代保義可汗（在位808-821）に捧げられた碑文で，その建立年代には諸説あるが，820年頃のものである考えられている．西安の墓誌には紀年があり咸通15年（874）に書かれている．

二つの碑文は中世のイラン語で書かれていること以外に何ら共通する特徴はないのだが，どちらも京都大学文学部とは深い因縁がある碑文である．本学文学部に在学した時代から中世イラン語の研究を続けてきた筆者が，本学で定年退職を迎えるにあたって，二つの碑文に関する現在の段階の筆者のテキストと翻訳を提示しておきたいと考えた所以である．パフラビー語の銘文は，梵語梵文学の故伊藤義教教授が，1964年に発表したテキストと翻訳が日本語で読むことができる唯一のものであり[1]，その後半世

[1] 伊藤義教「西安出土漢蕃合璧墓誌蕃文解読記」『西南アジア研究』13, 1964, pp. 17-34（以下伊藤1964と略す）．伊藤はこれに先だって中国語版も発表している「西安出土漢，婆合璧墓誌婆文語言学的試釈」『考古学報』1964/2, pp. 195-203, 図版 I, II.

紀以上を経た現在の学界における銘文の理解を，日本の読者に紹介することはそれなりに意義のあることだと考える．またルーン文字表記ウイグル語，漢語，ソグド語の3言語からなるカラバルガスン碑文の漢文面は，東洋史学の故羽田亨教授が博士論文「唐代回鶻史の研究」の中でテキストの校訂を行っており，1957年に『羽田博士史学論文集　上巻』（pp. 303-324）で公刊されて以来，日本では長い間利用されてきている[2]．羽田は，碑文の拓本も入手しており，文学部図書館が所蔵している[3]．そのソグド語版は全体の4分の1程度を残すだけであるが，3分の1ほどを残す漢文版には見られない貴重な情報を含む．ウイグル語版は小断片が残されているだけなので，実質的な情報は得られない．ソグド語版は，筆者自身が1988年にテキストと翻訳を提出して以降30年以上を経ているが，改訂版は提出されていない．

A　西安出土のパフラビー語・漢文二言語併用墓誌の歴史的背景

この碑文は上でも述べたように，1955年に西安で発掘され，現在は西安の碑林博物館が収蔵している．石材は白色石灰岩で，縦35.5cm，横38.5cm，厚さ7.6cmである[4]．現在までに筆者が把握しているだけでも6種類の解読が発表されている．相対的に短くまた内容の明らかな漢文版によれば，この墓誌は，蘇諒の妻で馬氏の女性が，咸通15年（874）に26才で死亡した時に作成されたものである．蘇諒は左神策軍の散兵馬使という称号を帯びている．従来，被葬者のゾロアスター教徒，あるいはその祖先が中国に来た時期をめぐって二つの説があった．筆者はそれらと異なり，この墓誌は当時南海路経由で中国に到達し，長安に在留したペルシア商人の妻のものであると考えるので，銘文の読解に入る前に，この時代のペルシア商人の活動にいて概観する．

なお，本論文のこの前半部分は，2017年6月25-27日にロンドンで開催された学会（The

[2] 森安孝夫と筆者は共同で漢文版のテキストと翻訳・訳注を準備しており，『内陸アジア言語の研究』の2019年号に掲載される予定である．

[3] ソグド語の銘文を含む小断片の拓本は，現在立命館大学の所蔵に帰している．

[4] 墓誌のサイズは本墓誌が日本で展示された時の展示目録（京都文化博物館『大唐長安展』1994年9月）の情報である．中国で発表された時の情報によれば，「寛39.5，高35.5，厚7.5cm」とある（陝西省文物管理委員会「西安発現晩唐祆教徒的漢，婆羅鉢文合璧墓誌―唐蘇諒妻馬氏墓誌―」同附録　作銘（＝夏鼐）「唐蘇諒妻馬氏墓誌跋」『考古』1964/9, pp. 458-461）．

History and Culture of Iran and Central Asia in the First Millennium CE: From the Pre-Islamic to the Islamic Era）での口頭発表（Three scenarios for the historical background of the Xi'an Sino-Pahlavi inscription— Post Sasanian Zoroastrian traders?—）を基にしている．発表の内容は，英語論文としてこの学会の論文集に掲載される予定である．

1　中国におけるソグド商人とペルシア商人

9 世紀に編纂されたとされる *Akhbār al-Ṣīn wa'l-Hind*『中国とインドの諸情報　第一の書』によれば，中国の方孔銭 1000 枚を紐でつないだ所謂一緡あるいは一貫は fakkūj（fkkwj）と呼ばれている．このアラビア語の単語は『中国とインドの諸情報』にだけ見られる形式で語源は不明だと言う[5]．最近になってソグド語で同じ意味を表す語が発見されたが，興味深いことにその語は ptkwk と綴られている．その発音はおそらく [patkōk] であったと考えられる．この語は，コータン出土のソグド語の世俗文書を畢波と N. Sims-Williams が解読発表した際に発見したものだった[6]. 彼らによれば当該のソグド語文書は，書体や状況証拠から 8 世紀後半に比定されるだろうという．畢波と Sims-Williams はまた，同じ語がやはりコータンで出土した 800 年頃のものとされるユダヤ・ペルシア語の手紙にも，ptkw という形式で在証されることを明らかにした．二人の研究者は，ptkwk は「穴を開ける」を意味するソグド語の動詞 ptkwc から派生した名詞であるとし，ptkwk はおそらく「貫くこと」を意味していて，漢語の「貫」

---

[5] T. Mackintosh-Smith（ed. & tr.), "Accounts of China and India. Abū Zayd al-Sīrāfī", in: Ph. F. Kennedy & Sh. E. Montgomery（eds.), *Two Arabic travel books*, New York / London: New York University Press, 2014, pp. 1-161, esp. 52-3, 150. 家島彦一（訳注）『中国とインドの諸情報 1 第一の書』東京，2007, p. 174 は，ファックージュを銅銭 1000 枚と等価の銀貨と考えているが，勿論誤った見解である．

[6] Bi Bo and N. Sims-Williams, "Sogdian documents from Khotan, I: Four economic documents", *Journal of American Oriental Society* 130/4, 2010, pp. 497-508, esp. 506. 二人の研究者は 2018 年にこの論文の改訂版を中国語と英語の二言語版で発表した：『中国人民大学博物館蔵和田出土粟特語文書 Sogdian documents from Khotan in the Museum of Renmin University of China』北京 2018．そこでは，ptkwk に関する注釈で筆者の発見を引用している（『同書』pp. 15, 58-59）．

の原義にもとづく透写語（calque）であろうとした．その際，畢波は，中央アジアで出土する漢文文献には緡は現れず，もっぱら貫が使われているという事実を引き合いに出して，この説を補強しようとした[7].

漢語では, 1000 枚の銅銭に糸を通したものは「貫」以外にも「緡」とも呼ばれている．「緡」の原義は「釣り糸」である．興味深いことにソグド語の動詞 ptkwc は魚を釣る文脈で現れていて[8]，その意味を「穴を開ける」だと解釈する説とは別に「（魚を）釣る」であるとする説もある．MacKenzie（『上掲書』p. 35）は，共通の語根から派生した動詞 ”k’wc が「つり下げる」を意味することから, ptkwc を「（魚を）釣る, （釣り針で）ひっかける」と翻訳した．筆者は MacKenzie に従い ptkwc は「（釣り糸で）つり上げる」ことを意味すると解釈し, それから派生した ptkwk は漢語の「緡」の翻訳借用とみなす.

このように ptkwk は純然たるソグド語の単語であることは明らかであるので，アラビア語の fakkūj もユダヤ・ペルシア語の ptkw もソグド語からの借用語であることになる．当然ながら，直接ソグド語から借用されたと考える必要はない．ソグド語の音素体系では，無声の [k] と有声の [g] を発音の上で区別しないので，語末の -k は弱化して実際の発音では有声音に聞こえていた可能性はある．語中の -tk- が逆行同化により -kk- と発音されることも自然な音変化である．アラビア文字では [p] や [g] を表す文字はなく，外国語の [p] や [g] は文字 f と j によって表記されることはよく知られている．従ってアラビア語の fakkūj はソグド語から借用されたと考えて問題はない．中世ペルシア語の語末の -g は近世ペルシア語では脱落するので，ユダヤペルシア語の形式は -g の脱落によって説明できるだろう．実際中世ペルシア語が仲介言語であったのかもしれない.

ソグド人の広範な商業活動の範囲と時代を考えれば，借用が何時，何処で起きたのかを特定することは容易ではないが，貫や緡は中国固有の単位なので，中国の市場で借用が起きた可能性が極めて高い．その場合大食（ムスリム）商人や波斯（ペルシア）商人が，直接中国語からではなくソグド語から，この中国の市場で使われる商業用語

7　畢波「西域出土唐代文書中的 “ 貫 ”」,『北京大学学報』2012/4, pp. 129-136.

8　ソグド語訳の『善悪因果経』の 85-86 行目に rty xwnx ZKZY ZKw kpw ptkwct rty kβt’ pršt ”z’yt「魚を ptkwc する者は，割れた唇の者として生まれる（脣缺從穿魚鰓中來爲人）」とある．D. N. MacKenzie, *The ‘Sūtra of the Causes and Effects of Actions’ in Sogdian*, London, 1970 参照.

を借用しているという事実は興味深い．大食商人や波斯商人が，ソグド商人を介して中国で交易活動を展開していた可能性を示唆するからである．中国の市場におけるソグド商人の活動の規模と歴史の長さを考慮すれば，これは当然のことであるとも考えられる．陸路を利用したソグド商人と，海路中国にやってきていた波斯・大食商人との接触があったことを示す証拠は，760 年に揚州で田神功が起こした事件で，その記録は『旧唐書』にある：「神功至揚州，大掠居人資產，鞭笞發掘略盡，商胡、大食、波斯等、商旅死者數千人（巻 110,「鄧景山伝」中華書局本 p. 3313）」ここにある「商胡」は文脈からソグド商人であることは疑いがない [9]．揚州に居留した多数の外国商人のなかに波斯商人，大食商人のほかにソグド商人が含まれていたことが知られる．ちなみにこの 2 年前に広州で起きた外国人の反乱では，「廣州奏大食國、波斯國兵衆攻城，刺史韋利見棄城而遁（『旧唐書』巻 10, 中華書局本 p. 251）」とあるから，少なくともこの時期の中国南方ではソグド商人の姿が見えない．

ソグド商人と波斯商人の接触は，我が国の法隆寺に伝わる香木に，パフラビー文字の刻文以外に，ソグド文字の焼き印があることからも知られる [10]．香木に記された墨書銘文の最古の紀年は 761 年であるから，この年までには日本に入っていたことが知られる．鑑真（688-763）が 753 年にソグド人安如寶とともに揚州を出発して日本に来ていることを考慮すれば，波斯商人が南海路を経由して揚州に持ち込んだ香木をソグド商人が買い付け，少なくとも揚州以北では，ソグド人が彼らの中国国内の販路を通じて売りさばいていた可能性が考えられる．焼き印はソグド商人のトレードマークであったことになる [11]．唐の時代の外国商人としては，黄巣の乱（875-884 年）のときの 878 年

---

[9] この時代「胡」がもっぱらソグド人を指すことについては，森安に専論がある（森安孝夫「唐代における胡と仏教的地理世界」『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋 2015, pp. 376-406）．対応する『新唐書』の記事は「神功兵至揚州，大掠居人，發冢，大食･波斯賈胡死者数千人（中華書局本 p. 4655）」となっていて，「大食や波斯などの外国商人」を意味すると理解され，もはやソグド商人がそこに含まれていたという事実の認識がなくなっているように見える．

[10] 東野治之（補説：熊本裕・吉田豊）「法隆寺献納宝物　香木の銘文と古代の香料貿易―とくにパフラヴィー文字の刻銘とソグド文字の焼き印をめぐって―」『MUSEUM　東京国立博物館美術誌』443 号 , 1987/4, pp. 4-18.

[11] 筆者が法隆寺の香木の焼き印のソグド語を解読していたときには，ソグド語の焼き印はこの 1 点（この場合は実物ではなくその印影）しか知られていなかった．しかるにその後，新たに 6 点，焼き印の実物が発見されている．その内 2 点は中国で見つかっている．それらを参考にすれば，

に殺害された12万人のイスラム教徒，ユダヤ教徒，キリスト教徒，ゾロアスター教徒の話が有名である[12]．それを参考にすれば，漢文史料で「波斯」と呼ばれるのは非イスラム教徒の商人，特にゾロアスター教徒，キリスト教徒であったのであろう．なおこの時代の南海路におけるこの4つの宗教の信者の商人の組み合わせは，南インドのQuilonでみつかる9世紀の銅板銘文で確認される．地元の王がキリスト教の教会に土地を寄進した際の証人の名前を記したこの銘文は，アラビア文字，パフラビー文字，ヘブライ文字で書かれている．パフラビー文字で記された名前にはゾロアスター教徒とキリスト教徒がいる[13]．

2　中国における波斯人の商業活動

晩唐の時代，波斯商人は単にペルシア湾と広州や揚州のような港湾都市とを往復するだけではなく，長安などの大都市に居住して倉庫業や銀行業などの大規模な商業活動を行っていたとされる．E. Schaferの有名な論文 “Iranian merchants in T’ang dynasty tales” の一節を引用する[14]．

法隆寺の香木の焼き印は，文字の読みに変更はないものの，その解釈は見直す必要があるように見える．筆者はこれらの焼き印の銘文の解釈全般について別稿を用意している．

パフラビーの刻文については，最近になって矢島洋一が「法隆寺香木パフラヴィー文字刻銘再考（『奈良女子大学研究教育年報』第10号 , 2013, pp. 9-14）」を発表した．そこには熊本以降に提案されているいくつかの読みが紹介されている．現時点で採用すべき読みは，Ph. Giginoux（*Abstracta Iranica*, No. 11, 1988, p. 28）が提案したbwhtwk' [buxtōg] という人名であろう．矢島の新しい読みbwy Y cndl [bōy ī čandal]「白檀香」は，字形の点で大きな難点がある．それは初頭の文字b-の長い筆画が語全体に及んでいることで，これは全体が1語であることを強く示唆している．

[12] 家島彦一（訳注）『中国とインドの諸情報2　第二の書』東京，2007, pp. 21, 102-103参照．ただしそこで家島が ’l-mjwsをマズダク教徒とするのは誤解で，ゾロアスター教徒である．

[13] W. B. Henning, “Mitteliranisch”, *Handbuch der Orientalistik* I/IV/1, Leiden / Cologne, 1958, pp. 20-130, esp. p. 51参照．この銅板銘文の写真はCh. Baumer, *The Church of the East*, new edition, London/New York, 2016, p. 29で見ることができる．

[14] W. J. Eischel（ed.）, *Semitic and Oriental studies. A volume presented to William Popper on the occasion of his seventy-fifth birthday October 29, 1949*（University of California publications in Semitic philology, vol. XI）, Berkeley / Los Angels: University of California Press, 1951, pp. 403-422所収の論文のp. 410から．

For information about these dealers in the exotic wares of eastern and western Asia we must turn to the fictional romances of the T'ang dynasty. Here we find the Iranian merchant as he impressed himself on the mind of the average Chinese. The impression was strong, and the Persian passed into the relative immortality of the proverb. Li Shang-yin includes among "incongruous sayings" of the T'ang dynasty, among such others as "a teacher ignorant of characters" and "a butcher reciting sutras," the illuminating contradiction of "a poor Persian."

中国に在留し高利貸しを行っていた波斯商人は，このような小説類だけでなく史書にも記録が残されている．日野開三郎は「唐代の波斯銭について」（『石田博士頌壽記念東洋史論叢』1965；引用は『日野開三郎　東洋史論叢』第 5 巻，1982, pp. 231-259 から）と題する論文で，『唐大詔令集』巻 27 所収の乾符二年（875）南郊赦文の一節を引用している．当時，任官栄転が多く賄賂によって決められるため，その資金調達のために官員が負債することが流行していることを記して，それを防ぐ対策として次のような通達があったという．

自今已後．如有人入錢買官納銀求職．敗露之後．言告之初．取與同罪．卜射無捨．其錢物等並令沒官．送御史臺以贓罰收官管．如是波斯番人錢．亦准此處分．其櫃坊人戸．明知事情不來陳告．所有物業幷不（令の誤？）納官．嚴加懲斷．決流邊遠．庶絶此類．

これに添えて日野は「賄賂の資金として大量に動く利貸のうちに波斯番人銭が大きな比重を占めていたこと…が知られる（p. 238）」とし，「ここにいう波斯銭は，買官求職の賄賂資金として挙債（利借り）せられていたものであるから，波斯人の経営する利貸銭の意味である（p. 239）」と続けている．

この時代の商人が官位を金銭で購入する事例については高橋継男に「唐後期における商人層の入仕について」（『日本文化研究所紀要』17, 1981, pp. 153-173）という論文

がある[15]．そこでは次のような一節がある：「唐後期にはほとんどその全期間を通じて，商人層が権力機構の末端へもぐりこむことが出来るルートが，なかば公然と開けていた．…このように影庇[16]はほとんど総ての国家権力機構で広範に行われ，これによって富商らが，権力機構の末端に深く潜入し寄生することになったものであるが，中央禁軍において，ことのほか大規模に行われたようで，影庇についての史料も，禁軍に関係するものが最もよく残されている（「上掲論文」p. 157）」と言っている．そして『権載之文集』巻47から文章を引用して，「禁軍の主力たる神策等の城内にある兵の多くは，影庇された市中の商人であると指摘している」とも言っている．高橋はまた『資治通鑑』巻228，建中四年（783）十月の条を引用して，この時代すでに市井の富児＝商人層は，贈賄してその名を禁軍の軍籍に附籍してもらい，兵士としての給賜を受けながら，実際は市中の商店で商売を行っていたとしている．

近年李錦繡は，この時代ペルシア商人は中国に銀貨をもたらしたが，それらは貨幣としては使われず改鋳され銀鋌とされ流通したと論じている．その際彼女は1989年西安市の，唐の長安城では義寧坊にあたる地区で発見された銀鋌（274mm x 61mm, 2,130g）の銘文を紹介している[17]．銘文には嶺南節度使の張伯儀が見えており，その在職期間から推定して，銘文の年代は777年頃，遅くとも782年以前だとしている．そしてその1行目は次のように読めるという：「阿達忽［．］頻陁沙等納死波斯伊娑郝銀壹鋌　伍拾両」．李錦繡は「伊娑郝」を正しく人名のIsḥāqに比定している．先行する部分には銀鋌を官に納めた商人の名前「阿達忽［．］頻陁沙」がある．Karlgrenの再建した中古音では*·â d'ât xuət [...] b'iĕn d'â ṣa となるが[18]，おそらく，Ādurkhur[dād?] bin Dashaのような名前が推定されるだろう．先に引用した『唐大詔令集』巻27の一節に「納銀求職」とあったが，その銀はこのような銀鋌であった可能性が高い．1990年までに知られていた唐代の銀鋌については，礪波護「唐代社会における金銀」（『東方学報』62, 1990,

---

[15] この論文の存在を筆者に教示された福島恵，中田美絵両博士に感謝する．

[16]「影庇（影占）とは，禁軍や諸司などの中央権力機関はもとより…重い差科を免れようとする富商・大戸の請託を容れて，彼らに将兵や職掌色役人の名籍を与えるものであり，これによって差科免除を得た富商・大戸と，彼らから謝礼として銭物を収納した権力側との双方が利益を得た」という（高橋「上掲論文」, p. 157）．

[17] 李錦繡「唐代嶺南におけるササン朝銀貨の行方」『東方学』129, 2015, pp. 117-126, 特に p. 120.

[18] 中古漢語の再建形は，B. Karlgren, *Grammata serica recensa*, Stockholm 1958から引用する．

pp. 233-270）に便利な紹介がある．

3　歴史的背景

中国商人が賄賂によって官位を得る事ができたのであれば，長安在留の富裕なペルシア商人も同様であった可能性があるだろう．荒川正晴によれば 8 世紀前半，羈縻州百姓のソグド人が游撃将軍（従五品下）の官位を銭物で取得していたとする記録があり，律令制の弛緩とともに，ソグド人「百姓」で散官を買うものが少なくなかったことが推定されるとしている[19]．ここで西安出土のバイリンガル墓誌の漢文版（図版 B）を見てみよう．

1　左神策軍散兵	左神策軍の散兵馬使の
2　馬使蘇諒妻馬	蘇諒の妻で，馬氏（の女性）は
3　氏己巳生年廿六	己巳の年（849）に生まれ 26 歳のとき，
4　於咸通十五年甲	咸通 15 年，甲午の年
5　午（歳）二月（丁）卯建	2 月（すなわち）月建が丁卯の月[20]
6　廿八日丁巳申時身	その 28 日（その干支が）丁巳の日，申の時（午後 3 － 5 時）
7　亡故記	死亡した．故にこれを記す．

[19] 荒川正晴『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋 2010, p. 510．そこの「游撃将軍（従五品上）」は「游撃将軍（従五品下）」の誤植である．

[20] 従来「辛卯建」と読まれていた．この表現の意味するところは不可解で，夏鼐（「上掲論文」pp. 460-461）も説明に窮しているように見える．この年の二月の辛卯の日は二日で（藪内 apud 伊藤 1964, p. 24），筆者は当初その日が十二直の建の日になるのだと解釈していた．同僚の吉川真司教授（日本古代史）に伺ったところ，その年の二月二日は建の日ではないことを教えて下さった．吉川教授さらに拓本や写真を調べ，従来「辛」と読まれてきた文字の読みは明瞭ではなく「丁」の読みも可能であることを指摘して下さった．（**図 1**）教授はまた，甲午歳の月建では二月は丁卯であるという事実にも注意を喚起して下さった．この指摘を受けて，筆者は「（丁）卯建」の読みを採用することにした．ただ当時の墓誌に月建を記入する類例があるかなど調査する必要があり，吉川教授は慎重に判断するべきであることを強調された．ここに記して謝意を表す．

墓誌から死亡した女性の夫の蘇諒は，左神策軍の散官の兵馬使であったことがわかる．ちなみにこの女性は己巳年（849）生まれで，咸通十五年（874）二月二十八日に死亡した時，数えで26歳であった．上で引用した高橋の論文でも述べているように，神策軍こそは商人たちが賄賂によって軍籍に附籍されることを求めた禁軍の代表である．従って，蘇諒は長安に在留した波斯商人であり，その若い妻は彼に従ってペルシアから中国にやってきたと考えるのが妥当であろう．日野は，芥川龍之介が翻案したことでも有名な杜子春の小説では，仙人が子春にお金を渡す場所が西市の波斯邸になっていることに注意を喚起し，次のように言う：「この波斯邸は明らかに櫃坊業務を営んでいる波斯胡人の店で，老人はそこに預けていた銭を彼に与えたものと解しなければならぬ」（「上掲論文」p. 240）．波斯商人ではないが，ソグド商人の妻子が夫の指示に従い敦煌に住んでいた事を示す4世紀初めの手紙が残されている[21]．

しかしながら，西安出土のバイリンガル墓誌の歴史的背景として，このような推定が為されることはなかった[22]．従来はペルシア人のゾロアスター教徒である蘇諒とその妻が中国いる背景として，二つの推定があった．伊藤義教が墓誌の解読を発表したとき，彼は考古学者の夏鼐の説を紹介している（伊藤 1964, pp. 31-32）．その際夏鼐は，『資治通鑑』巻232，貞元三年（787）の項に記録された，当時の宰相の李泌の建議を勘案している．李泌は，吐蕃が河西を占領してから本国に帰国できなくなった外国人（胡客）が財政を圧迫しているとして，彼ら4000人を神策軍に隷入させた．そして王子や使者は散兵馬使あるいは押牙に，その他は兵卒にしたとあるのによって，蘇諒はこの時の

[21] E, de la Vassière 著・影山悦子訳『ソグド商人の歴史』東京 2019, pp. 45-47.

[22] 実際には1988年にHumbachと共同でバイリンガルの墓誌を研究したWang Shiping（王世平）も同じような考えを述べている．彼は次のように言っている：当時の中国には絶えず外国人が流入していたが，彼らはグループを形成せず単独でやってきた；彼らは資金さえあれば，中国人同様，軍隊における地位を購入できた；伝承によれば長安在住の商人（その多くは外国人）は賄賂によって軍籍を入手し，軍務に就くことなく，身分の保全と経済的優遇措置を享受できた；このような金銭によって手に入れた官位が散官であった（Wang *apud* Humbach, “Die pahlavi-chinesische Bilingue von Xi’an”, in: *A green leaf: Papers in honour of Professor Jes P. Asmussen*, Acta Iranica 28, Leiden 1988, pp. 73-82, esp. p. 78）．これは筆者の推定とほぼ同じだが，ただ一般論として述べるだけで，全く論拠が示されておらず，結果として張廣達や栄新江のような中国を代表する歴史学者は，この見解に賛同するどころか参考にすることすらなかった．

胡客の後裔であると考えた[23]．伊藤自身は，その可能性以外に，墓誌が作成された 874 年をそれほど遡らない時期にホラーサーンないしソグドから中国に逃れてきた祆教徒で，神策軍に編入された可能性も指摘している．ただ現在の歴史理解で 874 年という唐の晩期の時期の中央アジアの状況を考えれば，陸路中国に逃れてきたゾロアスター教徒が長安で神策軍の散兵馬使に採用されることはほぼ考えられないだろう．伊藤が敢えてこの考えを提案したのは，亡命してきた家族が 100 年以上もの間，パフラビー語・パフラビー文字の知識を維持することは難しいという認識があったのだと思われる．この考え自体は筆者も同意見である．

一方従来大方の研究者は，全く論証ぬきで，蘇諒はササン朝の滅亡時期に中国に亡命してきた王族の子孫であるという前提で議論を進めている．ここで一例をあげれば，中国を代表するシルクロード学の研究者である張廣達とその弟子の栄新江はこの考えであり，栄新江は張廣達の本の書評「考據與義理的相互為用――張廣達先生《文本、圖像與文化流傳》讀後」（『中國圖書評論』2008 年第 11 期，pp. 82-86）において，この墓誌について次のように述べている：表現出晩到公元 874 年，也就是會昌滅法以後，薩珊波斯的遺民不僅繼續使用本民族的官方文字婆羅缽文，而且保持著本民族的祆教信仰，很可能還採用著某些祆教徒的喪葬儀式[24]．F. Grenet は 2011 年パリで行われたパフラビー語パピルス文書に関するワークショップでの講演で本墓誌を取り上げ，彼のテキストと翻訳を発表したが，その最後にやはり次のように言っている：The historical context of the inscription: no Suren anymore! Nevertheless it shows that at the very end of the Tang empire there was still a Persian Zoroastrian community in the capital, and this community behaved exactly like contemporary Zoroastrians in Iran: they were conscious that Iran was under Muslim rule but they used Pahlavi, at least for religious purposes. The Pahlavi language and script are on the whole correct. Contrary to Manicheans or Nestorians in Xi'an, they appear to have survived the persecution of foreign religions in 845.

---

[23] Harmatta もこの考え方に従っているが，それ以前にすでに中国に来ていたという可能性も考えている（J. Harmatta, "Sino-Iranica", *Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae* 19, 1971, pp. 113-47, esp. 134）.

[24] http://yifertw.blogspot.tw/2011/06/blog-post_30.html（2019 年 8 月 2 日最終閲覧）.

筆者が蘇諒に関して，南海経路で中国に来て長安に在留したペルシア商人であると考える背景には，栄新江が想定しているような状況，すなわち，ひとにぎりのササン朝の亡命王族ないし貴族が，200年ほどの間，異国の地で固有の言語，宗教，文字文化を維持したとは考えにくいことがあげられる．そのような事態は全く不可能というわけではないが，極めてありにくいと思われる．イラン本土で見つかるササン朝の滅亡前後の頃の墓誌は，みな縦書きであるにもかかわらず，この墓誌は横書きになっている．これも，栄新江のような解釈には不利な事実である．この点で特に注目されるのは，パフラビー語版の3行目にあるŠNT 200 60 ZY t'(c)yk'n sāl 260 ī Tāzīgān「大食（すなわちヘジラ）の260年」という表現である．この墓誌では3種類の紀年法が使われている．まずヤズデギルド暦で，これはゾロアスター教徒としてその使用に不思議はない．また3番目は唐の年号であるが，これも長安で書かれた碑文として当然であろう．2番目にあるのがヘジラ暦である．

現在イラン語研究者はHumbachが1988年に提出したテキストに従って，この読みを採用しているが，伊藤は異なる読みを提案していた．当初夏鼐は874年がヘジラの260年に当たることから，この文字t-で始まる紀年は，ヘジラを意味する語ではないかと指摘していた．伊藤は文字の読みに疑問が残るだけでなく，イスラムの迫害を逃れてきたゾロアスター教徒がヘジラを用いるはずがないと考え，夏鼐の解釈を排除しtnyk'nと読み「唐朝の」と翻訳したのであった．この解釈はHarmatta「上掲論文」も採用しているし，張廣達は，Humabachの論文が出てからもこの読みと解釈に従っている[25]．618年に唐が興ってから260年は878年にあたり，符合しないだけでなく，当時王朝の始まりを起点として紀年を行う伝統は存在しなかったとする夏鼐の忠告にも伊藤は従わなかった．しかしたとえ文字の読みにいくらか疑問が残るにせよ，これほど年代が一致する事態を無視し，年代も一致せず中国に存在しない紀年法を想定してまで「唐朝の」の解釈を採用することはできないであろう．そして，これが確かにヘジラ暦を示しているなら，蘇諒はイスラム教に迫害されそれを憎んでいたはずである

[25] 張廣達「再読晩唐蘇諒妻馬氏双語墓誌」『国学研究』10, 2002, pp. 1-22, esp. p. 16．なおPh. Gignoux, *Glossaire des inscriptions Pehlevies et Parthes*, London 1972, p. 35はtng[k'n]と読んでいるが，その意味は“de la（dynastie）T'ang”だとしている．

という想定はできないことになる．彼は彼が親しんでいた 3 つの紀年法で年次を指定したに過ぎないのであろう．南海経路で大食商人と共に中国に来ていた波斯商人を想定すれば，この点で不都合はない．

この節の最後に，イスラム時代以降のパフラビー語の墓誌銘が，イラン以外の場所に見つかる例としてイスタンブールで発見された碑文を紹介する．この有名な碑文は，それが発見されたイスタンブールの町の地区を勘案して，西暦 430 年以前の成立みなされていた．そしてその銘文の書体は西安出土のバイリンガル墓誌と同じ，いわゆる Book Pahlavi のそれであり，この種の草書体のパフラビー文字，ひいてはその草書体の書体をベースにしたアベスタ文字の成立年代の議論のなかでしばしば言及されていた．F. de Blois はこの銘文が言語的特徴，書体，内容の点から考慮して，ササン朝の滅亡後の 9 世紀ないし 10 世紀のものであることを論証した[26]．de Blois は被葬者の Khurdād がキリスト教徒であることから，彼は Melkite 派に属していて，イスタンブールに巡礼に来ていたのだろうと考えた．しかし，黄巣の乱の時に殺害された外国商人や Quilon の銅板銘文にキリスト教徒が含まれていることを考慮すれば，Khurdād はむしろ商人であった可能性が高いのではないだろうか．

4　テキスト，翻訳，訳注

ここに筆者の現在の段階のテキストと日本語訳を提出する[27]．碑文が発見された土門村は唐の長安城の西北にあった開遠門近くの城外に当たるという．開遠門は，杜子春の話で波斯邸があったとされる長安の西市からも遠くないところである．銘文は伊藤義教が 1964 年に日本語と中国語で解読を発表して以降，何人かの研究者が改訂版を発表している．伊藤の発表後すぐに，イラン人の Gharib がテキストと翻訳をペルシア語

[26] F. de Blois, “The Middle-Persian inscription from Constantinople: Sasanian or Post-Sasanian?”, *Studia Iranica* 19, 1990, pp. 209-18.

[27] 従来碑文のパフラビー語版を読んだ研究者は，拓本にもとづくのみで，碑文自体は見ていない．筆者は，1994 年 9 月にこの墓誌が京都文化博物館で展示された際に実見する機会があった．ただ明るい照明の下，ガラス越しに彫りの浅い銘文を読み取ることは不可能であった．幸い展示目録には，拓本以外に墓誌の写真も掲載されていて，実物を肉眼でみるより遙かによく読み取ることができる．本稿でもこの写真から画像を転載する．

で発表しているが筆者は未見である[28]．同じ頃, W. Sundermann と Th. Thilo も比較的長い論文を発表し，伊藤論文の内容の紹介と，いくつかの問題点について議論している[29]．1971 年には Harmatta（「上掲論文」）が改訂版を提出し, 関連する論文も発表している[30]．1972 年には Gignoux（『上掲書』）はパフラビー語とパルティア語の碑文の語彙を集めた辞書を刊行したが，そのときにもこの墓誌の全語彙を収録している．この墓誌が当時国際的に注目されていたことが知られる．伊藤の直弟子の上岡弘二は，伊藤の死後刊行された『西南アジア研究』46, 1997 の冒頭に次のように述べている：「当時の樋口助教授を通して，中国より依頼のあった西安市出土のパフラヴィー語墓誌をすぐさま解読して，日本のイラン学の水準を世界にお示しになった.」

1988 年になって Humbach（「上掲論文」）は西安の碑林博物館の学芸員王世平（Wang Shiping）と共同で論文を発表し，懸案となっていたいくつかの語について新しい読みと解釈を提示した．この Humbach のテキストと翻訳はその後の研究の出発点になったという意味で画期的であった．実際最近になって Hassan Rezai Baghbidi，そして F. Grenet も銘文を校訂しているが，基本的には Humbach の改訂案に従っている[31]．その点では筆者がここで発表するテキストと翻訳も同じであり，とりわけ新しい解釈が盛り込まれている訳ではない．読者の便宜のために伊藤，Harmatta, Humbach, Rezai Baghbidi, Grenet 及び筆者の読みの対照表を付録として添えた[32].

---

[28] B. Gharib, “Kašf-e katibe-i be xaṭṭ-e Pahlavi dar Cin”, *Soxan* 15, 1965-66, pp. 1177-78; idea, “Katibe-i be xaṭṭ-e Pahlavi dar Cin”, *Majalle-ye Dāneškade-ye adabiyāt-e Tehrān* 14, 1966-7, pp. 70-76.

[29] W. Sundermann and T. Thilo, “Zur mittelpersisch-chinesischen Grabinschrift aus Xi’an”, *Mitteilungen des Instituts für Orientforschung* 11/3, 1966, pp. 437-450.

[30] 同じ年に Harmatta は，ほぼ同じ内容の論文をイタリアの雑誌にも発表している：“Middle Persian-Chinese bilingual inscription from Hsian and the Chinese -Sasanian relations”, in: *La Persia nel medioevo*, Rome 1971, pp. 363-376.

[31] H. Rezai Baghbidi, “New light on the Middle Persian-Chinese bilingual inscription from Xi’an”, in: M. Maggi and P. Orsatti（eds.）, *The Persian language in history*, Wiesbaden 2011, pp. 105-115. F. Grenet は 2011 年 6 月 27 日から 7 月 1 日にかけてパリで行われた Third Summer School of Pahlavi Papyrology <<The Use of Pahlavi in Early Islamic Times>> におて “The Pahlavi-Chinese inscription from Xi’an” という講演を行い，この墓誌の彼の読みと翻訳を発表している．Grenet 教授は筆者に未発表の原稿を提供され，発表することを許して下さった．なお，2019 年 4 月には改訂版も送って下さった.

[32] パフラビー文字の翻字は研究者ごとに異なることがある．特にアラム文字の he と ḥēt に遡る

なお中国の研究者たちは，主に伊藤・Harmatta のテキストに基づき歴史的背景の検討を行っている．筆者が把握しているのは下記の通りである．上で言及した張広達の論文も含めておいた．近年の中国における研究状況を考えれば，おそらくもっと多くの研究があると思われるが，それらを網羅することは筆者の手に負えない．

劉迎勝「唐蘇諒妻馬氏漢，巴列維文墓誌再研究」『考古学報』1990/3, pp. 295-305

林梅村「唐長安城所出漢文――婆羅鉢文双語墓誌跋」『陳寅恪教授記念文集』1994（林梅村『西域文明』1995, pp. 252-259 に再録）

張廣達「再読晩唐蘇諒妻馬氏双語墓誌」『国学研究』10, 2002, pp. 1-22

葛承雍「祆教東伝長安及其在陝西的遺痕」『国学研究』10, 2002, pp. 23-38

4－1　テキストの翻字，転写，和訳

下にテキストと翻訳を提示する．テキスト中の（A)~(E）は解釈が確定していない部分であり，下に注釈を施す．またテキスト中の（丸括弧）は，文字が一部破損していることを示し，[角括弧] は完全に破損している部分である．{w} は衍字を示し，yz̲dk̲lylt' における下線部は，文字 z や k が通常とは著しく異なる形になっていることを示す．

＜文字転写（図版 A)＞

(1) ZNE whšpwn'(= A)ZY 'nwšlw(b')n m(')[..]hš(= B)ZY BRTE ZY 'nwšlwb'n

(2) pl[h]wz't ZY štrd'(l)(= C)ZY MN(syr)lyn(= D)ŠNT 200 W 40(+2)(= E)ZY 'nw{w}šlwb'n

(3) yz̲dk̲lylt' ŠNT 200 60 ZY t'(c)yk'n ŠNT 10 5 ZY hm'ypylwckl

(4) hwt'y bgpw[h]l ZY h(m)tw(n)B(YRH)spndrmt W [Y](W)M spndrmt

(5) dtmyn BYRH PWN 20 4 4 wtyl'n(Y)HWWNt APš g's LWTE 'whrm(zd)

(6) W '(mh)r(spnd'n)PWN l(wš)n g'lwtm'n W p'hlwm 'hw'n YHWWN't ŠRM

文字の転写は研究者ごとに異なり複雑であるが，単語の認定において異なることはないので，解釈の点では問題は無い．伊藤の転写は別の点でも特異で，イラン語を表記する場合には文字 lāmed と rēš の区別を捨象してどちらも r で転写している．なお発音表記は筆者のテキストに基づいている．音写のシステムは MacKenzie 1967 に拠っているが，伊藤は古い方式に従っていた．

＜発音転写＞

（1）ēn A ī anōš-ruwān B ī duxt ī anōš-ruwān

（2）Farroxzād ī C ī az D sāl E ī anōš-ruwān

（3）Yazdgird sāl 260 ī Tāzīgān sāl 15 ī hamē-pērōzgar

（4）xwadāy bagpuhr ī hamtun māh spandarmad ud rōz spandarmad

（5）didomēn māh pad 28 widerān būd u-š gāh abāg Ohrmazd

（6）ud amahraspandān pad rōšn garōdmān ud pāhlom axwān bawād drōd

＜和訳＞

これは，(D) 疾陵州の (C) 領主で，魂が永遠なる者になった（＝物故した）ファッロッホザードの娘で，魂が永遠なる者になった(B)マーフドフシュ[33]の(A)魂の場所（＝墓？）である．魂が永遠の者となったヤズデギルド王（位 632-651）の（暦の）(E) 242 年（＝西暦 874），大食の年（＝ヘジラ）の 260 年（＝西暦 874 年），咸通の常勝王たる天子（＝中国皇帝）の 15 年（＝咸通十五年 ＝西暦 874 年），スパンドアルマト月のスパンドアルマト日（ゾロアスター教の暦では 12 番目の月の 5 番目の日 = 874.3.22），二番目の月の 28 日（中国の暦の二月二十八日 = 874.3.19），（魂はこの世から）逝去しつつあった．彼女の（今後の）居場所は，天国と最高の存在においてアフラマズダーと彼の陪神たちと共にありますように．（彼女に）平安あれ！

（参考の為に伊藤の翻訳を引用する）：これは（`ēn）[34]，スーレーン家の出たる（i `hač Sūrēn），左神策＜軍＞の＜i Sizinsay＞，永霊者たる＜一＞騎長（anōšarvān fratomasp）の娘なる（i `duxt i .....），王族の永霊者マーシーシュ（vāspuhr anōšarvān Māsīš）＜である＞．永霊者ヤズドカルト＜三世＞の 240 年（`sāl 200 ut 40 i anōšarvān Yazdkart）にして唐朝の 260 年（`sāl 260 i tanīkān），威光赫赫たる（varčāvand）常勝の大王（hamē-pērōzkar xᵛatāy）の咸通 15 年（`sāl 15 ..... San-tōn），そしてスパンドアルマト月スパンドアルマト日（ut `māh Sp. ut `rōč Sp.）＜すなわち＞建卯の月（jan-ma-ēn `māh）＜に，かの女は年＞ 26 で逝世者となった（pat 26 vitīrān `būt），そしてかの女

[33] あるいは「馬（氏）の娘」か．

[34] `ēn のように（`）を前に添えた発音表記は，当該の語がテキスト中では訓読語詞で表記されていることを示している．たとえば`ēn の場合は，伊藤のテキストでは ZNḤ と翻字されている．

の坐所は（`ut-aš gāh）＜今や＞最勝界たるガロードマーン（garōδmān i pahlom axᵛān）において（[`andar]）オーフルマズドとアマラスパンド諸神と偕にあることとなった（`apāk Ōhrm. ut Amaṛ. ..... `būt）. ＜かの女に＞平安（`drōt）＜あれ＞.

4 － 2　伊藤の読みと Humbach の読みの違いについて

上でも述べたように筆者の読みは基本的には Humbach のそれに従っている．伊藤の読みと Humbach の読みの重大な違いをここで提示しておこう.

1 行目の 2 番目の語を伊藤は w'spwhr と読み「王族」と訳した．（**図 2= A**）その後 w'spwhr は「主要な」を意味する語であることが明らかにされ, この読みは放棄された. 文脈からは「墓」を意味する語が期待され，Harmatta は 'stw(d)[']n'「納骨器」と読んだ．Humbach は，この語を，「墓」を意味するパフラビー語の 'sp'nwl [aspānūr] の誤写と見なす Gignoux の研究に言及して, n'spwl と読んでいる [35]．ササン朝滅亡前後のイランで作成された縦書きの墓碑銘にこれとよく似た表記の語で始まるものがあり，この読みに従う研究者は多い．Grenet もその一人である [36]．ただ MacKenzie の辞書に登録されたパフラビー語の 'sp'nwl [aspānūr] は，MacKenzie 自身が不確実であると考えており，この存在を疑う de Blois は西安墓誌のこの部分を g'swk「（居）場所」と読む [37]. 筆者は虚心に文字列をながめれば whšpwn' のように見えるので, waxš-bun「魂の基本・

---

[35] Gignoux, "Notes d'épigraphi et d'histoire sassanides", in: *Mélangés linguistiques offerts à Émile Benveniste*, Paris 1975, pp. 213-225, with one plate. Gignoux は 1972 年の段階でこの読みを提示している（Gignoux『上掲書』, p. 17b）．ここで Gignoux『上掲書』から回収されるテキストを提示しておく．テキスト中の下線部は，辞書の見出し語として登録されていない数詞その他であることを示している：(1) ZNH 'sp('nw)l 'nwšlwb'n m['sy]š y BRTH y 'nwšlwb'n（2）pltw[m]sp' y s'cn'[šy] y MN swlyn ŠNT <u>200 W 40</u> y 'nwšlwb'n（3）yzd[kr]t' <u>W</u> ŠNT <u>260</u> y tng[k'n] ŠNT <u>15</u> y ḥm'y pylwckl（4）ḥwt'y b[wl]c['wn]d ḥntwn <u>W</u> BY(RḤ)spndrmt <u>W</u> YWM spndrmt（5）pnmyn（?）BYRḤ PWN <u>26</u> wtyl'n YḤWWNt 'Pš g's LWTH 'wḥrmzd（6）<u>W</u> 'mḥrsp[nd'n] [BYN] [g]lwt[m']n y p'ḥlwm 'ḥw'n YḤWWN't <u>ŠRM</u>. その後発表された Gignoux 1986, p. 143, no. 732 では，2 行目の pltw[m]sp' を Harmatta 1971 に従い p'l[s]wmsp' と読んでいる.

[36] Grenet 教授は，この語を含むパフラビー語の墓誌についての未発表の研究を紹介してくださった：Cyrus Nasrollāhzādeh/ Ebrāhīm Qezelbāsh, "Une nouvelle inscription funéraire en moyen-perse à Dašt-e Rūm（Yāsūj, Iran）"（forthcoming）.

[37] ただし先行する ZNH との間に意味不明の文字連続があることを認めている.

基盤」と読んで墓を意味するものと考えたが，ただ全くの推測に過ぎない[38]．いずれにしても，「墓」ないしは類似の意味を持つ語が期待される．

漢文版では馬氏（の女）にあたる被葬者の名前も種々の読みが提案されている．（**図3= B**）まず，冒頭の m'- と末尾の -š はほぼ確実である．その間の文字が読み取りにくい．表面の凹凸か彫り損じがあったのかもしれない．写真をつぶさにみれば -š の前にある Humbach が w と読み Grenet が n と読む文字は，実際には下部で湾曲して -š につながっているので，この読みは不可能である．筆者には -hš に見える．その場合「娘」を意味する duxš が思い浮かぶ．全体は m'hdwxš = Māh-duxš あるいは m'dwxš「Mā = 馬（氏）の娘」と読むべきなのかもしれない．

2 行目の伊藤が prtwmsp [fratomasp] と読み「騎長」と訳す語を Humbach は pl[h]wz't [farroxzād] と読み，被葬者の父親の名前と考えた．z't の読みは確実であり，筆者も含めてその後の研究者はこの解釈を採用する．伊藤は漢文版の「兵馬使」にひかれて「馬」にあたる語を期待したようだが，パフラビー語にそのような語は存在せず，この読みと解釈には根拠がない．

同じく 2 行目で伊藤は syncn'sy [sizinsay] と読み，「左神策」の音写と見なした．下でも見るようにこの論文全般に於いて，伊藤は漢語の音写を想定する際，その発音として現代中国語の発音を参考にしている[39]．その語を Humbach は試みに d'cwnd'y 読み，中国語の音写かイラン語形か分からないとして翻訳していない．（**図 4= C**）そして Sundermann の提案 d'twnd'y = Dādwindāy（人名）に言及している．その場合は被葬者の父親の父親，すなわち祖父の名前になる．Baghbidi も Grenet も Sundermann に従いここに祖父の名前を想定し，Baghbidi は d'twyh，Grenet は d'(t)w(d'y)/d'(t)r(šn) と読んでいる．D. Weber はワークショップの席上，Grenet に d'twd't と読む提案をしたという．筆者は štrd'(l)[šahryār]「領主，支配者」とよみ，被葬者の父親の称号だと考えた．後に Grenet もこの読みを採用した．最後の文字 l は読みづらいが，残画で見る限り矛盾はない．先行する文字との間のスペースがやや広くなっている．

---

[38] pwn の綴りで bun を表記するのは奇妙だが，古い p が有声音のあとで b に変化したことを背景にした，似而非歴史的書記法と考えた．

[39] この点は Sundermann and Thilo「上掲論文」, pp. 446-447 がいちはやく批判している．

さらに 2 行目で伊藤が swryn と読み，ペルシア語の貴顕の家名 Sūrēn，漢文版の蘇諒に対応すると考えた語を，Humbach は g'w lyn と読む．（**図 5= D**）Humbach は sw/g'w と lyn（= ryn）の間には空白があり，直前の語が MN [az]「～から」であることを考え合わせれば，これは漢字 2 文字からなる地名に当たると考えた．そして Th. Thilo の意見を採用して，長安の東北にあった地名の高陵に比定した．なお Baghbidi は伊藤に従い swlyn と読み「Sūrēn 家」と訳している．一方，Grenet は Humbach の考えを採用している．

漢字の「陵（中古音 *liəng）」の発音が lyn で表記されることに全く問題はないが,「高（中古音 *kau）」が, パフラビー文字で k'w ではなく g'w と表記されたとは考えられない．Humbach はピンインによる表記の gao に惑わされたのであろう．筆者は syr-lyn と読み，漢語の地名と考える．この音写形から漢字を推定・特定することは不可能に近いが，被葬者が波斯人であったことを勘案して，関連のある地名をさがすと「疾陵（中古音 *dzʻiět liəng）」に逢着する．これは，西突厥滅亡後の龍朔元年（661），唐が設置した西域府に属する 16 の都督府の一つである波斯都督府の治所とした城の名称である．一般にシースターンの Zarang に当たるとされる[40]．バイリンガルの墓誌が作成された 9 世紀後半には，かつてのペルシア王の治所として史書に記録されるだけの伝説化した地名となり, 具体的な場所も原語も知られていなかったと考えられる[41]．「疾」の初頭の濁音は，この時期には無声化して ts- と発音されていた．筆者は，ペルシア語には存在しない [ts] の発音を近似した発音を表す文字 s によって表記していたと推定するのである．被葬者の父親の称号である štrd'⑴[šahryār]「支配者」にふさわしい出身地として，付会された地名だと筆者は推定した．

伊藤はこの語を swlyn と読み，漢文版の蘇諒に対応すると考えた結果，被葬者の女性の夫と父親が同一人物であるということになり，ここにゾロアスター教徒の風習で

---

[40] この間の事情については D. Agostini and S. Stark, "Zāwulistān, Kāwulistān and the land Bosi 波斯 — On the question of a Sasanian court-in-exile in the southern Hindukush", *Studia Iranica* 45/1, 2016, pp. 17-38, esp. 18-20 を参照せよ．

[41] ロンドンで開催された学会で発表したおり，出席者の一人であった N. Sims-Williams 教授はこの点について質問され，Zarang が原語であるのならなぜその名前を使わないのかという主旨の質問をされた．筆者はその場で，ここで述べた事情を，英語で分かり易く説明することができなかった．

ある近親結婚（xwēdōdah と呼ばれる）を想定したのであった．ただ近親結婚を忌み嫌い，同姓結婚さえ厳しく禁じた中国社会では，外国人であったにせよ近親結婚が認められたとは考えられないというのが，伊藤以後の研究者の大方の見解であった．Humbach の読みと解釈によって，近親婚の可能性は完全に排除された．

3 行目の伊藤が tnyk'n「唐朝の」と読む語については上記を参照せよ．筆者同様 Baghidi も Grenet も Humbach の読みと解釈 t'cyk'n「大食の（＝ヘジラの）」を採用する．張廣達がいまだに伊藤の読みに従っているのは，彼の碑文の成立背景に関する歴史解釈に影響されているに違いない．

4 － 3　Humbach の読み bgpw(ḥ)l と dtmyn をめぐって

残りの部分で興味深いのは伊藤が brc'wnd [varčāvand]「威光赫々たる」（4 行目）と pnm-yn [jan-ma-ēn]「建卯の」と読む語（5 行目）である．Humbach は各々，bgpw(ḥ)l [bagpuhr]「天子, 中国皇帝」, dtmyn [*didomēn]「二番目」と読み, 後続する BYRH [māh]「（暦の）月」と合わせて「二月」と解釈する．その後の研究者もそれに従っている．bgpw(ḥ)l と dtmyn は，碑面に彫られた文字の残り方に大きな違いがある．

5 行目の冒頭の dtmyn のほうは，筆画は非常に明瞭で字形は容易に読み取ることができる．Harmatta は ytmyw と読むが，これは Humbach と基本的に同じ文字列を認識していることになる．（**図 6**）パフラビー文字はいくつかの文字の形式が合流して区別がつかなくなっており，文字 d と文字 y，文字 n と文字 w はその代表的な例である．伊藤（1964, p. 28）は pnmyn と読んでいる．彼は解釈出来ない語を，無理矢理に二月の別名である「建卯[42]（十二直の建が卯の日にある月；ピンイン jian mao）」に当てるために，dt の部分の t の部分を分解して前半部を先行する文字 d と合体させて文字 p を表すとみなし，後半部分の垂直の筆画を文字 n と見なした．そしてこうして無理矢理読み取った文字 pn は文字 cn の書き損じであるとして，その cn は建のピンインの jian に対応すると考えたのであった．ちなみに建の中古音は *kiɛn である．伊藤が現代音を参考にすることの誤りは上でも指摘したところである．彼の牽強付会はこれにとどまらない．残りの myn を m- と -yn に分割し，m は「卯（ピンイン mao）」に対応し，

[42] Humbach（「上掲論文」, p. 81）が,「建卯」は中国語に存在しない表現だとするのは誤解である．

-yn は形容詞を派生するペルシア語の接尾辞と考えた．ちなみに張廣達はこの伊藤の解釈を疑問符付きで採用している．

Harmatta は Ecsedy と共同して ytmyw と読み，漢語で二月をあらわす乙卯（月）の音写だと考えた．これは乙卯の中古漢語の形式 *·iĕt mau に照らして，必ずしも受け入れられない推定ではないが，乙卯自体は Humbach（「上掲論文」, p. 81）が言うように漢語には存在しない表現である．Ecsedy は，十干の 2 番目の「乙」と，冬至がある 11 月を始まりにする天文暦では 4 番目の二月が卯月であることから，乙卯月という表現があったと推定したのであった．

これに対して dtmyn BYRH [*didomēn māh]「二番目の月」は，文脈からまさに期待される表現である．パフラビー語文献の専門家であった伊藤や Harmatta が，基礎語彙に属する序数詞を読み取ることができなかったのは不可解に見える．しかし，パフラビー語で「二番目」を表す語としては didom, dudī(gar), dowom などが知られていたが，[didomēn] は在証されていなかった．その一方で，接尾辞 -ēn は極めて生産的なので，このような形式が存在すること自体は不思議ではなく，この語を読み取った Humbach の慧眼をむしろ評価すべきであろう．筆者はこの形式に，バイリンガルの墓誌が作成された時代の，初期近世ペルシア語の影響を考えることができるのではないかと考えている．最近出版された初期ユダヤ・ペルシア語の文法書（L. Paul, *A grammar of Early Judeo-Persian*, Wiesbaden 2013, p. 94）で，Ezekier tafsir に一度だけ在証されるという「2 番目」を意味する duyumēn に，著者の Paul は次のように注釈している：Once in Ez（= Ezekier tafsir, YY), an ordinal number takes a redundant adjectivizing ending *-ēn*. 初期近世ペルシア語には，このように本来「二番目」を意味する語にさらに形容詞語尾 -ēn を添えた序数詞 dtmyn [didomēn] が存在していたのであり，この墓誌を作成したペルシア人の口語がここに現れている可能性があるのではないだろうか．

Humbach の bgpw(ḥ)l [bagpuhr]「天子，中国皇帝」は，中国の年号を導入するここの文脈から最も期待される語である．ソグド語仏典の奥書に見られる年号の表現も参考にされたい：k'w srγc'nch knδh 'wyn βγy βγp'wr x'y 'nkwyn 16-myk srδy "z「洛陽城で，神なる天子の開元 16 年であった」[43]．これに対して，伊藤の <u>b</u>rc'wnd [varčāvand]「威光

[43] D. N. MacKenzie, *The Buddhist Sogdian texts of the British Library*, Acta Iranica 10, Leiden/

赫々たる」は，初頭音の表記に問題があることを彼自身が認めている．Harmatta や Gignoux は b(wl)c('wnd) [burzāwand]「高貴なる」という語を認めようとしている．

この場合，冒頭の b 及び中間の p はほぼ明らかである．それ以外では，p の直後に短い縦線，末尾の表面が破損した箇所に l と読めそうな文字が見えるが，残りの部分は彫りが極めて浅いのか，およそ文字が彫られていないように見える．（**図 7**）つまり Humbach の bgpw(ḥ)l は碑文に残された筆画から確実な読みではなく，文脈から期待される語であり，残された筆画がその読みと矛盾しないに過ぎない．この点は，他の語を読む場合にも留意すべき点である．つまり，粗雑に加工された石の表面の凹凸や，柔らかい石に釘の先のような道具で文字を刻む際の困難さなど，いろいろな事情で期待通りの筆画が見られない場合がある．言い換えれば，この墓誌を読む場合，残された筆画から期待される語形を推定しながら解読する必要があるということである．筆者が štrd'(l) と読んだ 2 行目の単語の末尾の -l はそのような例である．また「咸通（中古音 *γăm t'ung）[44]」に対応する語は音写されているが，Grenet は文字 m は確認できないとして，hntwn と読んでいる．実際筆画から m と読むことは難しいが，文字 m の構成要素である小円を，もろい石面に刻む際に上手にそれができなかったことがあったように見える．（**図 8**）文字 m に当たる部分と twn の間にはスペースがあり，ハイフンのような横線で結ばれているように見える．その理由は分からない．

4 − 4　紀年について

2 行目では，伊藤も Humbach, Baghibidi, Grenet も，ヤズデギルド暦の紀年の数字を「240」と読む．この数字は，確かに 240 に見える．（**図 9= E**）874 年は 651 年を初年とするヤズデギルド暦では 242 年に当たるので，Humbach は，240 は 242 の誤刻だとしている．しかし Harmatta が指摘するように 40 を表す数字の最後には，短い縦棒が 2 本かすかに見える．これは後から書き足されたのだと考える．筆者は Harmatta 同様 242 と読んだ．

この墓誌の紀年のもう一つの問題は，被葬者の女性が死亡した日の日付である．こ

Tehran, 1976, p. 10.

[44] *γăm の初頭の子音は，この時期には無声音になっていた．

の年の唐の暦の二月二十八日はユリウス暦では 3 月 19 日に当たる．一方ゾロアスター教徒の暦では，スパンドアルマト月のスパンドアルマト日はユリウス暦では 3 月 22 日に当たる．この 3 日の違いをどう理解するかが問題になる．単なる誤りである可能性もあるのだが，Humbach（「上掲論文」p. 81）によれば Sundermann は，ゾロアスター教の終末論では，肉体が滅びた後も 3 日間魂は肉体と共に留まり，4 日目にあの世に旅立つとされていることと関連づけて説明することを提案したという．筆者もこの説明が妥当だと考える．5 行目の当該部分の筆者の読みと翻訳 wtyl'n YHWWNt [widerān būd]「逝去しつつあった」は，そのことを前提にしている．なお伊藤，Gignoux，Baghibidi の読みは筆者と同じだが，「逝世者となった」と訳している．Harmatta は wtwlt YHWWNt と読み she deceased と訳す．Humbach や Grenet は wtylšn YHWWNt と読み「彼女の死があった」と訳す．動詞 wider- の現在分詞 widerān，行為名詞 widerišn，過去分詞 widard のどれを読むかの問題だが，肝心の語末部分の表面が痛んでいて確認できない．（**図 10**）

5　おわりに

上でも述べたように，銘文の筆画は十分に明瞭ではない部分が相当数あって，すべての研究者のコンセンサスを得ることはできないように思う．その意味では筆者の読みも新しく別のテキストを提示したに過ぎないが，従来の読みに比べて，墓誌の起草者が意図した内容にいくらかでも接近できていればと思う．一方で，同僚の吉川教授のおかげで，60 年近くも通行してきた漢文版の読みを訂正できたのは大きな収穫であった．

図版 A：パフラビー語版（拓本）

図版 B：漢文版（拓本）

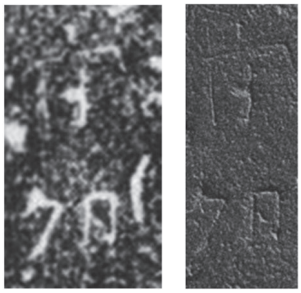


図 1：丁卯

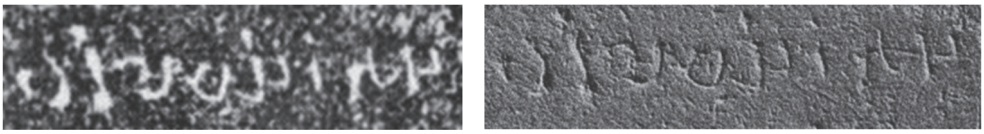


図 2= A: ZNH whšpwn'

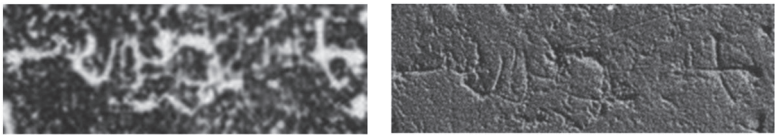


図 3= B: m (’) [hdw]hš

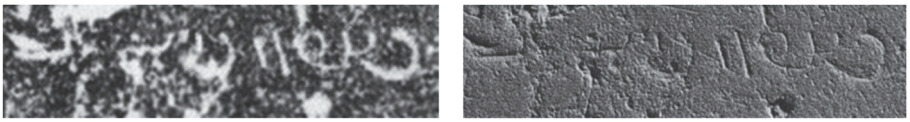


図 4= C: štrd (’l)

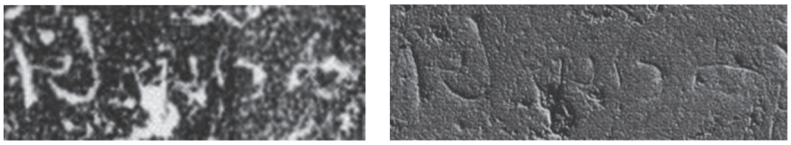


図 5= D: MN syr-lyn

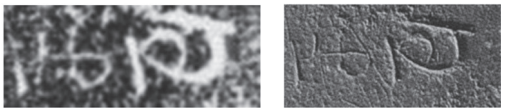


図 6: dtmyn

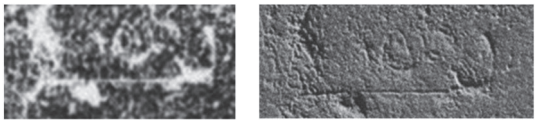


図 7: bgpw (ḥ) l

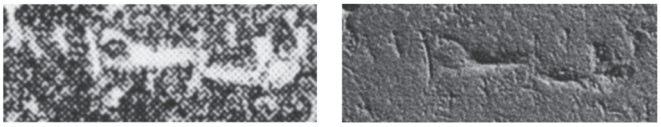


図 8：h (m) tw (n)

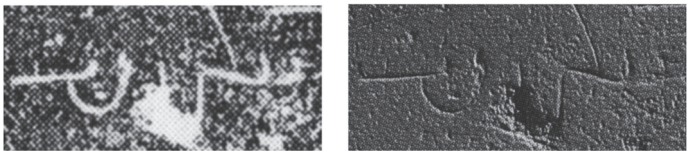


図 9= E：242

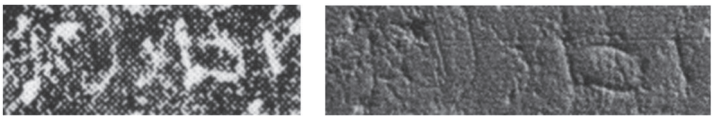


図 10：wtyl’n

①	Ito	Harmatta	Humbach	Baghbidi	Grenet	Yoshida	
1	ẒNḪ	ZNH	ZNH	ẒNE	ZNH	ZNE	ēn
2	w'spwhr	'stw(d)[']n'	n'spwl	'špwl	n'spwl	whšpwn'	A
3		ZY	ZY	Y	ZY	ZY	ī
4	'nwšrwb'n	'nwšlwb'n	'nwšlwb'n	'nwšlwb'n	'nwšlwb'n	'nwšlw(b')n	anōš-ruwān
5	m'syš	m('ḥ)šy	m['ḥn]wš	m'hwš	m'[h]nš	m('hdw)hš	B
6	y	ZY	ZY	Y	ZY	ZY	ī
7	BRTḪ	BRTH	BRTH	BRTE	BRTH	BRTE	duxt
8	y	ZY	ZY	Y	ZY	ZY	ī
9	'nwšrwb'n	'nwšlwb'n	'nwšlwb'n	'nwšlwb'n	'nwšlwb'n	'nwšlwb'n	anōš-ruwān

②	Ito	Harmatta	Humbach	Baghbidi	Grenet	Yoshida	
1	prtwmsp	p'l[s]wmsp'	pl[ḥ]wz't	plhwz't	plhwz't	pl[h]wz't	Farroxzād
2	y	ZY	ZY	Y	ZY	ZY	ī
3	Syncn'sy	s<'n>pnnšy	d'c/dwnd'y (?)	d'twyh	d'(t)w(d'y) / štrd'(l)	štrd'(l)	C
4	y	ZY	ZY	Y	ZY	ZY	ī
5	MN	MN	MN	MN	MN	MN	az
6	swryn	swlyn	g'w lyn(?)	swlyn	g'wlyn	(syr)lyn	D
7	ŠNT	ŠNT	ŠNT	ŠNT	ŠNT	ŠNT	sāl
8	200 W40	200 W42	200 W40	200 W 40 2	200 W 40	200 W 40(+2)	E
9	y	ZY	ZY	Y	ZY	ZY	ī
10	'nwšrwb'n	'nwšlwb'n	'nw'šlwb'n	'nwšlwb'n	'nw'šlwb'n	'nw{w}šlwb'n	anōš-ruwān

③	Ito	Harmatta	Humbach	Baghbidi	Grenet	Yoshida	
1	yzdkrt	yzdklyt'	ydzglyt'	yzdglyt'	ydzglyt'	yzdklylt'	Yazdgird
2	W						
3	ŠNT	(Š)NT	ŠNT	ŠNT	ŠNT	ŠNT	sāl
4	260	200 60	200 60	200 60	200 60	200 60	260
5	y	ZY	ZY	Y	ZY	ZY	ī
6	tnyk'n	tnyk'n	t'(c)yk'n	t'cyk'n	t'(c)yk'n	t'(c)yk'n	Tāzīgān
7	ŠNT	ŠNT	ŠNT	ŠNT	ŠNT	ŠNT	sāl
8	15	15	10 W 5	10 5	10 W 5	10 5	15
9	y	ZY	ZY	Y	ZY	ZY	ī
10	hm'y-pyrwckr	ḥm'ypylwckl	ḥm'ypylwckl	hm'ypylwckl	hm'ypylwčkl	hm'ypylwckl	hamē-pērōzgar

④	Ito	Harmatta	Humbach	Baghbidi	Grenet	Yoshida	
1	hwt'y	ḥwt'y	ḥwt'y	hwt'y	hwt'y	hwt'y	xwadāy
2	brc'wnd	b(wl)c('wnd)	bgpw(ḥ)l	bgpwhl	bgpw(h)l	bgpw[h]l	bagpuhr
3		ZY	ZY	Y	ZY	ZY	ī
4	sn-twn	ḥ(ymtwn)	ḥm tw[n?]	hym-twn	hntwn	h(m)tw(n)	hamtun
5	W						
6	BYRH	(BYRḪ)	BYRḪ	BYRH	BYRH	B(YRH)	māh
7	spndrmt	spndrmt	spndrmt	spndrmt	spndrmt	spndrmt	spandarmad
8	W	W	W	W	W	W	ud
9	YWM	YWM	[Y](W)M	YWM	[Y](W)M	[Y](W)M	rōz
10	spndrmt	spndrmt	spndrmt	spndrmt	spndrmt	spndrmt	spandarmad

⑤	Ito	Harmatta	Humbach	Baghbidi	Grenet	Yoshida	
1	pnm-yn	ytmyw	dtmyn	dtmyn	dtmyn	dtmyn	didomēn
2	BYRH	BYRḪ	BYRḪ	BYRH	BYRH	BYRH	māh
3	pt'	PWN	PWN	PWN	PWN	PWN	pad
4	26(sic)	20 8	20 4 4	20 4 4	20 4 4	20 4 4	28
5	wtyr'n	wt(w)l(t)	wtyl(š)n	wtyl'n	wtyl(š)n	wtyl'n	widerān
6	YHWWNt	YHWWNt	(Y)ḪWWNt	YHWWNt	(Y)HWWNt	(Y)HWWNt	būd
7	'Pš	'Pš	'Pš	APš	'Pš	APš	u-š
8	g's	g's	g's	g's	g's	g's	gāh
9	LWTḪ	LWTH	LWTH	LWTE	LWTH	LWTE	abāg
10	'whrmzd	'wḥrmzd	'wḥlmzd	'whrmzd	'whlmzd	'whrm(zd)	ohrmazd

⑥	Ito	Harmatta	Humbach	Baghbidi	Grenet	Yoshida	
1	W	W	W	W	W	W	ud
2	'mãsrspnd'n	'mḥrspnd'n	'mḥr'spnd('n)	'mhr'spnd'n	'mhr'spnd('n)	'(mh)r(spnd'n)	amahraspandān
3	[BYN]	PWN	(l)[wš]n'		(l)[wš]n	PWN	pad
4		lwšn'	ZY	lwšn	ZY	l(wš)n	rōšn
5	grwtm'n	glwt(m')n	glwt[m']n	glwtm'n	glwt[m']n	g'lwtm'n	garōdmān
6	y	BYN	W	W	W	W	ud
7	p'hlwm	'sḥm[']n	p'ḥlwm	p'hlwm	p'hlwm	p'hlwm	pāhlom
8	'hw'n	'ḥw'n'	'ḥw'n	'hw'n	'hw'n	'hw'n	ahwān
9	YHWWNt	YḪWWN't	YḪWWN't	YHWWN't	YHWWN't	YHWWN't	bawād
10	ŠLM	ŠRM	ŠRM	ŠRM	ŠRM	ŠRM	drōd

B　カラバルガスン碑文のソグド語版のテキスト・翻訳・訳注・語彙

0　研究の背景

本稿の後半ではカラバルガスン碑文（以下 KB 碑文と略す）のソグド語版のテキストを校訂する．上でも述べたように，筆者は 1988 年に発表した論文で，碑文のテキストと翻訳，訳注を発表した．その際は O. Hansen が 1930 年に提出し，既に半世紀以上も経たテキストと翻訳の改訂版を提出することが目的であった．奇しくも同じ頃，筆者とは独立してウイグル史を専門とする J. Hamilton はソグド語文献学の N. Sims-Williams とともに，Hansen（1930）の改訂版を準備していた．そして 1988 年 10 月に日仏の中央アジア学の研究者が京都で研究集会を開催した際，筆者と Hamilton は各々の研究の成果を発表した．その後も双方は独自に研究を進めていた．

その後 1994 年の夏に，森安孝夫（当時大阪大学教授）がモンゴル国において KB 碑文の調査をした際，主要な断片が現地に存在しないことと[1]，ソグド語版の Fragment 6[2] と Fragment 9 が同一の石の二つの面に刻まれているという，二つの重要な事実を発見していた．これは筆者が 1988 年の論文で提示した，碑文断片の復元案の修正を迫るものであった．筆者も 1997 年 8 月森安孝夫が率いる調査チームに同行して，モンゴル共和国においてカラバルガスン遺蹟と碑文を現地で調査することができた．残っている碑文断片の拓本を作成するとともに，碑文の本来のサイズを推定するために，石の断片の大きさを実測した．新たに作成した拓本に基づき，1988 年に提出したテキストを一部修正したが，100 年前に作られた拓本と比べると，碑文面の傷みは確実に進行しており，調査の報告書用に提出したテキストは，実質的には 1988 年のものと大きく変わらない．その頃，Sims-Williams 博士の好意により，博士と Hamilton が共同で作成したテキストと英訳を提供して頂いた．Hamilton は，Radloff が発表していたロシアにある拓本の写真版以外に，Société Asiatique に保管されていた de Lacoste が作成し

---

[1] 失われた石は，近隣の住民が小さく割って建築材料などとして利用していたことが後に判明した．この点については森安教授と筆者の共同研究を参照されたい．

[2] Fragment 6（= Frag. 6）など，ソグド語版の石の断片を表す番号は Hansen（1930）に従っている．

た拓本を利用して独自に解読を進めていた[3]．しかし後にソグド語の専門家との共同研究の必要性を認識したようで，自分の読みを記したノートを Sims-Williams 博士に提供し，博士はそれと Hansen（1930）や吉田（1988）のテキストを比べながら，独自の予備的なテキストを準備しておられた．筆者が提供を受けたのはその予備的なテキストと，Hamilton のノートであった．

転機が訪れたのは 2003 年であった．その年の 5 月に筆者と森安教授は Collège de France から招待され，KB 碑文を含む我々の共同研究の成果を 4 回にわたって講義する機会が与えられた．講義の準備を行う過程で，KB 碑文のソグド語版の改善と漢文面との比較を集中的に行った．その際, 漢文面の一つ断片[4]の位置を決めることに成功し，その結果，19 世紀末に漢文版の研究が始まって以来 100 年以上もの間懸案であった 1 行の字数を 90 字に決定することができた．講義では漢文面，ソグド語面の改訂版を配布し，ソグド語版については英訳も配布した．パリに滞在している間に de Lacoste の estampage を調査することができたことも大きな収穫であった．この estampage は一見すると表面に凹凸がある厚紙であって，明るい場所で見ると文字を読み取ることはできない．Hamilton 教授によれば，教授が探し出すまでは，estampage であることが理解されず包装紙として使われていたという．その結果ソグド語面では Fragment 1, 3, 4 だけが残っており，その他の estampage は失われたらしい．なお Fragment 9 については de Lacoste の探検記（de Lacste 1911, plate 17）に写真が掲載されている．筆者は Société Asiatique の図書館の地下室で，部屋を暗くして片手に懐中電灯，もう一方の手に鏡を持って，わずかに浮き上がった反転した文字に斜めに光を当て，浮き上がった文字を鏡に映して読むという作業を行った．なおこの作業は Hamilton が既に行っており，そうして得られた読みを Sims-Williams との共同研究では利用していた．勿論それだけでなく，Hamilton は Radloff の拓本も利用していたが，その際 Radloff 拓本の

[3] de Lacoste の拓本は，実際には所謂拓本ではなく，フランス語では estampage，英語では moulding と呼ばれるもので，水に濡らした厚紙を碑文の表面に押しつけ，それを剥がして陰刻された文字が見えるようにした型込めである．本論文では de Lacoste の拓本に言及するとき，適切な日本語の単語がないので，このフランス語の単語 estampage を使うことにした．

[4] この断片に属するテキストは発表されていたが，その石の形状やサイズは知られていなかった．森安／オチル 1999 では，今も現地に残るこの石に No. 5 という番号を振り当て，新たに拓本を作成した．

現物を保管するレニングラード（現在のサンクトペテルブルグ）にあった東方学研究所の S. Kljashtorny とも，難解な文字の読みについて意見を交換していたようだ．なお森安と共同で作成した漢文テキストは，注釈を添えない形で森安が 2003 年に発表した論文に引用されている．（**図版 4**）

次の転機は 2008 年頃で，Encyclopaedia Iranica の KB 碑文の項目を担当することになった．この機会にソグド語面を見直すことにしたが，その際，Hansen 1930, 吉田 1988，Hamilton と Sims-Williams の共同研究の成果として準備されていたテキスト，及び de Lacoste の estampage を調査した際に作成したノートを総合して，筆者が新たに提出するテキストを上下に並べて提示し，文字の読みに関して問題がある箇所を明示的に示す方法を採用した．この作業を行う過程で，いくつかの発見があり，それらを Encyclopaedia Iranica の項目に搭載しただけでなく，論文として発表した（Yoshida 2009a, Yoshida 2010, 吉田 2011，Yoshida 2011a，吉田 2013）．2017 年から，筆者と森安教授は懸案であった漢文テキストの翻訳及びその英訳と訳注，歴史的背景に関する共同論文の執筆のための共同研究を再開した．この共同研究は 2019 年の 4 月に完成し，2019 年に出版される運びとなった. それに合わせて筆者も, ソグド語版の最新テキスト，翻訳，訳注，語彙の準備した．こちらは英語版と日本語版を作成したが，日本語版である本稿では紙面を節約するために，英語版とは異なり，先行研究のテキストをすべて提示することはせず，筆者の最新のテキストを示すにとどめ，先行研究との読みの違いは注釈のなかで解説することにした.

I　導入

1　カラバルガスン碑文について

(A) 遺蹟と碑文

カラバルガスン碑文は 3 言語併用である．3 言語とは, ルーン文字表記のウイグル語，ソグド語，漢語である．ウイグル語版は破損が著しく，わずかながら単語が回収できる大きさの断片が 6 断片ほどであるが，残り二つの言語の面は一定程度残存している．漢文面とソグド語面の研究により，碑文は東ウイグル可汗国の第 8 代保義可汗（在位

808–821）に捧げられたもので，彼と彼以前の可汗の事績を記していることが判明している．そこにはマニ教が国教として導入された経緯も含まれていて，本碑文は東ウイグル可汗国と中国およびウイグルにおけるマニ教を研究するには第一級の史料になっている．

カラバルガスン遺蹟は，モンゴル国の首都ウランバートルの約 380 km 西，ウブルハンガイ・アイマクの北東部，オルホン河の左岸に位置している．ここは，8 世紀後半から 9 世紀前半にかけてモンゴル高原に存在した東ウイグル可汗国の首都の遺蹟である．遺跡は広大で少なくみつもっても 32 平方キロメートル以上の広がりをもつ．26 度東に軸線は傾いているが，ほぼ南北に細長い遺跡である．遺跡を囲む城壁は見当たらず，城邑の正確な区域は決められない．北東の隅に方形（404 m x 360 m）の宮城の遺跡がある（Dähne 2016, pp. 35–36）．碑文の断片は宮城から約 500 m 南にある大きな建物の中庭で発見された[5]．（**地図 1**）宮城との間には他の建物はなく，宮城のすぐ南に建てられていたことから考えて，この建物は東ウイグル可汗国にとって極めて重要な施設であったと考えられよう．

2009 年からドイツの考古学研究所が大規模な発掘調査を行っている．ドイツ隊の報告書では，筆者が宮城と呼ぶ遺跡を「宮城あるいは寺院地区（Palace or Temple District）」と呼び，碑文が見つかった遺跡を「マニ教の儀式複合施設（Manichaean Sacral Complex）」と名付けている．1999 年の段階で筆者は，碑文が見つかる場所はマニ教の教会があった場所である可能性を指摘していた（森安／オチル 1999, p. 223）[6]．なお東ウイグル可汗国がキルギスの侵攻により崩壊したとき，ウイグルの主要な部分は南西に移住し，天山を挟んでトルファンと北庭を冬と夏の都とする西ウイグル国を建設した．冬の首都があった高昌故城では，宮城のすぐ南にマニ教会の遺跡である Ruin K があるが，この配置はカラバルガスンのの配置と無関係ではないのかもしれない．

19 世紀の終わりから 20 世紀初頭にかけて，ヨーロッパや日本の探検隊が現地を訪れたときには 30 個ほどの碑文の断片が残されていたようだ．その後の研究で，それら

---

[5] この区域の発掘報告は Dähne 2017, pp. 27–85 にある．その報告で見る限り発掘品は少なく，宗教関連のものは見つかっていないように見える．

[6] Hüttel and Dähne（2012, p. 422）によれば，この可能性は Ramstedt が指摘していたのだと言う．

の石のうちで比較的に大きいものの位置を定めることができている．その様子は**図版 1，2** で示したとおりである[7]．3 言語のうち，漢文とソグド語は一方の広い面と両サイドの狭い側面に，ウイグル語版はもう一方の広い面一面にわたって刻まれている．漢文版は左半分とそれに続く側面，ソグド語の方は右半分と側面である．その横幅は，左半分が残っている漢文版を参考にすれば，176 cm 程度であったと推定される[8]．漢文は中央から始まって行は左に進み，角を削り取った面に XX 行目が刻まれ，XXI 行目以降は側面にある[9]．69 cm の幅の側面全体に漢字が書かれていたとすれば，全体で XXXIV 行あったことになる．ソグド語のほうは縦書きで，行は中央から右に向かって進み 24 行目まで回収できるが，24 行目はまだ側面に至っていない．側面の銘文を残す断片（Frag. 9）が一つ残っている．残された行とサイズから推測すると，裏面には 27 行程度，角を削った面に 1 行，側面に 17 行，全体で 45 行程度であったようだ．この状況は，ウイグル面が表で，漢文とソグド語面が裏であることを示しているだろう．なおウイグル語面では，ルーン文字は右から左に横書きされている．正面全体に文字が彫られていたとすると，全体で 137 行分のスペースがあるが，下方では文字が彫られていなかったことが判明しているので，それよりはいくらか少なかったと考えられる．小断片が残されているだけなので，全体の行数は分からない[10]．

碑文の復元図（**図版 1，2**）から分かるように，漢文版が最も良く残っており，ウイグル面では単語が回収できる石が 6 断片あるだけで，それらの相対的な位置は分からない[11]．本稿で問題にするソグド語版は，復元図からも見て取れるように，漢文版ほど

---

[7] 本論文では，ソグド語の断片は，Hansen 1930 が付けた番号（Fragment 1 ~ 10）で呼ぶことにする．

[8] 碑文のサイズについては，**図版 3** 及び森安／オチル 1999 のカラバルガスン碑文に関する記述を参照せよ．

[9] 漢文面の行はローマ数字であらわし，ソグド語面の行と区別している．

[10] 行数の推定の根拠は森安／オチル（1999, pp. 210–215）に述べてある．ただし，そこでは碑身の高さを 360 cm と推定していたが，漢文版の 1 行の字数が 90 字と確定したことにより，ここでは 400 cm と推定している．その結果，横書きのルーン文字の行数の推定に差が出てくることになった．

[11] ただし森安／オチル 1999 の 7c は，ソグドの Frag. 6 及び Frag. 9 と同じ石に属するので，その位置はある程度推定可能で，碑文全体の中段に当たる．また一つの断片（Atlas XXXV-6/9，下段右端）には 5 行残っているが 4 行目と 5 行目の間に 2 行分の空白があり，その 5 行目の下は空白になっている．このことからこの断片は，銘文の末尾とそれに続く後書きを含んでいて，

ではないが比較的によく保存されている．ただし草書体で書かれたソグド文字は，碑文に適しておらず，表面がわずかに風化しただけでも文字の判読が困難になるので，たとえ石が残っていても文字を読み取れないことがある[12]. 碑文の本体の上には龍頭（螭首ちしゅ）があり，そこには五角形の碑額がある．この部分では逆にルーン文字面がよく残されており，漢文版やソグド語版では破損が著しい．

（B）ソグド語テキストを読み取るための図版，及び漢文版とウイグル語版のテキスト

ロシア人の Yadrintsev が 1889 年に碑文を発見して以降，Radloff は遺跡を調査し拓本を作成した．この拓本は彼の *Atlas der Altertümer der Mongolei*, St. Petersburg, 1892（以後 Atlas と略す）に複製されている．Radloff 以後も幾人かの研究者が遺跡を訪れて拓本を採った．例えば日本では現在 2 セットの拓本がある．1 セットは京都大学と立命館大学に分蔵されている．本来京都大学にあった拓本の一部が，なぜ現在立命館大学にあるのかその理由を筆者はよく知らない．もう一セットは国会図書館に保管されている．羽田亨（1957, p. 310）によれば，京都大学が所蔵する拓本は清朝の高級官僚で 1910 年頃，庫倫（現在のウランバートル）辨事大臣を務めた三多が作成させたものであるという．羽田は大谷探検隊の野村栄三郎が採った拓本も利用しているが，そちらは現在は所在不明である．筆者の印象に拠れば国会図書館所蔵の拓本も，三多の手によるものように見える．三多は何セットか拓本を作ったのであろう．北京図書館で筆者と森安が調査した拓本もそのうちの一つであったと考えられる．写真版で見る Radloff 拓本と日本にある二つの拓本を比べると，全体として Radloff 拓本のほうが優れている．このことはテキストの読みに関する注釈からも明らかであるが，Frag. 2 に関してその差は著しく，日本にある拓本では多くの場所で文字の判読が困難になっている．Frag. 2 の表面の劣化はその後も進んだようで，1997 年に我々が採った Frag. 2 の拓本から文字を読み取ることは実際上不可能である．

1909 年に Bouillane de Lacoste はカラバルガスンを訪れ，estampage を採ったこと

ルーン面の一番下の部分であった可能性がある．

[12] 大ざっぱに見積もって，漢文版は全体の 3 分の 1，ソグド語版は 4 分の 1 程度が残されていると言える．

は上で述べた．de Lacoste の estampage は Radloff 拓本に比べて良く読める部分が多くあり，資料としては極めて貴重である．惜しいことにいくつか断片の estampage は失われたらしく，ソグド語版に関する限り現在残っているのは，Frags. 1, 3, 4 の 3 点しかない．それらは現在までのところ Hamilton が利用しただけである．フィンランドの A. Heikel が 1890 年に撮影した写真も発表されているが，この種の碑文の写真，とりわけ印刷された写真版は文字の解読には適さないことは言うまでもない．

漢文版の研究は 19 世紀から始まり，いくつかのテキストが発表されている．上でも述べたように筆者は森安と共同で最新版を作成し，2019 年度の『内陸アジア言語の研究』で発表する．本稿で引用する漢文テキストとと読み下しは文は，その共同研究から引用している．研究史も含めて詳しくはそちらを参照されたい．ルーン文字テキストは，森安が作成したテキストと翻訳（森安／オチル 1999, pp. 219–224 にあるもの）が最新版である [13]．

2　ソグド語面の復元：断片の位置の推定（**図版 1，2**）

ソグド語版の Frags. 1, 2, 3, 4 の位置関係は Atlas で既に明らかにされている．すなわちその図版の XXXII には，4 つの断片が正しく配置されている．Frag. 5 は漢文版も含んでいるので，その相対的な位置関係は推定できる [14]．1930 年に Hansen がソグド語のテキストを校訂したときに，Frag. 6 の相対的な位置を発見した．その際，Hansen は Frag. 6 の 4 行目に第 5 代可汗の即位記事を読み取った．最大の断片で，1 ～ 23 行の冒頭部を残す Frag. 1 の 13 行目には第 4 代可汗の即位記事，14 行目には第 6 代可汗の即位記事が見えるので，Frag. 6 の第 4 行は，碑文全体の 13 行目に当たることが判明する．Frag. 4 と Frag. 6 の間のスペースがどれほどであったかは分からないが，文脈を考慮するとある程度の推定は可能であり，それほど大きな破損ではない [15]．ちなみに Frag. 5 はロシアに持ち去られている．ロシアに持ち去れたソグド語の断片については下記も参照せよ．

---

[13] Zieme（2003）もあるが，概ね森安／オチル（1999）の研究に従っている．

[14] ただし絶対的な位置は，漢文版の 1 行の字数が確定して始めて決定できるのである．漢文版の図版を参照されたい．

[15] 下記 13 行目のテキストと注釈を参照せよ．この点に関しては Hansen（1930, p. 11）も参照せよ．

Frag. 7 は形状から明らかに碑文の下端であるが，1988 年に筆者が Hansen のテキストを改訂したとき，Frag. 7 の 3 行目が，本体，すなわち Frag. 1 の 18 行目の冒頭に直先行することに気がついた：

(7/3)... rtms γrβ ‖ (1/18) prwrt'k ...「…そしてまた何 ‖ 回も…[16]」

Frag. 7 の他の行について調べて見ても，同じように Frag. 1 の冒頭と接続することが確認できるから，この推定は正しいことが判明する：

(7/4)... γr'n wrcy-'w (') kw ‖ (1/19) (') krtw δ'rt ...「…大きな安寧を ‖ を彼はもたらした…」

(7/5)... pr mγ-wn t'z-yk'n'y ‖ (1/20) ['x]š'w'nyh ...「…全大食の ‖ 領土において…」

Frag. 9 の 7 行目にもこの特筆すべき表現，mγwn t'z-'yk'n'k 'xš'w'nh「全大食の領土」という語句が見られるので，筆者は Frag. 9 の 7 行目は本体の 20 行目に属するものと推定した[17]．しかしながら Frag. 9 に関するこの推定は，森安が 1994 年に現地で，Frag. 6 と Frag. 9，さらにルーン文字碑文の 1 断片（森安／オチル 1999 の 7c = Atlas XXXV-6）が一つの同じ石の断片に刻まれていることを発見したことによって，覆された．Frag. 9 は実際には碑文の側面に属することが判明したのであった[18]．この石のサイズを測定した結果，Frag. 9 の第 1 行は，全体の 32 行目付近に対応することが分かる．

1997 年夏の現地調査で，それまで全く知られていなかったソグド語の小断片を発見した．わずかに 3 行しか残ってしないが, 行の末尾の数文字と枘（ほぞ）が残っており，碑文の下端を形成していたことが分かる．形状から Frag. 7 と接合することが判明し，実際に現地では両断片を接合して写真を撮影した（森安／オチル 1999, plate 14o）．この断片の 1 行目と，Frag. 1 の 13 行目の冒頭が連続したテキストを示す：

... 'xš']w'nty ‖ (1/13) [w] (yδβx) s pw z-r'yš wβ'「…領土において ‖（マニ教は）障碍なく広まった…」

---

[16]（7/3）のような表記は，Frag. 7 の 3 行目であることを示す．

[17] 吉田 1988, p. 25 には，この推定を前提とした復元図を提示していた．後に Hamilton と Sims-Williams も同じ推定をしていることを知った．

[18] この発見によって作り直した復元図（**図版 1**）を参照されたい．Hansen（1930, p. 11）も Frag. 9 が側面に属する可能性を示唆していた．しかしながら彼の根拠は，Frags. 7, 9, 10 がどれも小さい断片で，側面に属する可能性があるということに過ぎなかった．実際彼（Hansen 1930, p. 12）は Frag. 9 がカラバルガスン碑文の断片ではないという可能性さえ示唆していた．

後に筆者は，Chavannes and Pelliot（1913, p. 178, n.）がパリに小さい碑文断片のestampageがあり，それは他には知られていない断片であることに言及していたことを思い出した．彼らによると，そこには碑文の始まり部分が残っているということであった．それ故，吉田1988の復元図では，この石をFrag. Parisと呼び，Frag. 1に連続する位置にこの小断片を置いた．しかしおそらくChavannes and Pelliotが言及するのは，まさにこの断片であったと考えられる．この論文でも，この断片を引き続きFrag. Parisと呼んでおく（**図版1**）．ちなみにこの断片には反対の面も残されているが，そちらの面は平滑で文字が刻まれていないので，ルーン面の下端には空白部が存在していたことが知られる．この点については上記も参照せよ．[19]

2016年になってエルミタージュ博物館の学芸員であるP. Lurje博士が同僚のElikhina博士と共同で発表したところによれば，同博物館でKB碑文のソグド語版に属する2小断片を発見した．この2断片は互いに接合するだけでなく，Frag. 7とも接合するという（**図版1**）．結果としてこれはFrag. Parisとも接合することになる．筆者がP. Lurje博士に知らせたように，未発表の2断片というのは正しくなく，その内の1断片は，Frag. 10としてHansen 1930に於いて発表されていた．筆者は新しく見つかったテキストを，本論文に引用することを快諾して下さったP. Lurje博士に感謝する[20]．なお，接合後の断片は本体の11–17行目の終わりの部分に含んでいるが，ここではそれをFrag. Rus.（= Fragment Russia）と呼ぶことにする．

3　ソグド語版の研究の流れ

KB碑文のソグド語版の研究は100年以上の歴史がある．Frag. 5の石そのものがロシアに持ち帰られると，早くも1891年にRadloffはその第2行目をウイグル語で読み解こうとした．当時はソグド語自体が知られていなかったのであるから，仕方の無いことでもあった．1909年になってF. W. K. Müllerは，Radloffがウイグル語で解釈した部分がソグド語で書かれていることを指摘し，そこにソグド語単語を2語読み取った．

[19] Radloffが，ルーン面の上端は空白であったと言うとき，彼もこの同じ断片に基づいていた可能性が高い（森安／オチル 1999, p. 213）．

[20] 本論文ではLurje博士のテキストを一部改めた．

ただ 2 番目の単語の読みには一部誤りがある[21]．このように 1909 年の段階で，ソグド語で書かれていることは明らかになったのだが[22]，その後 20 年あまり研究は発表されなかった．しかし 1930 年になって Hansen は全テキストを発表した．彼の発表したテキストを見ると，かなりの部分を正しく読んでいる．とりわけウイグルの可汗の名前を正しく読み取ることができたのは高く評価できる．またこのおかげで，Frag. 6 の位置も決めることができたのであった．当時彼が見ることができたのは Atlas にあるロシアの拓本の写真版，Heikel の写真やロシアの拓本の写真であって，ソグド語研究がまだ十分に進んでいなかった段階でこれほど良く読めたことには感服する．その後，多くのソグド語文献が発表され，ソグド語についての知識は飛躍的に増えたが，Henning 1937 や同 1938 において KB 碑文の極一部について改善案が提示されたことはあったものの[23]，1988 年に筆者が改訂版を発表するまでは Hansen のテキストが使われ続けた．下に Radloff が読んだ部分をその後の研究と比較・対照してみた．

Fragment 5, 2 行目

---

[21] 我が国の羽田亨は 1912 年に発表した論文（「窣都語の回鶻碑文」『芸文』3/1, 1912.1；『羽田博士史学論文集　下巻言語・宗教篇』京都 1958, pp. 39-43）で，Radloff の読みとそれを批判した Müller の読みを紹介し，Müller が正しいことを確認しているだけでなく，モンゴル高原の遊牧民の間にもソグド人がいた点に注意を喚起している．

[22] さらに Müller は，Frag. 1 の 13 行目と 14 行目に可汗の名前を読む事ができただけでなく，それを漢文版の XIII 行目と XIV 行目と比較している．また比較的に保存状態が良い Frag. 9 のテキスト全体も提示しているが，そのテキストもほぼ正しく読めている．彼はそれを漢文版の VII-XII と比較しようとしているが，現在では Frag. 9 は側面に属することが知られており，この提案は受け入れられない．

[23] やや長くなるが，Henning が注釈した読みをここに集めておく．Henning（1938, p. 550）では，トカラ語の名称問題を扱う際に，彼が Hansen に従って twγr'kc'ny と読む語を，19 行目を引用し詳しく解説している．現在筆者はこの twγr'kc'ny を twγr'ystny と読む．19 行目の Hansen が m'γwny “ganz” と読む語を Haloun and Henning（1952, p. 203, n. 2）では m'γw'y “broke” と読んでいる．Henning 1937 では以下のような語についての議論がある：'[β]t'δ'nyh（Frag. 8, line 5: p. 119）, 'γš'w'nty（= 'xš'w'nty, Frag. 9, line 9: p. 96）, 'γšnyrkw（= 'xšnyrkw, line 17: p. 88）, kδ'm（line 4: p. 57）, kδ'm 'yδ'k（line 15: p. 68）, p'ryc（line 5, etc.: p. 83）, *pcγwzty（line 15: p. 76 “bedecken”）, *prγ'nš（現在は pr γny, line 8: p. 55）, ptcγš-（= ptcxš-, line 12: p. 93）, pts'k（line 1, etc.: p. 86 “Denkmal”）, ptwyst（line 20: p. 78）, s'rβ'γty（現在は xrl-wγty, line 20: p. 104）, wyδβ'γs（= wyδβ'xs, Frag. 9, line 8: p. 87）, wyδp't（line 14: p. 102）, wym'nt（現在は wyš'nt, line 21: p. 82）, wyn'ncykw（line 18: p. 96）, wysprδ（現在は šyr p'δ, line 18: p. 96）. Lurje 2010 には KB 碑文の人名が多数引用されているが，それらには Hansen 1930 の読みを踏襲している場合があり注意を要する．この点については筆者の書評 Yoshida 2012, p. 204 を参照せよ．

Radloff（1891）: *pylksww yynync* “anerkend Ini[n]tch（Mökö Tegin）”

Müller（1909）: *np'γštw δ'rnt* “haben es geschrieben”

Hansen（1930）: *np'γštw δ'rym* “haben wir gesezt”sic

Yoshida（1988）: *np'xštw δ'rym*[24]「我々は書いた」

吉田 1988 以降の研究の進展については上記を参照せよ.

II　KB 碑文に記録された歴史的事件について[25]

ソグド語のテキストを提出するのに先だって，碑文に記録された二三の事件の歴史的な背景について考えて見たい．北庭をめぐるウイグルとチベットの熾烈な争奪戦は 790/1 年に起こったが，漢文版では XV 行目に記録されている．この戦いについては森安（1979 = 2015, pp. 230-274）に詳しく研究されている．しかるに，ソグド語版には対応する記述が全く見当たらないので，ここでは触れない．Yoshida（2009a）では，ソグド語版の 19 行目（漢文版の XVI 行目）に記録されたクチャでの戦闘と于術（= Tughristan）での壊滅的勝利について論じ，同時代のコータン語の世俗文書に記録された事件と比較することによって，798 年の事件であるとした．ちなみに同じ論文では，漢文版の XX 行目にチベットとカルルクを西に向かって追撃し，フェルガナで大略奪を行った事件を，やはりコータン語文書を援用して 802 年の事件であるとした[26].

1　3 言語版の相互の関係について

まず 3 言語版における碑文のタイトルを見てみよう．タイトルは龍頭にある碑額に

---

[24] γ と x の違いは, 転写のシステムがこの間に変化したことによるもので, 実質的な差違ではない. なお本論文での読みは吉田（1988）と同じである.

[25] 歴史的な背景を考察するにあたっては，漢文銘文に現れる天可汗を第 7 代懐信可汗（在位 795–808）と見るか，第 8 代保義可汗（在位 808–821）と見るかで大きな違いがある．筆者は天可汗＝懐信可汗説を支持するが，その根拠は森安との共同論文で詳しく論じたのでここでは繰り返さない．また，東ウイグル可汗国とアッバース朝との関係について，筆者は単行の論文を執筆し現在印刷中であるので，これも本稿では含めない.

[26] これらのコータン語文書に関しては Zhang Zhan（2018）に新しい研究がある．この問題については吉田（印刷中）も参照せよ.

刻まれている[27]．最も良く残っているのはウイグル語版で，一部復元しているが次のように読む事ができる．

ウイグル：[b]u tängrikän [ay] tängridä q[u]tbulmïš alp bilgä tängri uyγur qa[γan ... bitidimiz]「神のごとき Ay Tängridä Qutbulmïš Alp Bilgä 可汗［を讃えるための］この［碑文を我々は書いた］」

漢文版とソグド語版はほぼ失われているが，幸い本文第 1 行目に繰り返されているので，復元する事ができる．

漢文 : 九姓迴鶻愛登里囉汨没蜜施合毘伽可汗聖文神武碑幷序

ソグド語：'yny "y tnkry-δ' xwtpwl-mys(sic) 'l-p pyl-k' βγy 'wyγwr x'γ-'n γwβty-'kh pts'k np'x(š)[tw δ'rym]「この Ay Tängridä Qut Bulmïs Alp Bilgä（という名前の）神のごときウイグルの可汗を賞賛するためのモニュメントを我々は書いた」

ウイグル語版もソグド語版も「この」を意味する指示詞で始まっていることが知られるので，ウイグル語版とソグド語版は並行する文面を示し，漢文版はそれらとは全く異なる表現であったことが推定されよう．漢文版はタイトルに限らず本文も，中国の伝統的な碑銘の様式と文体で作成されていたと考えられる．この事実は，ウイグルの宮廷には書記集団が二つあったことを示唆するであろう．一つはソグド・ウイグル集団であり，もう一方は中国人の書記集団である．このようにウイグルに 2 種類の専門家集団があったらしいことは以下に引用する，第 2 代可汗（在位 747–759）の事績を

[27] 3 言語のタイトルは次のように配列されている．ウイグル語版は横書き，漢文とソグド語は縦書きで，漢文版は中央から始まり左に行は進む．ソグド語版はその逆で，中央から右に向かう．漢文版とソグド語版は本文第 1 行目に基づく復元形である．

漢文／ソグド語面	ウイグル語面
1　九姓迴鶻愛登	1 [b]u tängrikän
2　里囉汨没蜜施	2 [ay] tängridä q-
3　合毘伽可汗聖	3 [u]tbulmïš al-
4　文神武碑并序	4 [p] bilgä täng-
	5 [ri](uyγur)qa-
1　'yny "y tnkryδ' xwt	6 [γan　　]
2　pwl-mys 'l-pw pyl-k' βγy	7 [　　]
3　'wyγwr x'γ-'n γwβty'kh	8 [　　]
4　pts'k np'xštw δ'rym	9 [　bitidimiz?]

記念する Šine-Usu 碑文の一節からもうかがえる：

W5: suγdaq tavγačqa säläŋädä bay balïq yapïtï bertim「私はソグド人と漢人のためにセレンゲ河畔にバイバリク（富貴城）を建設せしめた」（森安他 2009, pp. 20, 41）

Šine-Usu 碑文のこの一節は，ソグド人と中国人の集団が，技術者集団や文書行政を行う集団としてモンゴル高原にあったウイグルの領内に連れてこられ，そこに新たに建設された都市に定住させられたことを示すものと理解されている．ソグド語版とウイグル語版が並行する表現になっているのは，ソグド語版だけでなくウイグル語版も，ウイグル語を理解するバイリンガルのソグド人書記集団の手になるものであることを示していると考えられる[28].

それでは次に本文に於いて，ソグド語版と漢文版がどれ程一致し，また異なるのかを見てみよう．そのためにここで選んだのは，牟羽可汗が安禄山の乱に介入することになった経緯を記す箇所である．これは漢文版では VII 行目に，ソグド語版では 9 行目にある．

漢文版，VII: 使，幣重言甘乞師，併力欲滅唐社．○可汗忿彼孤恩竊弄神器，親統驍雄，與王師犄角，合勢齊駈，剋復京洛（使いし，幣は重く言は甘くして師を乞い，力を併せて唐社を滅ぼさんと欲す．可汗は彼の孤恩にして神器を竊弄せんことを忿いかり，親みずから驍雄を統すべ，王師と犄角きかくし，合勢して齊駈せいくし，京洛（＝洛陽）剋復す）．

ソグド語版，9 行：(1)ZY ptškw'nh "γt w'nkw ZY cymyδ t(r)γty'kh β(r')yδt ZY ZKn z-'wr *δβrδ' ZY c'nkw βγy 'xšywny 'y(n)y ptškw'(n)h ptyγwš(x)wt(y ')M 'rps[t'(2)]kw 'sp'δy p(r)'yw kw βγp(wr)st(n)w s'r x[r'(4)](m)tδ'rt xyδ 'sp'(δy)['n ... ...]「(1) そして（可汗への）依頼のメッセージが来た：「この逼迫（した状況）から救って下さい．そして彼に援助を与えて下さい.」神（のごとき）帝王はこの依頼のメッセージを聞いたとき，自ら強力な（2）軍隊とともに天子の国（＝中国）へと（4）赴かれた．その軍隊の [< 大きな破損 >]」

[28] ソグド語版にウイグル語の要素が見られることも，ソグド人の書記がバイリンガルであったことを示唆するだろう．

二つのテキストでは，記録されている事件の順序はほぼ同じであるが，同じ事件が全く異なる側面から記録されていることが知られる．ソグド語版と漢文版の関係がこのようなものであるので，難解なソグド語版を読み解こうとするとき，漢文版は相対的によく保存されてはいるものの，一般に期待されるほど有益ではない[29]．以下では漢文版とソグド語版に記された事件の対応の概略を示す．対応表の中の == は，対応する事件の記録がないことを示す．ただし，保存状態の良くない碑文なので，対応する記録がない場合それが破損によるものか，本来存在しないのか区別できない．

	漢文	ソグド語
タイトル	I	1
碑文の起草者	I-II	1-3
可汗国の創始	III-IV	4-5
阿史那氏の突厥の制圧	V	6-7
第 1 代，第 2 代可汗	V-VI	7
牟羽可汗と安禄山の乱	VI-VII	7-9
マニ教の導入	VII-X	10-13
第 3 代から 7 代可汗までの継承	XI	13-14
保義可汗による懐信可汗の補佐	XII	14-15
即位前の懐信可汗	XIII	16-17
キルギス征服	XIII-XIV	18
北庭争奪戦	XIV-XV	==
クチャにおける吐蕃の敗戦	XVI	19
真珠河まで敵を追跡する	XVII	==
在地の諸王の服従	XVIII	==
敵を追跡して大食に至る	XIX	==
敵を追跡してフェルガナに至る	XX	==

[29] Henning は一度ならず，ソグド語版を研究しようとしても信頼できる漢文版のテキストと翻訳がないことを嘆いている（Henning 1938, p. 550, n. 2，idem 1949, p. 158）．

突騎施と帰順してきたカルルク	XXI	20
カリフの服従とマニ教の繁栄	XXII	21-23

2　東ウイグル可汗国とマニ教（1）

次にウイグルにおけるマニ教に関してKB碑文にはどのようなことが記録されているか見てみよう. 従来この記録はKB碑文に含まれる最も重要な情報の一つと見なされ, 長年にわたって研究されているが, 多くの点が不明のままになっている. 現在残されている部分に関するかぎり, 漢文版ではVII-X行とXXII行の2箇所にマニ教に関する記事を認めることが出来る. ソグド語版は漢文版より破損が大きいにもかかわらず, 漢文版より多くの箇所でマニ教が話題になっている：7–10行, 17–19行, 21–23行, *37行; Frag. 8の2行, 5行. 森安が校訂したウイグル語版（森安／オチル 1999, pp. 219–224）は小断片に過ぎないが, それでいてかなりの箇所でマニ教に関連する語が在証されている：No. 7c, 5行, 12行；No. 12, 2行, 4行, 7行, 13行. この場合にも, ソグド語版とウイグル語版の密接な関係を見て取ることができる.

2－1　マニ教導入の経緯

東ウイグル可汗国へのマニ教導入に関わる記事は, 漢文版のVII行からX行目にかけて, ソグド語版の10行から13行にかけてに見られる. まず事の発端を記したソグド語の10行目を見てみよう.

line 10: (1) (δβ)tyk(w)'nxw(n)cw 'krtw δ'r'nt s't δynykt "z-y<r>'nt ZKw βγy m'rm'ny δynh(w'βr)c'nkw 'yny(n'p)t 'βškrty wβ' βγy 'xš(')y-wny 'M('rp)[s(2)]t'kw '(s)p'δy pr'yw mδy('w)ytwk'n z-'y(h)[(4)s]('r "γ')z-'nt "(γ)t[ ]kw s't•γ•t(rt)[y ... ...(6)](n) ctβ'r ptšm('r••••δ•••)[... ... ...]「(1) 彼らは再び戦闘を行なった. 異教徒たちはみんな神なるマール・マーニーの宗教をそれほど迫害したので, この人々は追放された. 神（のごとき）帝王は（2）強力な軍隊とともに, ここオチュケンの地に連れて来はじめた [< ある程度破損 >（6)] 数にして四 [< 大きな破損 >]」

ソグド語版からは, 牟羽可汗が洛陽にいたとき, マニ教徒たちは迫害されており, 可汗は彼らに助けの手を差し出し, マニ教僧侶をオチュケンの地, すなわちカラバルガ

スンに連れてきたことが分かる.

森安と筆者が校訂した漢文テキストについての研究によれば，最初カラバルガスンに連れてこられたマニ僧は，一般に考えられているように 4 人ではなく 5 人であった. すなわち「法師」と呼ばれている僧侶と，睿息を筆頭とする 4 人である[30]. 残念ながら対応するソグド語版は「数（の点で）は 4」という表現が残っているだけで，この問題を解決するためには役に立たない. 漢文版に関する森安と筆者の理解は，法師と呼ばれている僧侶はウイグル人がマニ教に改宗するのに大きく貢献し，彼は一般僧侶から昇進して mahistag の地位を得た[31]. おそらくこの時はじめてカラバルガスンに mahistag の座が設けられたのであろう.

columns VII–VIII:（VII）可汗乃頓軍東都，因觀風〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓**法**（VIII）*師*，將睿息等四僧入國. 闡揚二祀，洞徹三際. 況法師妙達明門，精*通*七部，才高海岳，辯若懸河. 故能開正教於迴鶻. 〓〓〓〓〓〓〓〓〓***對***爲法，立大功績，乃**爲***默*傒悉德[32].（可汗は乃ち軍を東都に頓し，因りて觀風して［…… 法］08 師は睿息ら四僧を將いて入國し，二祀を闡揚せんようし，三際に洞徹す. 況いわんや法師は明門に妙達し，七部に精通し，才は海岳より高く，辯は懸河の若ごとし. 故に能く正教を迴鶻に開く.［…… 應］對して法の爲ために大いなる功績を立て，乃ち（法師？は）默傒悉德と［爲なる］.）

マニ教ウイグル語で書かれた初期のウイグルマニ教教会史に関するテキストには，mahistag に言及する文書が 2 点存在する. これは mahistag の座が一定の期間カラバルガスンに存続した事を示唆するのであろう. ここではその 2 つの文書の関連する部分

---

[30] この誤解は，先行研究では法師の直前にある「況（いわんや）」に十分な注意が払われなかったことから生まれたと考えられる.

[31] マニ教の僧侶の位階は以下の通りである：(1) 世俗の信者（KB 碑文では聴士と表記される），(2) 一般僧侶（KB 碑文では僧徒と表記される），(3) mahistag（KB 碑文では音写形「默傒悉德」が使われている；全マニ教世界で 360 人），(4) aftādān（漢訳マニ教文献では拂多誕と音写される；72 人），(5) možak（KB 碑文では慕闍と表記されている；12 人）. 慕闍の一人はこれらの信者たちの頂点に立ち教皇の役割を果たした. KB 碑文では法王と呼ばれている. KB 碑文の時代には法王はまだバビロニアにいたと考えられる.

[32] 漢文テキストでは，破損している部分で残画が見える場合，斜字体で，完全に欠損した文字を推定して復元した場合，太字で表記する. 太字の斜字体は，推定復元した文字とわずかに残った残画に矛盾がない場合である. 〓は欠損した文字を示す.

を引用する：(1) U 168 II = T II D a^2 verso は 795 年の出来事を記録する；(2) U1 = T II K Bündel Nr. 173 は 803 年の事件を記録する.

(1) ymä tängri mani burxan tängri yiringärü barduqïnta kin biš yüz artuqï äki-i otuzunč laγzïn yïl-qa ötükäntäki nom ul'uγ'ï tükäl ärdämlig yarlaγqančučï bilgä bäg tängri mar niw mani maxistakk ayγ'ïn bu äki「さて，神聖なるマニ仏が天国に赴きしより後 522 年後の豚歳（西暦 795 年）に，オテュケンにいる教義の長，（即ち）完全なる徳があり慈悲深く賢いベグ，（即ち）神聖なるマール・ネーウ＝マーニー・マヒスタクの御命令によって，この二［以下欠］」（森安 2015, pp. 552–553).

(2) tängri-kän uyγur boquγ/boγuγ xan qočo-γaru kälipän qoyn yïlqa üč maxi-stak olurmaq üčün možakkä kingädi「テングリケン（天なる君主，聖君主）なるウイグルのボクグ汗は高昌にお越しになって，羊歳に 3（人の）マヒスタクが（モンゴリアに）着任するようにと慕闍（モジャク）に相談した」（森安 2015, pp. 245–246).

Frag. 8 の 5 行目には 'βt'δ'ny'「aftādān であること, 拂多誕の地位」という語が見える. ルーン文字面にも aftādān という語は在証されるので（森安／オチル 1999, p. 222)，後の時代に状況に変化があり，ウイグル可汗国の首都たるカラバルガスンにあったマニ教教会の地位が引き上げられ，aftādān の座が設置されたことが推定される．この状況は保義可汗の時代に完成したマニ教の讃歌集である Mahrnāmag の奥書からも確認できる．この奥書では，ウイグル領内の 6 つの都市の一般信者の名前が寄進者として収録されている．6 つの都市は，高昌にいた慕闍の教区に属する 6 人の aftādān の座が設置されていた場所であったと考えられる[33]．ただその最初の部分は破損があり，当該の都市の名前は残っていない．しかし可汗が一般信者の代表になっているから，この都市が Ordu Balïq すなわち首都たるカラバルガスンであることは疑いがない．Frag. 8 もこのルーン文字の断片も，碑文の中の位置を定めることができないので，aftādān の座が何時設置されたのかは不明のままである. ただ, 上でものべたように KB 碑文が見つかっ

[33] 残存している 5 つの都市は，(1) Pnžknδ（北庭)，(2) Cyn'ncknδ（= 高昌)，(3) 'kwcyk（= クチャ)，(4) 'rqcyk（= 焉耆)，(5) 'wcwrcyk（= ショルチュク）である（Yoshida 2009a, pp. 352–353).

た建物がマニ教教会であったとすれば，そこに aftādān の座が設置してあった可能性が高い．

伝統的にシャーマニズム的な宗教を持っていたウイグルの人々に，マニ教のような禁欲主義の唱道宗教を布教することは，極めて困難であったに違いない．KB 碑文によれば，臣下たちは，初めはマニ教に改宗することを拒否していたらしい．

VIII–IX:（VIII）于時，都督・刺史・内外宰相■■■■■■「■■■■■■■■■（IX）■今悔前非，願事正教.」奉○旨宣示，「此法微妙，難可受持.」再三懇*請*.「*往*者無識，謂鬼爲佛．今已悞真，不可復事．特望■■，■■■■.」■■■*曰*，「既有志誠，任即持賣應有刻畫魔形，悉令焚爇．祈神拜鬼，並■■■．■■■■■■■■■■「時に都督・刺史・内外宰相らは［... ...］「［... ...］$_{09}$今は前非を悔い，正教に事つかえんことを願う」と．旨を奉ずるに宣示すらく，「此の法は微妙にして，受持す可きこと難し」と．（都督・刺史・内外宰相らは）再三懇請すらく，「往者かつては識る無く，鬼を謂いて佛と爲す．今や已すでに真を悞さとり，復ふたたび事つかえる可からず．特ただ（＝ひたすら）［...］を望む」と．（可汗は）曰く「既にして志誠有り，即ち應有あらゆる刻畫魔形を持賣して，悉く焚爇せ令しむるに任す．神を祈り鬼を拜するは，並みな［...］（中止せよ）」と.」

ソグド語版と漢文版をつなぎ合わせてみると，可汗が改宗した後，臣下たちは心を入れ替えて改宗したいと可汗に願い出たように推測できる．漢文版の「再三懇 [請]」は，臣下たちが可汗にお願いした状況を記録しているのであって，Chavannes and Pelliot（1913, p. 193）が「懇 [請]」の主語を可汗とみなし，“Par deux et par trois fois, avec sincérité [je l’ai étudiée]” とフランス語訳するのは，明らかに誤りである．彼らはこの発言が可汗によるものだと誤解し，「懇」の後の破損部に，漢文としては極めてありにくい [je l’ai étudiée] を補った．しかしソグド語版の 11 行目には「あなた方は（マニ教を）受け入れることはできない」あり，12 行目には「その時，神（のごとき）帝王は同意して，命令を発した：『あなた方は受け入れなさい.』」とある[34]．宗教を受け入れる主語が 2 人称複数形になっていて，命令しているのは可汗なのである．従って「此法微妙，難可受持」は，可汗が臣下たちに発した言葉であったことになる．

[34] 原文は（wy）δp（’）t（β）γy ’xšy-wny pty-s（yn）t prm’nh pr’m’y w’nkw ZY ptcxšδ となっている．

漢文版では，臣下たちは偶像を焼き払うように命令されている．対応するソグド語版では，偶像を焼き払う場所は γr'(m')kw(n')m(z-')yh「富という名前の土地」と読むことができる．筆者は，これは上で引用した Šine Usu 碑文に見える Bay Balïq「富貴城」ではないかと考えている．

漢文版では，ウイグルの可汗と臣下立ちがマニ教を受け入れたことを知って，法王はそれを讃えたとある．その部分とそれに続く一節を引用する：

> X：法王聞受正教，深讃虔〓，〓〓〓〓，〓**黙***傒***悉***徳*領諸僧尼，入國闡揚．自後○慕闍徒衆，東西循環，往來教化．「法王は（ウイグルが）正教を受けたるを聞きて，深く虔〓を讃たたえ，[… …]，黙傒悉徳は諸僧尼を領して，入國し闡揚す．自後，慕闍と徒衆は[35]東西に循環し，往來して教化す．」

Chavannes and Pelliot（1913, p. 195, n. 1）が論じているように，この法王は当時バビロニアにいたマニ教の教皇であったと考えられる．筆者は，吉田（2000, p. 57 及び Yoshida 2010）において，Chavannes and Pelliot の説を受け入れず，この法王は慕闍を指していると主張したことがあった．その理由は，筆者が研究していた，ベゼクリク出土の 11 世紀初め頃のマニ教ソグド語の手紙において，手紙の受取人の慕闍 Mār Aryāmān Puhr が，ソグド語で δrm'yk xwt'w「法の王」とも呼ばれていたからであった．ただその後の研究で 11 世紀初めのころ高昌にいた慕闍は全マニ教世界のトップ，すなわち教皇でもあったことに気づき，法王は慕闍と同意だとする旧説を放棄した（Yoshida 2019, pp. 43–45）．

さてソグド語の 12 行目の中ほど，Frag. 6 に含まれる部分は以下のように読むことができる：

> (6)] ('sky?) ZY c'δr c'nkw βγy (mry) nyw (rw) 'n m(w)z-'k(') [「(6) マニ教徒たちは往来した（?）」上方と下方に（＝東西に）．神（のごとき）マール・ネーウ・ルワーン慕闍は [オルホンの宮廷にやってきた（?）]

この一節から，ウイグルがマニ教に改宗した当時の慕闍はマール・ネーウ・ルワーン（Mār Nēw Ruwān）であったことが判明する．ルーン面の断片 No. 12 の 4 行目には

---

[35] Chavannes and Pelliot は「慕闍の徒衆」と翻訳し，慕闍自身が循環往来したとは考えていなかった．

tängri mar n[ ]「神のごときマール・N…」と読める箇所があり，これはソグド語版のこの部分に対応するのではないかと考えられる（森安・吉田共同論文参照）．また森安（2015, pp. 25–26）は，ウイグルマニ教史の断片である Mainz 345 にも対応する記事が認められるとしている．筆者はまた，やはり牟羽可汗の時代の事を記したウイグルマニ教史の断片で，書体からモンゴル時代の写本と考えられる断片 81TB10: 06-3 に現れ，名前が nyw ʼwc と表記された慕闍は，この nyw rwʼn が伝承の過程で崩れた形式だと考える（Yoshida, forthcoming a）．81TB10: 06-3 によると，この慕闍ははるばる Tughuristan からモンゴル高原にあったウイグルの宮廷にやって来て牟羽可汗に歓迎された[36]．このように考えると，慕闍のマール・ネーウ・ルワーン（Mār Nēw Ruwān）がオルホンの宮廷にまで赴いたことは 81TB10: 06-3 だけでなく，KB 碑文の漢文版でもソグド語版にも記録されていたことになる．ただ彼の名前は漢文版には残っていない．筆者は別に論考（Yoshida, forthcoming a, b）を準備して，牟羽可汗の時代のマニ教導入の経緯の顛末について論じた．筆者の推定によれば，以下のような段階を経たようにだ：

i）牟羽可汗とマニ教の遭遇（マニ教の伝導使節団がウイグルの宮廷を訪れたのかもしれない）[37]：Mahrnāmag の書写が始まる 761/2 年より以前（史料無し；筆者の推定）[38]

ii）家臣 Tarkhan の反対のせいでいったんは躊躇した牟羽可汗は，最終的にマニ教を信仰するようになる（U72/U73）[39]．

iii）763 年牟羽可汗が洛陽で遭遇したマニ教僧侶 5 人をウイグルに連れ帰る（KB 碑文）

---

[36] 筆者はこの Tughuristan は，ショルチュクないしは焉耆を指す名称であることを論じた（Yoshida 2018a）．

[37] ウイグルがマニ教を導入するそもそもの始まりに当たる．従ってこの時をウイグル語で uluγ bašlaγ「偉大な始まり」と呼んでいたと考えるのは必ずしも無謀ではないだろう．従来は uluγ bašlaγ は中国の年号の上元（760–762）あるいは乾元（758–760）の翻訳だと考えられていた．前者の推定については Bang and von Gabain（1929, pp. 425–426）及び Clark（2000, pp. 90–99），後者は Palumbo（2003, p. 271）を見よ．しかしながら，ウイグル語でもソグド語でも，中国の年号は音写されるだけで翻訳された例は存在しないので，この推定は極めて危うい（森安 2015, p. 540）．

[38] 筆者は，81TB10: 06-3 の中で当時 200 点の書物がウイグル宮廷に運び込まれたと記録されていることから，Mahrnāmag はウイグル宮廷に送るべく 761/2 年に書写を始めたが，完成が間に合わなかったのだと推定した．

[39] ウイグルマニ教史の文献 U72/U73 の最新の研究は Clark（2017, pp. 134–147）参照．

iv）中国からの僧侶の布教は成功し，mahistag の座が設置された教会がカラバルガスンにできる（KB 碑文）

v）マニ教導入に反対していた家臣たちも改宗する（KB 碑文）

vi）バビロンにいる法王もウイグルのマニ教受容を讃える（KB 碑文）

vii）中央アジアのマニ教僧侶と Tughuristan（ショルチュクないし焉耆）のマニ教教会に住持する慕闍の Mār Nēw Ruwān がウイグル宮廷を訪問する（KB 碑文，81TB10: 06-3，P. t. 1283，Mainz 345; Cf. Yoshida, forthcoming a）

viii）唐の領内にマニ教寺院を建設させる；768 年と 771 年（Chavannes and Pelliot 1913, pp. 261–263, nos. X, XI, XII）[40]

3　東ウイグル可汗国とマニ教（2）：改宗後のマニ教関連の記事

（a）天可汗（＝懐信可汗）と天使ヤコブの比較（17–18 行）

天可汗たる第 7 代懐信可汗の勇猛さは，2 度にわたりマニ教の天使ヤコブのそれに喩えられている：

17 行：rty xwty y(')xy (')[(2)x]šy-wn'k wm't ky pr y'kwβ βr'y-(št)'k 'xšnyrkw xypδ[(4)]CWRH *(pyst)δ'rt「そして自らは勇猛な（2）帝王であって，天使ヤコブの特徴で自分（4）自身を飾り立てていた（?）.」

17–18 行：(Frag.Rus.)']xš'w(nδ)['(7)]ry w'δy nysty L' wm't pr /18/(1)y'(k)[wβ βr]('yš)ty 'xšn(y)rkw wysprδ γr'n γny ZY mrt'nyh wyn'ncykw 'krtw δ'rt「/17/(Frag. Rus./7)支配者の座に就いていなかった．/18/（1）天使ヤコブのように至るところで大きな技倆と男らしさを示した.」

敦煌出土のウイグル語文献では西ウイグルの可汗が天使ヤコブに喩えられている：

kün tängritäg körtlä ay tängritäg yaruq yakoβ frišti täg alp ärdämlig ...「太陽神のように麗しく，月神のように明るく，天使ヤコブのように勇猛である」（Hamilton 1986, p. 40, ll. 51–53）.

マニ教およびグノーシスの宗教において天使ヤコブが果たす役割については “Jacob as an angel in Gnosticism and Manichaeism” と題する Böhlig（1978）の論文が参考になる.

[40] vi）–vii）と viii）の相対年代は確定できない.

さらに Yoshida（2019, pp. 138–139）も参照せよ.

(b) 懐信可汗によるマニ教復興（16–17 行）

マニ教を導入しソグド商人と結託して対外拡大路線を採る牟羽可汗は，779 年に反対派の従兄弟に殺害され，この従兄弟が第 4 代可汗に即位した．第 4 代可汗がマニ教に対して好意的ではなかったことは容易に想像できる．KB 碑文のソグド語版には興味深い一節があって，そこには牟羽可汗ののち懐信可汗がマニ教を復興したように読むことができる．そしてこのとき以降，マニ教は名実ともにウイグルの国教として，西ウイグル国の時代まで引き継がれていくことになった．16-17 行に以下のような一節がある：

> 16-17 行：c'nkw /17/(1)(••••)[ ](p)wkw 'xšy-wn'k z-mnyh "xw'š wβ' ZY wyδp't δ(yn)m(y)ncw pts'k δ(βty)w k'm "(x)w('š)t「(1) [...] 牟羽帝王の時に "xw'š（不明語）があったように，その時に宗教のモニュメントをもう一度 "xw'š（不明語）しようと欲した.」

残念ながら，ここで "xw'š（或いは 'nγwnšt, etc.）と読んでいる語の読みと解釈は定まらない．しかし文脈から，牟羽可汗のときに存在したマニ教に関する施策を，懐信可汗が復活させようとした事が記されていることが分かる．近年のドイツ隊が，KB 碑文が発見された建築遺構コンプレックスを発掘した際の報告書によれば，この遺構はかつて一度改築されたようで，2 段階の建築層があるという（Dähne 2016, p. 36; idem 2017, pp. 27–85）．ソグド語版のこの箇所は，そのことと関連するのではないだろうか．また上では，Boquγ Xan[41] 即ち懐信可汗が 803 年に高昌にいる慕闍を訪れ，3 人の mahistag を就任させる相談をした記録を引用したが，牟羽可汗のときに mahistag の座がカラバルガスンに設置されたことを考慮すれば，そのこととここの一節を関連づけることも可能かもしれない[42]．また牟羽可汗も懐信可汗も唐の領内にマニ教寺院を設置させたことが知られているから（Chavannes and Pelliot 1913, Texts X, XI, XII, XIX and

[41] Clark（2009）は Boquγ Khan は牟羽（Bögü）可汗 であるとするが，筆者はこの説は採らない．詳しくは森安（2015, pp. 547–553）を参照せよ.

[42] ただこれは 803 年のことなので，懐信の即位前後に当たる KB 碑文のこの位置に言及されるとすると，早すぎる気がする.

XX)，そのことと 16–17 行目の記事を結びつけることも不可能ではない．しかしながらこの場合も，中国でのマニ教寺院の設置は懐信可汗の末年の 807 年の事績なので（Chavannes and Pelliot 1913, pp. 275–276)，碑文のこの場所で記録されたとは考えにくいだろう．

(c) 慕闍の座を Tughristan[43] から高昌に移動する？（19-20 行）

19–20 行目には，798 年にクチャと Tughristan でチベットを大敗させた後のこととして，以下のように記されている：

19–20 行：/19/(7)...](t)δ'rt 'rt'wty ZY nγ'wš'kty γr'n wrcy-'w(')kw /20/(1)(')krtw δ'rt

「/19/(7)」彼は [...] をした．（そして）マニ教の僧侶と聴者（＝一般信者）たちに大きな安寧を /20/（1）もたらした．」

Yoshida（2018a）や Yoshida（forthcoming a）でも論じたように，牟羽可汗の時慕闍の座は，ショルチュクあるいは焉耆に設置されていた．しかるに 803 年には慕闍は高昌にいたのであるから，その時までに慕闍の座は高昌に移動していたことになる．ここで引用した 798 年直後の記事に，「（天可汗は）マニ教の僧侶と聴者に安寧をもたらした」とあるのは，より安全な高昌に慕闍の座を移動したことを言っているのかもしれない．

(d) アッバース朝によるマニ教迫害の阻止と西方（？）でのマニ教のモニュメントの設置（20–23 行）

KB 碑文では懐信可汗の在位期間の終わり頃の記事に，アッバース朝下のマニ教迫害について触れている：

20–21 行：/20/ rtms pr mγ-wn t'z-yk'n'y /21/(1)['x]š'w'nyh(pyz)t ZY p(r)šk'r wm't「/20/

そしてまた全大食の /21/（1）領土に，弾圧と迫害があった．」

そしてこれに続く部分では，天可汗＝懐信可汗が下方（＝西方）に赴き，ホラーサー

[43] Yoshida（2018a）で論じたように，遅い時期のウイグル語のテキスト 81TB10: 06-3 の Tughuristan（twγwryst'n）は KB 碑文に見えるソグド語形の Tughristan（twγr'ystn）の後の時代の形式である．

ンのアミールや土地のアミール，王たちに命令を発したと記している．マニ教の信者であり守護者でもある可汗からこの文脈で発せられた命令は，マニ教の迫害をやめるようにという内容であったと考えられる．22 行目では可汗が，巨大な宗教的モニュメント[44]を下方の地（西方の地）に設置したと述べている．そして可汗のこのような行いのおかげでマニ教教会は安寧を享受した：

22–23 行：/22/(7)]tδ'rt ZY ZKwy mγ-wnw 'xš'w'nyh pr βγ(y)/23/(1) [m'rm'ny δynh wγ] (š)y ZY xws'nty-'kh 'krty p'rZY(pry)-myδ 'xš'w'nyh cw δynmyncw pts'k(●●●●●) [「/22/ そして全領土において，神である /23/（1）[マール・マーニーの宗教] において [喜] びと満足が生じた．なぜならこの領土において宗教のどんなモニュメントが [あろうとも…]

この一節は漢文版の XXII 行目に対応するのであろう：

XXII 行：〓〓寺宇，令僧徒寛泰，聴士安樂「寺宇［...］，僧徒をば寛泰に，聴士をば安樂にせ令む」

これと非常によく似た状況が，10 世紀前半の西ウイグル国時代にも起きていたらしい．al-Nadīm はその著書 Fihrist の中で, 以下のような事件を伝えている．Reeves（2011, pp. 228–229）の英訳を引用する：

The last time when they were visible was during the reign of al-Muqtadir（908–932 CE）, when they kept close to Khurāsān. Out of fear for their lives, those of them who were left concealed their affairs and roamed about in this region.（Eventually）around five hundred of their members gathered together in Samarqand. When their business became public, the governor of Khurāsān sought to put them to death. Then the king of China — I think it was（actually）the lord of the Toghuzghuz — sent a message to him saying: 'In my country there are many more Muslims than there are people of my religion in your country,' and he swore to him that if he should kill a single one of them, he would kill the whole community（of Muslims）who were with him.（He also promised）he would demolish the mosques and leave

[44]「モニュメント」と翻訳しているのは pts'k というソグド語である．この語の具体的な意味は十分に明らかではない．下記の言語に関する解説も参照せよ．

among the remaining lands lookouts against the Muslims in order to（identify and）kill them. So the governor of Khurāsān refrained from harming them, and he accepted the *jizya* from them.

つまりイスラム教徒がマニ教徒を迫害しようとしたとき，マニ教を国教とする西ウイグルの可汗がそれを阻止しようとして圧力をかけたというのである．この場合にもほぼ百年前と同じような状況であって，一種の脅しの手紙を出しているだけで，実際に軍隊を派遣した，あるいは戦闘が行われたというようなことはなかったことは注目される．

（e）第 8 代保義可汗の時代のマニ教

Mahrnāmag の奥書によれば，この賛歌集の書写は 761/2 年に始まり，一旦は Ark（＝焉耆）のマニ教会に未完成のまま放置されていたが，保義可汗（在位 808–821）の時代に完成したという．このように懐信可汗を継承した保義可汗もマニ教を保護したことが知られる．彼の時代に属する碑文面にもマニ教に関する記事は見られる．Frag. 9 の 6 行目，全体では 37 行目に当たると推定される箇所で δynh「宗教，教会」という語が見られる．残念ながら文脈を欠いているので具体的にどのような内容であったかは分からない．Frag. 8 は碑文のなかの位置は不明だが，そこの 5 行目に ’βt’δ’ny’「aftādān であること，拂多誕の地位，拂多誕の座（？）」が在証される．これが，カラバルガスンにあったマニ教教会が，ヒエラルキー上 1 ランク引き上げられたことと関係があるのではないか，そしてそれは保義可汗の時代であったのではないか，という推定に関しては上記を参照せよ．

III　ソグド語テキストの校訂：テキスト，翻訳，訳注

1　言語と書体

まず碑文の言語と書体など文献学にかかわる問題について考えて見よう．KB 碑文はソグド語資料のなかでは，9 世紀に属する唯一のまとまったテキストである[45]．有名な

[45] 例えばラダックの岩壁銘文も 9 世紀にものであるが，ごく短い落書きの類いである．

ムグ文書や仏教ソグド語文献の大半は 8 世紀前半の資料であり，マニ教文献やキリスト教文献は一般に 10 世紀に属すると考えられている．このような事情から KB 碑文は，9 世紀前半のソグド語やソグド文字がどのようなものであったかを知ることができる唯一の資料であり極めて貴重である．

（A）文字と書体

KB 碑文のソグド語テキストに用いられている書体は，丁寧に書かれた草書体（cursive script）であって，大方の仏典に見られる楷書体（formal script）ではない．モンゴル高原にはソグド文字で表記したソグド語碑文が 3 点見つかっている．すなわち KB 碑文，ブグト碑文[46]，セヴレイ碑文である．6 世紀の終わり頃に書かれたブグト碑文の書体は古風な草書体だが，セヴレイ碑文の書体は KB 碑文のそれと酷似していて，同じように東ウイグル可汗国時代のものだと考えられる[47]．楷書体では，文字 ’（alif）は文字本体から突き出た「角」が 2 本あるのに対して（**Figures（a）**参照）[48]，草書体では 1 本しかない点で異なっている．そして文字の特徴は，丁寧に表記されたマニ教ソグド語教文献のそれと異ならない．そしてその特徴の多くは 8 世紀初めのムグ文書でも，結婚の契約文書（Nov. 3 及び Nov. 4）のような丁寧に書かれた文書の書体と共通する．しかしながら一つの特徴は注目される．それは文字 l，すなわち r（resh）の下に補助記号を添えた文字である[49]．この補助記号は文字本体に比べて大きく書かれたフック状の形態をしていて，典型的なウイグル文字の l の形をしている．これに対して大方の仏典では，文字 l は，r の下に小さな r が添えられている．これらの特徴を含めて，KB 碑文のソグド文字の特徴は以下のようにまとめられる（後掲の **Figures（a）**参照）：

（a）語頭の ’（alif）は典型的な草書体の形状を示し「角」は 1 本しかない：’xš’w’nh

---

[46] ブグト碑文については筆者の最新の研究を参照せよ：吉田（2019），Yoshida（2019b）．

[47] セヴレイ碑文のテキストと歴史的背景については Yoshida（2018）を参照．ちなみに筆者は，牟羽可汗（在位 759–779）のときに建てられたと推定した．

[48] **Figures（a）**では漢字音を楷書体のソグド文字で表記した資料 So 14830 から引用した．’nt’y は「乃」の音写，l”y は「来」の音写である．So 14830 に見られる漢字音の特徴から，8 世紀前半の写本と考えられる（Yoshida 2013a）．

[49] KB 碑文では文字は縦書きされているので，実際には，補助記号は文字の右横に添えられる．なお KB 碑文のソグド文字では，他には補助記号は使われていない．

（b）s と š は明瞭に区別することができる：’xš’w’nh vs. nysty ’skwδ’skwn

（c）β と y は語末以外では区別できない：γrβ’ky’kh, γrβ, nysty

（d）n と ’ は語頭以外では概ね区別できない：t’z-’yk’n’k, nysty

（e）γ はときに後続の文字と分かち書きされる：x’γ-’n, γrβ’ky’kh, γrβ

（f）y はときに後続の文字と分かち書きされる：pty-synt, γrβ’ky’kh

（g）z は ideogram の ZK や ZY 以外では後続の文字と分かち書きされる：t’z-’yk’n’k

（h）l に添えられた補助記号はウイグル文字と同じ形状である：pyl-k’

可汗の事績を記録しそれを広く喧伝する目的で建てられる KB 碑文のような碑銘には，当然草書体ではなく威信の高い楷書体の方が用いられることが期待される．このような状況は，中央アジアのマニ教徒にとって，このタイプの丁寧に書かれた草書体は正式な書体であり，碑銘や権威ある宗教文献を書くための書体であったことを示唆する．実際，フォリオ形式の写本[50]に書かれたマニ教文献で用いられる書体はこの書体である．少なくともソグド人マニ教徒を含むあるグループのソグド人にとっては，筆者が丁寧に書かれた草書体と呼んでいる文字は一種の楷書体になっていたのであり[51]，それがウイグル文字の正式な書体（楷書体）として受け継がれていったようだ．ウイグル語の印刷仏典の書体は基本的にこの書体であるように見える．無論この問題は今後，ウイグル語の研究者と共同で研究を進める必要があるであろう．

（B）言語

（i）通時的な観点から

9 世紀の初めに書かれた KB 碑文のソグド語は，全体として見てみると，8 世紀の前半に書かれたいわゆる古典的なソグドに比べて幾分か遅い時代の特徴を示していると言える．まず 3 人称複数の人称代名詞として wyšn ではなく wyš’nt が使われているこ

[50] ここでフォリオ形式の写本に限定したのは，巻子本の場合，漢文仏典の裏に書かれる場合が多く，そのような場合写字生の練習に用いられていることがあるからである．

[51] ソグド語の仏典にもこの書体で書写された事例が知られている．それは敦煌で発見された『金剛般若経』のソグド語訳で（Or. 8212/176, cf. MacKenzie 1976），いわゆるスートラ体ではなく，ムゲ文書の結婚契約文書のような書体で書かれている．従来の楷書体を「楷書体 1」，KB 碑文タイプの書体を「楷書体 2」と呼ぶことができるかもしれない．

とが挙げられる．wyšn は古代イラン語の *awaišānām にさかのぼる複数斜格形であるが，wyš'nt はそれにさらに複数を表す活用語尾を付けた二次的な形式で，それ自体は直格形として機能する．それの斜格形は wyš'nty であり，KB 碑文でも 19 行目に在証される．これらは仏教文献のような古典的なソグド語資料にはみられない形式である．

未完了形（imperfect）は過去形（preterite）と機能面で区別がなく，同じ文脈で交換可能になっている：

5 行：γrβ srδ 'xš'w'nh **z-γtw δ'rt** c'nkw xwty tnp'r **p'ryc** ...「何年もの間領土を維持した［過去形］．彼が身体を棄てた（＝身罷った）とき［未完了形］，…」

古典的なソグド語では二つの時制の違いは，フランス語の単純過去と複合過去の区別に似ていて，未完了は物語の地の文で使われ，過去形は会話文の中で使われる傾向が顕著である．しかしこの区別は後の時代のソグド語では失われる傾向にあり，どちらか一方が主に使われるようになる[52]．上で引用した文では，どちらも地の文であるが，過去形も未完了形も区別なく使われている点で，古典的なソグド語より変化した段階を示している．

文と文とをつなぐ接続詞の rty（およびその弱化形の rt）は古典的なソグド語では極めて頻繁に用いられ，定動詞を含む全ての文は，主節であれ従属節であれ基本的に rty で始まる．しかし遅い時期のソグド語ではこの接続詞は使用されなくなる．そして場合によっては，本来は並列の接続詞であった ZY（= 't, 'ty）で代用されることがある．KB 碑文では rt(y) はわずかに 10 例である．また次の例のように，接続詞 c'nkw「～したとき」で始まる文の主節が ZY でマークされている例も見つかる．これも古典期の言語と比べて遅い時代の特徴である：

7 行：c'nkw 'xš'wnδ'ry w'δy(ny)sty **ZY** ctβ'r kyr'n wy(zp)' ZY pckwyr [wy(2)](δβ')xs「支配者の座に即いたとき，四方に驚愕と恐れが（2）[広] まった．」

同様に，定冠詞の ZK は KB 碑文では使用が極めてわずかで，5 例しか確認できない（ZKn x2, ZKw x1, ZKwy x2）．Yoshida（2019a）でも論じたように，定冠詞は古典期では英語

[52] 一般には過去形が多用されるようになるとされるが，未完了形が多用される文献もみつかる．筆者はその違いが方言差であり，未完了形は西方言，過去形は東方言で多用されたのではないかとというやや大胆な推測をしたことがある（吉田 2017, pp. 164–171）．

の the に比較できるほど頻繁であるが，遅い時期の文献ではわずかしか使われない．冠詞の使用が減少するメカニズムは必ずしも明らかではないが，KB 碑文の言語は明らかにこの変化を蒙っていて，9 世紀の初めにおいて相当変化が進んでいたことを示している．

（ii）擬似ウイグル文あるいは Turco-Sogdian 的特徴[53]

KB 碑文のソグド語の最も興味深い特徴は，顕著に見られるウイグル語の影響であろう．10 世紀になると，ウイグル語の人名や語彙だけでなく，ウイグル語の語順や言い回しを透写した表現など，多くのウイグル語の要素を含むソグド語資料が見られるようになる．Sims-Williams and Hamilton 1990/2015 は，この種のソグド語を Turco-Sogdian と読んだ．KB 碑文のソグド語は，あきらかにその種のソグド語の先駆的な姿を見せている．Hansen は 1930 年の段階で既に 2 の表現がトルコ語の影響によっていることを指摘していた．一つは MN βγyšty prnβyrty = tängridä qutbulmïš「神々から栄光（カリスマ）を手に入れた」であり，この表現は Sims-Williams and Hamilton が研究した 10 世紀のソグド語の手紙にも見られる．もう一つは可汗が死ぬことを意味する婉曲表現の tnp'r pryc「身体を棄てる」で，これはウイグル語の ät'üz qod- のカルクである．

後に筆者は 1988 年に新しくテキストを校訂したとき，碑文には多くの類義語の組み合わせが見られる事に気がついた．この種の類義語反復（hendiadys）はウイグル語の特徴である．そしてウイグル語では並列される類義語は，多くの場合頭韻を踏んでいる．頭韻は優れてトルコ語の特徴であってソグド語では知られていないので，この種の類義語反復はウイグル語の表現をもとにしていることは疑いがない．最も頻繁に見られるのは γny ZY mrt'nyh「技倆と男らしさ」で，1988 年の論文で筆者はウイグル語の är ärdäm「男らしさ」と比較した．後に Sims-Williams and Hamilton（2015, p. 79）は，alp ärdäm「勇敢で男らしい」に基づくカルクと考えるべきであると指摘した．他には

[53] 遅い時代のソグド語における Turco-Sogdian 的言語特徴について，詳しくは筆者による専論 Yoshida（2009）を参照せよ．またその社会言語学的背景については吉田（2011, pp. 31–41）を参照せよ．

次のような例が在証されている：

γrβ'y ZY ”p'y（line 5）「知恵と理解力」= bilgä bilig “wisdom”

prn ZY prnxwntkyh（lines 4, 8）「幸運と栄光」= qut qïv “divine favour”

prnxwntkyh ZY prnpδ'ky'kh（line 14）「栄光持てることと栄光あること」= qut qïv

pyr'y ZY γrβ'kyh（lines 8, 14）「信仰と智慧」= ?

ウイグルの影響ではないかと考えられる特徴は他にもあるが，特定の表現がウイグル語の影響なのか，ソグド語本来の表現のレパートリーに入っていたのかの判断は難しい．γr'n「重い」はそのような例である．KB 碑文にはこの形容詞が頻繁に使われ，しかもいろいろな名詞を修飾している．以下のような例が知られている：

'rkh šyr γr'n（line 8）「仕事はきわめて偉大」

γr'n γny ZY mrt'nyh（line 18）「大きな技倆と男らしさ」

γr'n twp'ytc'ny 'sp'δ（line 19）「チベットの大軍」

γr'n wrcy-'w'kw（line 19）「大きな安寧」

γr'n nm'ck'n（line 22）「莫大な貢ぎ物」

γr'n xws'nty'kh（Frag. 8, line 4）「大きな満足」

しかしながら，このような例がウイグル語の影響によるものかどうかはにわかに判断できない．ウイグル語の aγïr「重い」は確かに多義で，Clauson（1972, pp. 88–89）によれば “heavy, much, many, important, very, respectful, valuable” のような意味を持つという．「重い」を原義とする形容詞がこのような多義語になることは容易に予想できることであり，ソグド語の単語も同じような意味拡張を行ったと考えて無理はない．同様に yxw'y「（切り）分ける，分離する」を意味する動詞の過去分詞 yxwst'y は，例えば MN s't ”z-'tyty yxwst'y（line 15）「すべての自由人の間では特別だった，すべての自由人より優れていた」のように，KB 碑文に何度か在証され「区別された，特に優れた」の意味で使われている．この用例はウイグル語の動詞 adïr-「切る，分離する」の分詞形 adruq や adïrmïš とよく似ている．例えば siz kiši-dä adruq bägräk är közünür siz “vous paraissez une person très noble, différente du commun des mortels”（Hamilton 1971, p. 41）のような例がある．ちなみに吉田（2011, pp. 31–41）では，言語接触に関する言語学的研究を援用して，このような言語はウイグル語にも堪能なソグド人のものであっ

て，ソグド語に堪能なウイグル人のものではないと論じている．

（C）他の特徴と石工による彫り損じ

既に述べたことであるが，碑文の破損は著しく，文字の判読は困難を極める．それ故，これまでに知られていない語を読み取る際には，文字の読みや解釈は必然的に不確定にならざるを得ない．一つの例をあげて説明する．22 行目に筆者は wyptm'kw という語を読み取り「計り知れない」と訳したが，この語は従来知られていない語である．形態論的には，名詞 ptm'k「計ること」と接頭辞の wy-「~ がない」とからなる形容詞である（吉田 1988, p. 48）．同じ機能を果たす接頭辞としては（'）pw- が広く用いられ，名詞につく wy- は非常に珍しく Gershevitch（1954）の文法書にも登録されていない．実際「計り知れない」を意味する複合語には 'pw-ptm'k が知られている（DMSB, p. 162b）ので，このような語を読み取ることに不安はあるのだが，幸いこの場合には比較的に保存状態が良い碑面にあるので，読みはほぼ確実である[54]．一方でよく知られた語が，想定できない意味で用いられている場合もある．pts'k がその例である．この語は pts'c「整備する，設置する，組織する」の名詞形である．名詞は「秩序，設置，組織」というほどの意味になることが期待される（DMSB, p. 156a）．この語は，マニ教の教団を意味する語としても使われるが，それは予想の範囲内の意味拡張のように見える（Yoshida 2019, p. 103）．しかるに KB 碑文の 1 行目では次のような文脈で使われている：γwβty'kh pts'k np'xštw δ'rym「賞賛（するため）の pts'k を我々は書いた」．この文脈からは，pts'k は碑文そのものを指示しているいるように見えるが[55]，それは語源的に期待される意味からは予測出来ないので，筆者はあいまいな「モニュメント」という訳語をあてた．

ウイグル可汗国の威信をかけて作られた巨大な KB 碑文は，当然ながら細心の注意を持って作成されたと考えられ，単純な誤刻は少ないことが予想される．従ってテキスト本文の読みの訂正（emendation）には極めて慎重でなければならないことは言う

---

[54] さらに幸いなことに最近になって筆者は，サンクトペテルブルクにある未発表の文書（Dx. 06489）にこの同じ語を発見した：wyptm'ky wẓt' ZY [p](t)y'(r)['n](δ)[my](c)wpr 'nβrt [δ'rt]「彼は計り知れない破壊と障害を身体に集めた」．

[55] Kljaštornyj and Livšic（1972, p. 72）は，「碑文」意味する pts'k がブグト碑文にも在証されるとするが，それは誤読に過ぎない（吉田 2019；Yoshida 2019b）．

までもない．しかしながら誤刻は確かに見つかる．例えば，7 行目では本来 *šyr「とても，非常に」とあるべき語が šyn と彫られたままになっている（図 7（1-4）参照）．9 行目では，本来は δβrδ’ ZY c’nkw と彫られるべきところを，当初 δynδ’ c’nkw と彫ったようだ．その誤りに気づいた石工は，δynδ’ の末尾の -’ の長い尾の部分に無理矢理 ZY を彫り込んだらしく，全体は δynδ’ry のように見えている（図 9（1-3）参照）．しかしながら，保存状態が劣悪なこの碑文では，解釈が困難な部分に誤刻があったとしても，それを誤刻と認識することは難しく，また確信を持って誤刻であると言うことも出来ない．12 行目で筆者が，δyw(t)y ’sp’s(z-w)šy ZY nm’cw(”)γtδ’rym「私たちは，悪魔たちに供養と，犠牲と捧げ物を捧げた」と読んだ部分の（”)γtδ’rym は，まさにそのような事例である．Hamilton は pšγtδ’rym と読み Sims-Williams もそれを採用している．pšγtδ’rym は「我々は～を注いだ」という意味になるので，文脈からは期待さる形式ではない．そこで拓本や de Lacoste の estampage を注意深く見てみると，筆者には，語頭の p- は ”- に訂正してあるように見える（図 12（1-2））．”γtδ’rym「我々運んだ」は文脈に良く合うので，筆者はこの読みを採用しているが確実な読みとは言えない．

このような事情から，筆者は訳注においては，読みに問題のある部分の図像を，ロシアにある拓本の影印本，京都大学が保管する拓本の写真，de Lacoste の estampage の筆者による調査ノートから引用して，できるだけ客観的な判断ができるように配慮した．しかしそれでも，保存状態や拓本の鮮明さに問題があり，十分に明瞭な図像を提供できない場合がしばしばあることを，筆者は良く承知している．

2　テキストと翻訳，訳注，語彙表における表記について

テキストと語彙においては，当該の形式が残されている石の断片は，Hansen の Fragment 番号に従い，(1)，(2)，etc. のように標示してある．テキスト部分で，(丸括弧) に囲んであるのは文字が破損しているが，残画が見えていることを示す．残画が見えているが文字が判読できない場合は，丸括弧の中に小さな黒丸を，判読できない文字の個数分並べている：(•••)．文字が完全に破損している部分は［角括弧］で示してある．角括弧の中に文字が入っている場合は，推定によって補っていることを示している．翻訳では，文意を把握しやすくするために筆者が補った語句は（丸括弧）に入れてある．

［角括弧］のなかの語句は，テキスト部分で筆者が補った語句に対応している．また，①，②，etc. のような丸に囲んだ数字は，ウイグルの可汗の継承順位を示している．テキストと翻訳では，破損部が大きくて，破損部を挟んで文脈がつながらないと考えられる部分は「大きな破損」と指定してある．それほど大きい破損ではないが，失われた語句の内容が必ずしも予想できない場合には「ある程度破損」と指定してある．これは Frag. 4 と Frag. 5 及び Frag. 4 と Frag. 6 の間の破損部に適用される．このように指定しているのは，訳文だけから碑文の内容を知ろうとする読者が，文脈のつながりについて誤解をしないようにするための配慮である．碑文の断片の相対的な位置を復元した図版を適宜参照されたい[56].

語彙表では，例えば βγpwrstn の項目で「βγpwrstnw 9（2）」とあれば，当該の形式は 9 行目の，Frag. 2 の部分にあることを示している．また *10（4）のように，行を表す数字の前に添えられたアステリスクは，該当する 10 行目の Frag. 4 の部分では，当該の語形が推定により補われていて確実な読みではないことを示している．ただし，確実性の度合いは程度の問題であり，アステリスクの使用はやや恣意的である．

3　テキスト，翻訳，注釈

以下では，各行ごとに，テキストと翻訳，文字の読みと語の解釈に関する注釈を提出する．文字の読みについては，従来発表されているテキストの読みとの相違が問題になる．その際必要があると思われるときには，当該の語の拓本に見られる画像と，筆者が 2003 年 5 月に，de Lacoste の estampage を調査して書き写したスケッチの画像も提示することにする[57]．利用した拓本は Radloff の Atlas にある拓影と京都大学と立命館大学にある拓本で，後者には（Kyoto）と添え書きしている[58]．指定がない場合は Atlas からの画像である．

現在までのところ提出されたテキストには Hansen（1930），吉田（1988）がある．

---

[56] この点に関しては上記，「I-2 ソグド語面の復元：断片の位置の推定」も参照せよ．

[57] これには筆者のソグド語の解釈が影響を与えている可能性があり，いくらか客観性を欠く点は注意が必要である．

[58] 1997 年に大阪大学の調査隊が採った拓本から画像を引用する場合がまれにあるが，その場合には（Osaka）と添え書きしている．

これらとは別に未発表ながら Hamilton が，Radloff の Atlas だけでなく，彼がパリの Société Asiatique の図書館で再発見した de Lacoste の estampage を調査して作成したテキスト，Sims-Williams がこの Hamilton のテキストと Hansen 1930，吉田 1988 を参考にして作成したテキストと英訳がある．どちらも Sims-Williams 博士のご好意で筆者が利用できるようになったものである．Hamilton のテキストと Sims-Williams のテキスト及び訳は，二人の共同研究の成果として将来出版を計画しておられた研究の準備作業に過ぎない．発表を意図したものではないので本来なら引用すべきものではないのだが，筆者が 1988 年の段階で提出したテキストを改善するときには大いに参考にした．そしてその改善したテキストの一端は，いくつかの論文で発表してきている．ここでは，筆者の最新のテキストのいくつかの重要な語の読みについて，Hamilton と Sims-Williams の未発表の研究の成果を利用していることを示すために二人の読みにも言及する．以下で使われる略語の OH は Hansen 1930，YY は吉田 1988，JH は Hamilton，[59]SW は Sims-Williams の読みをあらわしている．YY2 は本論文での読みである．

碑額

1/['yny "y] tnkry[δ'] xwt-/2/[pwl-mys]('l-p)w [pyl-]k' βγy /3/['wyγwr x'γ-'n](γwβ)ty'kh /4/[pts'k] np'xš[tw] δ('r)ym

この Ay Tängridä Qut Bulmïs Alp Bilgä（という名前の）神のごときウイグルの可汗を賞賛するためのモニュメントを我々は書いた.

1 行

(1)'yny "y tnkry-δ' xwtpwl-mys 'l-p pyl-k' βγy 'wyγwr x'γ-'n γwβty-'kh pts'k np'x(š)[tw δ'rym](3)空白部(ny-)'k(w ')[l-(4)]p(yn'ncw)p(γ)['trx'n ある程度破損(5)](••)mwnkw ms βγ(pwr'k)np(')[yk? 大きな破損]

[59] Hamilton は，通常 c, δ と転写する文字を，各々 č, d と表記している．本稿では Hamilton の読みを引用する場合には，それを c, d として引用しているので留意されたい．ただし，Hamilton の読みを Sims-Williams がそのまま採用している場合には，通常通り c, δ と転写する．

（1）この Ay Tängridä Qut Bulmïs Alp Bilgä（という名前の）神のごときウイグルの可汗を賞賛するためのモニュメントを我々は書いた．（3）祖父 Alp（4）Ïnanču Baγa Tarqan が [< ある程度破損 >（5）] これをまた中国の文に [< 大きな破損 >]

1（1）[60] OH/YY/SW 'l-p[w], JH/YY2 **'l-p**.（**図**）

JH は 'lp と読んでいる．OH, YY, SW が 'lp[w] と読んだのは，この語の文字 p と次の語の py-lk' の初頭の p- との間のスペースが普通よりもずっと広いからであった．しかしながら，表面に破損はないにもかかわらず文字 w の痕跡は認められないので，ここでは JH の読みに従った．従って，この碑文ではウイグル語の人名要素の alp の綴りは 3 種類存在することになる：(i)''lpw *41;(ii)'l-pw 碑額 , 13（1), 14（1), 16（1), 20（1); (iii)'l-p 1（1）.[61]

1（3） JH 'k'rt. ~ 'kr'c, SW 'k'r(t•), YY2(**ny**)**-'kw[**.（**図**）

'k- の前にへこみがあり，それが文字であるとすると筆者の読みは不可能ではない．少なくとも意味のある語（ny'k「祖父」）を読み取ることができることになるが，確実な読みではない．

1（3）-（4） Frag. 3 と Frag. 4 の間の破損はわずかで，ほとんどぴったり接合する．対応する漢文面の I 行目では，Frag. 3 に文字「藥」の冠部分が見え，「木」の部分が Frag. 4 に見える．碑文を構成する石の断片の相対的な位置関係については**図版 1** を参照せよ．

1（3）-（4） JH pry''wy ~ pryšwy, SW pry'(')wy, YY2(**'**) **[l-]p (yn'ncw) p (γ) ['trx'n** (?)].（**図**）

文字 p 以外の文字は模糊として判読することができない．筆者の読みは，漢文版の合伊難主莫何達干 = Alp Inanču Baγatarqan に対応する名前がここに存在するという前提によっている．この大臣は漢文版では，I 行目の碑題の直ぐ下に書かれている内宰相頡于伽思薬羅*屹*□□の次に来る．筆者の推補 ny'kw 'lpyn'cw pγ'trx'n が正しいとすると，漢文版では 2 番目に置かれる人物がソグド語版では最初に掲げられていることになる．

---

[60] 1（1）は，1 行目の Fragment 1 にある語であることを示す．また 1（5-2）のような表記は，1 行目の Fragment 5 にある語に関する注釈の 2 番目のものであることを示す．「**図**」は当該の語の図像が後掲の **Figures（b）** に掲載されていることを示す．

[61] さらに 3 行目の 'l-p'yn'ncw も参照せよ．

これは漢文版の起草者が内宰相頡于伽思薬羅*屹*□□であり，ソグド語版の起草者が合伊難主莫何達干であったことを示すと考えたい．ウイグルの宮廷には漢文文書を起草する書記集団と，ソグド語・ウイグル語の文書を起草する書記集団の 2 種類があったという推定については上記「II-1　3 言語版の相互の関係について」を参照されたい．

1（5-1） OH/YY/SW mwn'kw, JH/YY2 **mwnkw**.（**図**）

期待される綴りは mwn'kw だが，語中の '(aleph) が見えない．これは mwn'kw の書記上のヴァリアントでなければ，書き損じかも知れない．実際 16 行目には mwn'kw と綴られている．（**図**）

1（5-2） YY mz-, JH ms ~ βs, OH/SW/YY2 **ms**.（**図**）

提案された読みはすべて不可能ではない．書き損じがあったのかもしれない．

1（5-3） OH βγ . .(k).(k), YY yxw(.....), JH yspw'k, Kljaštornyj βsp(wr)k'k, SW/YY2 **βγ(pwr'k)**（**図**）

Hamilton の古いノートには，当時はソ連のレニングラードの東方学研究所にいて，Radloff の拓本の現物を見ることができた S. Kljaštornyj から個人的に教えて貰ったと思われる読みが引用されている．筆者は Sims-Williams が推定する読みに従った．ここに βγpwr'k「中国の」を読むことは，漢文版の起草者の名前が次に来るという前提とも合致している．

1（5-4） Kljaštornyj ryp[, JH/SW 'yp, YY2 **np(')[yk]**.（**図**）

Klaštornyj と Hamilton が各々 r-, '- と読む文字は，先行する語の末尾の文字 -k の尾と，次の語の最初の n- を書こうとして書き損じ，放棄された文字の痕跡のように見える．

2 行

(1)(n)y'k γrβ'kw 'xš'wnδ'r MN βγyšty prnβyrty RBkw twrkc'ny 'βc'npδykw 'xšy-wny ''y tnkryδ' xwtpwl-mys['lp pyl-k' x'γ'n?(3)](•'wy-γ)w(r)tykyn 'wk' [(4)pr γr](')n γny ZY m[rt'nyh](•••••)[ある程度破損(5)](•••)np'xštw δ'rym m'xw sγ[tm'n 大きな破損]

(1) 祖父である賢い支配者，神々から栄光（カリスマ）を手に入れた偉大なトルコ世界の帝王，Ay Tängridä Qut Bulmïs [Alp Bilgä 可汗のために（?)...（3）ウイ] グル（?）の王子である大臣が [大いなる] 技倆と男 [らしさにより < ある程度破損 >（5)] 我々

は書いた，我々全員は [< 大きな破損 >]

2（1-1）OH ’δ’k, YY RBk’, JH/SW/YY2 **ny’k**.（図）

個々の文字の外形だけを比べれば，YY の RBk’「大きい」と JH/SW の ny’k「祖父」はそれほど変わらない.

2（1-2）JH γwtpwl-mys(p)[, SW xwtpwl-mys(p)[, YY2 **xwtpwl-mys** [.（図）

JH/SW の（p)[は Radloff 拓本でも，京大の拓本でも確認できない．筆者は estampage でも確認できなかった．このことは，この人名を復元する際，xwt-pwlmys の後に必ずしも pyl-k’ を想定する必要がないことを示す点で重要である.

2（3）JH/SW]γwl, YY2 **](•’wy-γ) wr**.（図）

γ の読みは不確実である．末尾の文字は -l よりむしろ -r に見える．Hamilton のメモには [yaγla]qor と復元する可能性も示唆されているから，彼も -r の読みが可能なことを認めている．しかしウイグルの可汗家の名前である Yaγlaqar は，この碑文では yγl-’xr と表記されるから（cf. line 3），彼の復元は受け入れがたい．筆者の（’wyγ)wr も極めて不確実である．ここには sïngqur のような人名要素を想定できるかもしれない．例えば küdägümüz alp sïnqur tegin「我らが義理の息子 Alp Sïngqur Tegin」（Clauson 1972, p. 838a）を参照せよ.

2（3）-（4）JH]•••••y, SW]y, YY2 **[(4) pr γr] (’) n**.（図）

Frag. 3 と Frag. 4 の間の破損部は極めて小さいことが知られている．Frag. 4 の先端部には，文字の長い尾が見える．これは，文字 -’, -n, -β などの尾でありえる．JH の •••••y は拓本では確認できない．そのような次第なので筆者はここに [γr](’)n を復元した．実際 18 行目では γr’n は γny を修飾している．その前に pr を復元することに関しては 5 行目の pr xypδ γny ZY mrt’nyh を参照せよ .

2（4）YY2 **m[rt’nyh](•••••)[].** JH は m•••••mš(•)ty と読んでいて，それに基づき SW は m[rt’nyh] mš•ty と読む．筆者は拓本でも estampage でも mš•ty を確認することができなかった.

2（5-1）SW pt]s(’)k, YY2 **](•••)**.（図）

JH の古いメモによれば，彼自身は pt]s’k を読みとることができなかったようだ．彼は

OH のテキストにあった pt]s'k を引用しただけだと考えられる．OH 自身も 1 行目の np'xštw δ'rym「我々は書いた」に先行する pts'k がここにもあるはずだと考えていたらしい．Radloff の拓本でみる限り，s'k と読むことはできないのである．筆者はどう読むべきか分からなかった．JH は Kljaštornyj の読みとして]yc を引用している．Fragment 5 は石自体がロシアに将来されているから，Kljaštornyj は拓本ではなく，石そのものからこの文字列を読み取ったのかも知れない．

2（5-2） YY sx[, JH(β)γ[, SW/YY2 **sγ[tm'n]**「全員，みんな」．（**図**）

JH は（β)γ[ ] と mγ[ ] の読みの可能性を考えていたようだ．彼のメモによれば SK（= Kljaštornyj, YY）は sγ[tmn] の可能性を指摘していたようだ．Kljaštornyj が想定していた語は sγtm'n に違いない．

3 行

(1)γw'δwk 'wγwz 'yl 'wk'sy 'l-p'yn'ncw pγ'trx'n 空白部 yγl-'xr 'wk' 'wtyr pγ'trx'n 空白部 yγl-'xr 'wk' xwtl-wγ(p)[γ'trx'n?(3)](••)r 'wk' 空白部 [(4)](•••••••••)δ(•δ)s(•••••)[ある程度破損(5)] 'wk' 空白部 [大きな破損]

(1) 玉座の（そばで仕える？）Oγuz（族の）宰相 Alp Ïnanču Baγatarqan< 空白 > Yaγlaqar（族の）大臣 Ötür Baγatarqan< 空白 >Yaγlaqar（族の）大臣 Qutluγ B[aγatarqan < 空白 >[...]（族の）(3)] 大臣 < 空白 >（4）[< ある程度破損 >（5)] 大臣 < 空白 >[< 大きな破損 >]

3（1-1） JH γwrdwn ~ swrdwn, SW xwrδwn, YY2 **γw'δwk**.（**図**）

JH や SW の読みと筆者の読みは，文字の外形の認識の点ではそれほど変わらない．語中の r と ' や，語末の -n と -k はよく似た外見である．ただ語末の文字には湾曲があり，-n よりは -k の読みのほうが良いように思う．いずれにせよ，γ'δwk「玉座」には γw'δwk というヴァリアント形が，敦煌出土の仏典 Pelliot sogdien 16 在証されている．γw'δwk は，「玉座（のそばで仕える）」という意味で，漢文版の 1 行目にある「内宰相」の「内」に対応しているのかもしれない．

3（1-2） YY('lpw yn'n)cw, JH/SW/YY2 **'l-p'yn'ncw**.（**図**）

JH が正しいことは，estampage だけでなく 2 つの拓本からも確認される．YY の ’lpw は 13, 14, 16, 20 行目の ’lpw に影響されたもので，誤読である．

3（1-3） BLANK **yγl-’xr**.（**図**）

SW の t(•• ’l-p)yγl-’xr は YY t(....)yγ(l-’x)r および JH t(•• ’l-p)yγl-’γyr に基づいている．しかし筆者が estampage を見る限り pγ’trx’n と yγl-’xr の間には 8 cm ほどの空白部がある．表面が痛んでいて凹凸があるようで，文字 t に見える部分はあるのだが，やはりここは空白部であったと見なして良いと思う．名前と称号の組み合わせの後に空白部が続くようなので，その点からも空白部と見なすことは妥当である．JH の古いメモによると，彼も一時はこの部分を空白部と見なしていたことが知られる．

3（1-4） OH/YY ’wtwr, JH/SW/YY2 **’wtyr**.（**図**）

拓本から ’wtwr と ’wtyr を区別することは難しい．このウイグル人名の要素の ötür（cf. Clauson 1972, p. 68a）は，マニ文字文献である Mahrnāmag の 33 行目（Müller 1913, p. 9），MIK III 36（IB 6371; T II D 135）ii/6 及び ii/24 に見られる（BeDuhn apud Gulácsi 2001, pp. 233-234）．Mahrnāmag では ’wytyr と綴られているが，後者では ’wyṭwr と表記されている．筆者は JH/SW の ’wtyr を採用したが，それは estampage ではそのように見えるからである．Mahrnāmag と KB 碑文は同じ時期に成立しているので，この場所に現れる yγl’xr ’wk’ ’wtyr pγ’trx’n は，Mahrnāmag の 33 行目に現れる ’wytyr wg’ と同一人物である可能性がある．この人名要素のウイグル語の語源については Lurje（2010, p. 456）を参照せよ．なお Lurje 自身は ’wtyr ではなく ’wtwr と読んでいる．

3（3） JH/SW](yp)l ’wk’ ..., YY2 **](••) r ’wk’ BLANK**.（**図**）

’wk’ の後には空白部が続くことは etampage と Radloff 拓本から明らかである．その前にある語の読みは難しい．末尾は -r か -l のように見える．estampage ではその前に t あるいは w が有るように見えるが，Radloff 拓本では殆ど何も見えない．SW のテキストに JH が添えたメモによると，yγl’xl と読む可能性を考慮したことがあったようだ．

3（4） JH/SW]p•šδ(k)w [s]rδ•δs pc(yp)y[... , YY2](•••••••••)δ(•δ)s(•••••)[].（**図**）

JH がどのようにしてこれほど多くの文字を読み取ることができたのか，筆者には分からない．筆者は estampage に δ(.δ)s と読めそうな部分を見つけただけである．OH のテキストからも知られるように，Radloff 拓本（そして京大拓本も）では全く何も見え

ない.

3（5） OH 'wk' . . . . . ny / /, YY/JH]'wk'(.....)ZY [, SW]'wk' **••••••••••••** ZY[..., YY2 **] 'wk' BLANK [**.（**図**）

Frag. 5 はロシアに将来されたので，Radloff 拓本しか見ることができない．その Radloff 拓本では 'wk' の後には空白部が続いているように見える．その状況は Fragment 3 における状況と同じである．空白部の後に並列の接続詞 ZY を読み取ることはできないと思う．実際この碑文では，起草者の名前は空白部を置いて接続詞なしで羅列されているので，接続詞は期待されない.

4 行

(1)z-γtw δ'r'nt pr prn ZY prnxwntkyh z-'wr z-γtw δ'r'nt ZY kδ'm 'xš'wnδ'r wm'(t)'y ZY γrβ'kw y'xy ZY γ(nk)yn w(m't)['n](t)rt[y(2)sγtm']n 'xš'wn[δ'r(3)]t 'wts(')[r(4)](pry)s'nt (prw)z-mnw(••)[ある程度破損（5)](••)yk ywk [βs'k? 大きな破損]

(1)（彼らは国を）維持した．栄光と栄光持てることの力により（それを彼らは）維持した．どのような支配者がいようとも，賢く勇敢で雄々しかった．そして [（2)] 支配者たち [全員] は [（3)] そちらに [（4)] 到達し（適切な）時に [< ある程度破損 >（5)] な教えと [教訓？ < 大きな破損 >]

NB：起草者の名前と称号の後に碑文の本文が続いたはずである．漢文版では，行を改めて III 行目から本文が始まっている．ソグド語では，4 行目の冒頭は zγtw δ'r'nt「彼らは保持した」とあり，その前には目的語の 'xš'w'nh「領土，国家」があったことが期待されるので [62], 4 行目の冒頭から本文が始まっていたわけではないようである．3 行目の下方が破損しているので，そこに始まりがあったのだろう.

4（1-1） JH 'βy-'wny, YY/SW/YY2 **wm't'y**.（**図**）

JH は 'βy-'wny と読んで t を認めていない . 実際 estampage では対応する場所の文字には t に特徴的な筆画が見えない．2 つの拓本では文字のわずかな痕跡が見えるだけで,

[62] 5 行目の γrβ srδ 'xš'w'nh z-γtw δ'rt「彼は何年もの間領土を維持した」を参照せよ.

その痕跡だけからどの文字かを特定することはできない．しかしながら OH は古い時代に wm- を読み取っており，文字の痕跡も t と読んで矛盾がない．

4（1-2） JH/SW γny-(n)t, YY2 **γ(nk)yn**.（**図**）

y'xy「勇敢な」と γnkyn「勇猛な」の組み合わせについては，y'xy 'PZY γnkyn（SCE 308）を参照せよ．対応する漢文原典には「勇健」とある．本碑文の γnkyn の用例には，13 行目の šyr γrβ'kw ZY γnkynw「とても賢く雄々しい」もある．

4（1-3） JH 'wyγ(wr γ)'γ'n, SW 'wyγ(wr x)'γ'n, YY2 **w(m't)['n](t)**.（**図**）

これは，ソグド文字で彫られた碑文を読むことがどれほど難しいかを示す良い例である．表面が痛んで筆画が確認できなくなると，本来の文字と破損でできたくぼみが組み合わさって，全く異なる印象を読み手に与えてしまう．estampage では 'wyγwr も x'γ-'n も確認できない．2つの拓本からは w'štnt とも読めそうである．これは動詞 'wšt「立つ，存在する」の未完了過去 3 人称複数形であり，wm't'nt とほぼ同義である．

4（1-4） YY2 **rt[y**.（**図**）

wm't'nt の後には rt[のように読める筆画が Radloff 拓本には見えるが，京大拓本では確認できない．estampage にはこの部分で文字の跡は見えなかった．

4（4-1） JH]l(t)s(')nt, SW](pty)s(y)nt, YY2 **](pry)s'nt**.（**図**）

JH はここに文字 p を読んでいないが，Radloff 拓本には p を明瞭に見ることができる．移動の方向を意味する副詞の 'wts'r「そちらに，そちらから」が先行しているので，筆者は SW の ptysynt「彼は同意した，満足した」ではなく prys'nt「彼らは到着した」をここに読んだ．

4（4-2） JH(.)p'r, SW *[y](w)'r, YY2(**prw**).（**図**）

JH の目に p'r のように見えたのは，ややいびつな形の前置詞 prw だと思われる．この碑文ではもっぱら pr が使われるが，それと同義の prw は全く使われないわけではない．確実な例は 22 行目に見られる：prw c'δr 'wt'k「下方＝西方の国で」．SW の [y](w)'r「しかし」は，拓本を見て採用した読みというよりむしろ，通常は文末に立つ定動詞と名詞 zmnw「時，時間」に挟まれた位置に現れる得るのは，短い機能語である可能性が高いという文法に対する配慮があったのだろう．なお zmnw のあとに，JH/SW は 'wrδ•「その場所で」という語を読んでいるが，estampage でも拓本でも筆者には確認するこ

とができなかった.

4（5） JH]yk ~]'k ~]'n ~]yn, SW(β)[s]'k, YY2 **]yk**.（**図**）

最後の文字は湾曲していて -n よりは -k の読みがありやすい．従って SW の (β)[s]'k「教え，訓練」は不可能ではない．しかし ywk「教訓」と βs'k が類義語反復（hendiadys）で使われる場合には，かならず ywk βs'k の順序であってその逆はないので，ywk の前に βs'k を補うことはできない[63]．筆者が ywk の後に βs'k を復元する所以である．ywk に先行する語は，それを修飾する形容詞の語尾であろう.

5 行

(1)'skw'skwnw pr xypδ γny ZY mrt'nyh γrβ'y ZY "p'y z-'wr γrβ srδ 'xš'w'nh z-γtw δ'rt c'nkw xwty tnp'r p'ryc cywyδ γy(rt)r z-'t['y(2)kwl py]l-k' x'γ-'n [(3)ny]s(t)y(••mr ••) [(4)](M)N 'yδ(yt)y (y)x(w)st(')y (γnk)[yn? 大きな破損]

(1)（彼は…）であった．自分の技倆と男らしさ，智慧と理解力の力で何年もの間領土を維持した．彼が身体を棄てた（＝身罷った）とき，その後に息子 [の（2）① Köl Bi]lgä 可汗が [位に就いた（3)...（4)]（他の）人たちからは区別され雄 [々しかった < 大きな破損 >]

5（1-1） γrβ'y はマニ文字表記の M γrβy "knowledge" と同じ語だと考えられる．Cf. DMSB, p. 88a, s.v. γrβy.

5（1-2） JH p'r'cy, YY/SW/YY2 **p'ryc**.（**図**）

JH は末尾の文字 -c の尾に見える表面の破損を文字 -y と読んだようだ.

5（1-3） JH/SW xy(p)δ, YY2 **γy(rt)r**.（**図**）

筆者が estampage で見る限り，-δ は確認できない．JH が -δ と見なしたのは，-r であって，かなり明瞭である．ただ拓本ではそれほど明瞭ではない.

5（1-4） SW/YY2 **z't['y].**

z't'y「息子」という語をここに認めることが出来ることによって，先行する部分は，初

---

[63] この二つの同義語の順序については，ベゼクリク出土の手紙に見える ywk ps'kw も参照せよ（Yoshida 2019, Letter B, ll. 7–8）.

代の Köl Bilgä 可汗の父親に関する事績であると判明する．『旧唐書』と『新唐書』の記事によれば，彼の父親は護輸であった．護輸は，第 2 突厥可汗国成立後，ウイグルの一部が涼州に住まわされていた時のリーダーであったが，涼州の刺使を殺害した後モンゴリアに逃走して Ötükän の地を保持したという（佐口 1972, pp. 310–311, 373）.

5（3） JH/SW]š(•)y ’(šy)mr ZK•[, YY2 **ny]s(t)y(••mr ••)[**.

筆者は，JH/SW が ’(šy)mr ZK•[と読む部分に，mr のように見える残画を確認できただけだった．文脈からは z-’t[’y kwl py]l-k’ x’γ-’n [ny]s(t)y のような継承記事が期待されよう . Cf. 8, 13, 14 行 . 従って JH が]š(•)y と読む部分は [ny]s(t)y「位に就いた」と読むべきだろう.

5（4-1, 2） JH] •••dβ(w)yd(yt)y, SW]•••δ(’)(’)yδ(yt)y, YY2 **](M)N ’yδ(yt)y**.（**図**）

筆者の（M)N は，文字がそう読めるというよりむしろ，yxwst’y「区別された，格別である」という意味の形容詞の用法に基づく推定に近い．例えば 16 行目には MN s’t ’yδ’yty yxwst’y ZY ’ny’z-’nk「全ての人々から区別され異なっていた」とある．ほぼ同じ表現は 15 行目にも見えている：MN s’t ”z-’tyty yx(ws)t[’y ZY ’ny’z-’nkw]「全ての自由人（＝貴人）から区別され異なっていた」.

5（4-3） JH(β)γ(w)stry, SW *(y)x(w)st(’)y, YY2**(y)x(w)st(’)y**.（**図**）

SW の *(y)x(w)st(’)y に添えられたアステリスクは，JH の読みと異なっている事を示している．筆者はこの読みを採用した．この読みは estampage に見える残画と矛盾しないだけでなく，JH の(β)γ(w)stry と実際上ほぼ同じ外形を想定していることになる.

5（4-4） JH γ•••, SW x[, YY2**(γnk)[yn?]**.（**図**）

この部分は 2 つの拓本に残っているが，その残画から文字を特定することは難しい．上で引用した 16 行目の表現（MN s’t ’yδ’yty yxwst’y ZY ’ny’z-’nk）を参考にして，yxwst’y(ZY ’n)[y’z-’nk] と補うべきか.

6 行

(1)p(r’)yw ZY ”šn’s knty twr(k)’xš’wnδ’r ’(’)st(’n)t xwty ’xš’wnδ’rt ’krt’nt kyZY i(srδ)’xš’w(’nh)z-γtw δ’r(’n)t (y)w(’)r (β)xt(w)[ny(2)tw](γ?)wm’t cy-wyδ ’xš’[wnδ’rty (4)](’xš’wn)h δ(β)tykw ’y-tδ(’r’n)t ZY[大きな破損]

(1) といっしょに．そして彼らは阿史那氏の支配者を捕らえ，彼ら自身が支配者になり，1 年間領土を維持した．しかし (2) [すぐに (?)] 分裂があり，それらの支 [配者たち (4)] からもう一度領土を取り上げた．そして [< 大きな破損 >]

6（1-1） JH p(')y(')'w, p(r)y(r)'w, etc. SW *pc"w, YY2 **pr'yw**.（図）

SW が *pc"w「争い」と読もうとする理由は，後続する語を "x'ns「戦い」と読み，二つの語が一種の類義語反復（hendiadys）を形成すると考えたからであろう．しかしながら，後続する "šn's の読みと意味が確定しているので，もはや無理をしてまで pc"w と読む理由はなくなった．彼が c と読む文字は r と読むべきことは estampage からほぼ確実である．最後から 2 番目の文字は y ではなく ' かもしれない．その場合 pr"w は pr'yw のヴァリアント形ということになる．

6（1-2） JH('n)s(n')s kyty, SW *("x'ns)k(r)ty, YY2 **"šn's knty**.（図）

"šn's が，突厥の可汗家の名称である阿史那の原語であることにはもはや何の疑いもないと思う．この語に関しては吉田（2019, pp. 5–6）及び Yoshida（2019b）を参照せよ．この部分の歴史的背景を理解するには以下に引用する Mackerras（1990, p. 317）の一節が便利である：

> The second of the great nomad empires of Mongolia lasted from 744 to 840, and its capital was Karabalghasun on the High Orkhon River. For some years before its foundation, the Uighur leader, known to Chinese as Ku-li p'ei-lo（骨力裴羅 , YY), had been consolidating the power of his own clan, the Yaghlakar, among the various Uighur tribes; and in 742, he led a coalition of Uighur, Karluk and Basmil forces in a successful attempt to drive the last important ruler of the Eastern Türks from the Mongolian steppes. This set the scene for further expansion of Ku-li p'ei-lo's power, and the Chinese historian tersely remarks that in 744 "he attacked and defeated the Basmil and took upon himself the title of Kutlugh bilgä Köl keghan（骨咄禄毘伽闕）." Shortly after this, the Karluk also became victims of the Uighur kaghan, and an easterly group of them was brought under subjection.

6（1-3） JH kynβr mnd, SW ky••• m(')δ, YY2 **kyZY i(srδ)**.（図）

この部分は kyZY y(srδ) のように見える．2 番目の y のように見える文字は実際には数字の「1」であろう．次の語の初頭の文字 s- は，確かに典型的な s とは異なり m のように見えなくもないが，m'δ であれ myδ であれこの文脈では意味をなさない．Šine Usu 碑文（北面 9 行目）によれば, 742 年の後, 743 年にもう一度突厥との戦闘があった, 森安他（2009, pp. 11, 34）．ここではそのことが記録されているのであろう．

6（1）-（2） JH(β)γtw ////(2)wm't, SW(β)γtw(2)wm't, YY **βxt(w)[ny(2)tw](γ)wm't**.（図）

5 行目の状況と比較すると，Frag. 1 と Frag. 2 の間の破損はわずかで，かろうじて非常に短い語が一語入り得る程度である．従って βxt(w)[n(2)](y)wm't「分裂があった」と読むことができるかもしれない．ただ，Frag. 2 の最初の文字は語末の γ のように見えるので，非常に短い語である [tw](γ)「すばやく」を補ってみた．ただこの副詞は本来なら twx と表記される語なので，やや無理のある推定であることは認めざるを得ない．二つの拓本では βxtw[の部分はむしろ *βxrt[, etc. のように見えるのだが, estampage でははっきり βxtw[と読むことが出来る．

6（4-1） JH •• βγ(y)(γw)nh; YY/SW('xš'w'n)h, YY2(**'xš'wn**)**h**.（図）

JH が γw と読んだ部分を YY/SW/YY2 は 'w と読んでいる．h に先行する部分はぼやけているが YY2 の読みと矛盾しない．

6（4-2） JH(')y t(y)p('y)t ny////, YY/SW "y-tδ('r'n)t, YY2 **'y-tδ('r'n)t**.（図）

YY の "y-tδ('r'n)t は単純な誤読であったが，SW の読みに影響を与えてしまったのは残念であった．

7 行

(1)β'tryncw ZY wyspw 'xš'w'nδ'r s't kw CWRH s'r m(n)x(yr)š 'xš'wnh *š(yr) ptsγty 'rpst'kw 'krty γrβ srδy 'xš'w'nh z-γtw δ'rt c'(n)[kw(2)kw]l pyl-k' x'γ-'n tnp'r p(')[ryc(4) tn]kryδ' pwl-mys 'yl 'ytmys(')[wl-wγ pyl-k' x'γ'n nysty 大きな破損 c'nkw ... x'γ'n tnp'r p'ryc kwn tnkryδ' xwt pwlmys 'yl twtmys kwlwk pylk']

(1) 彼は降伏させた．そして彼はすべての支配者をみんな自分の方へ引き寄せた．領土はとても整備され強力になった．彼は何年もの間領土を維持した．(2) ① [Kö]l Bilgä 可汗が身体を棄てた（＝身罷った）とき，(4) ② Tängridä Bolmïs Il Itmis [Uluγ

Bilgä 可汗が位に就いた < 大きな破損 >... 可汗が身罷ったとき，③ Kün Tängridä Qut Bulmïs Il Tutmïs Alp Külüg Bilgä]

7（1-1） β'tryncw「降伏させた」は 3 人称単数未完了形である．主語はウイグルの初代可汗に違いない．目的語は失われているが，上述した突厥第 2 可汗国滅亡以降，ウイグルがモンゴル高原の覇者になるまでの出来事を考慮すれば，カルルク（の可汗？）が目的語であったのではなかろうか．

7（1-2） YY/JH/SW 'xš'wnδ'r, YY2 **'xš'w'nδ'r**.（**図**）

'xš'wn- ではなく 'xš'w'n- と読むべきことは，拓本や estampage から明らかである．

7（1-3） JH/YY mnkyrš, etc., SW *mnxrš, YY2 **mnxyrš**.（**図**）

SW の mnxrš は JH/YY の読みから推定される動詞 *'nkyrš は存在しないが，'nxrš の方は在証されていることに基づいているようだ．拓本や estampage，とりわけ後者を子細に見てみると，ほぼ確実に mnxyrš と読むことができる．これは無論 mnxrš のヴァリアント形であろう．

7（1-4） YY šyn, JH šw', SW/YY2 ***š(yr)**.（**図**）

estampage と 2 拓本のどちらでも šyn の読みは確実であり，š(yr) と読むことはできない．しかし, šyn「床, ベッド」はこの文脈では意味をなさない．その一方で, šyr「とても，非常に」はこの文脈によく合致するので，ここでは銘文に誤刻があったと考えざるをえない．SW も，マニ教ソグド語の辞書 DMSB, p. 187a の šyr の項目でこの点を指摘している．ここの本文批判については上記「III-1（C）他の特徴と石工による彫り損じ」も参照せよ．

7（2） OH pr['γtδ'rt], JH p(r)////, YY/SW/YY2 **p'[ryc]**.

意味の上からは OH のように pr['γtδ'rt] と復元することもできるのだが，Frag. 2 と Frag. 4 の間の破損はわずかなので，より短い語形になる未完了形を復元した．

7（4-1） JH/SW 'l[p], YY(p)[ylk', YY2 **'[wl-wγ pyl-k']** 或いは **'[l-p pyl-k']**.（**図**）

estampage で見る限り，JH が 'l[p] と読む場所には文字の痕跡は見られないように思えた．一方拓本の方を見てみると，' の痕跡のように見える部分が確かに存在するが，文字 l は見えない．ここは第 2 代可汗の称号が刻まれているが，彼の称号は Šine Usu 碑

文では tängridä bolmïš il itmiš bilgä となっているし，KB 碑文の漢文版でも同じである：[登里] 囉没蜜施頡翳德蜜施毗伽可汗．従って，この位置に文字 ’ が見えることは奇妙である．なんらかの誤刻があったのかもしれない．’lp pyl-k’ という組み合わせが頻繁に現れるために，誤ってここに ’lp と書いたのかもしれない．また第 7 代可汗では uluγ と bilgä の組み合わせが見られるから，ここでも ’wl-wγ を書いていたのかもしれない．漢文版では VI 行目の第 3 代可汗の称号に，他では知られていない要素が加わっているように見える例が知られている．そこでも bilgä の直前にその余分な要素が入っており，森安・吉田（出版予定）では，一つの可能性として胡禄 = uluγ を想定した．

7（4-2） 8 行目の冒頭を見れば，7 行目の終わりには，3 代可汗への継承記事があった事が分かる．平行する事例を参考にすれば復元は難しくない：c’nkw ... x’γ’n tnp’r p’ryc kwn tnkryδ’ xwt pwlmys ’yl twtmys kwlwk pylk’. この場所では 2 代可汗の略称が使われていたはずであるが[64]，それは知られていない．第 3 代可汗の称号の冒頭に，他では知られていない kwn = kün を補う点に関しては，森安・吉田（出版予定）参照．

8 行

(1)x’γ-’n(ny)sty c’nkw šxy wyδ’sγwny ’n(y)’z-’nkw wm’t pr s’t β(rγ)nh ZY c’nkw ’xš’wnδ’ry w’δy(ny)sty ZY ctβ’r kyr’n wy(zp)’ ZY pckwyr [wy(2)](δβ’)xs pr prn ZY prnxwntk(yh)p[r(4)py](r’y)ZY γrβ’kyh pr γny ZY [mrt’nyh 大きな破損]

(1) 可汗が位についた．彼はすべての側面でとても驚嘆すべきであり格別であったので，（その彼が）支配者の座に就いたとき，四方に驚愕と恐れが（2）[広] まった．（彼は）栄光と栄光持てること，（4）[信仰] と智慧，技倆と [男らしさ] において [< 大きな破損 >]

8（1-1） OH mšy, YY m(..), JH/SW m(r)ty, YY2(**š**)**xy**.（**図**）

初頭の文字は確かに m- に見えるのだが，1 行目の mwnkw のような，初頭の m の確実な例と比べると，s ないし š の下の部分に余分なストロークを加えたように見える．Radloff 拓本で見る限り，JH/SW の m(rt)y は不可能であるようだ．というのも，最初

[64] 13 行目の 3 代可汗から 4 代可汗への継承記事では，3 代可汗は pwkw x’γ’n と呼ばれている．

の文字と語末の文字 y の間のスペースは小さくて，とうてい 2 文字は入らないように見えるからである．筆者はやや大胆ではあるが，初頭の文字を š と読んで全体を š(x)y「とても, 堅固に」と読むことにした[65]．この場所には後続する wyδ'sγwny「奇特な」を修飾する副詞が期待されるからである．この部分は estampage では m'yδ のようにも見えた．この語も後続の語を強調する副詞としても使うことがある（DMSB, p. 110b）.

8（1-2） OH/YY/JH/SW kyr'nw, YY2 **kyr'n**.（図）

拓本では見づらいが，estampage で見てみると語末に -w は確認できない．その一方で，語中の -'- の下にループ状の筆画が見え[66]，全体は文字 t とそれに続く垂直の尾のように見える．石工は最初 kyrt と彫り，後に誤りに気づき，長い尾を付け足して訂正したように見える.

8（1-3） JH wyn(p)', SW/YY2 **wy(zp)'**.（図）

拓本上では OH も YY も全く読むことが出来なかったこの語は，なぜか estampage 上では非常に明瞭に読み取ることができる．後知恵ではあるが，拓本の印影もそのように読むことが出来る.

8（1-4） JH/SW/YY2 **pckwy(r).**（図）

この語も OH，YY どちらも全く読むことができなかった．Radloff の拓本では良く見えないのである．しかし京大拓本では明瞭であるし，estampage でもよく見えている.

8（1)-(2） OH](.)wγs, YY mn](t)wxs, JH(p)////(2)//mwxs, SW(p)[t(2)y](m)wxs, YY **[wy(2)](δβ')xs**.（図）

Frag. 2 の最初の部分はほぼ確実に](.)wxs と読むことができる．OH と YY の読みはこの読みに基づいている．JH は mwxs と読むが，文字 m は全く確認できない．SW の (p)[t(2)y](m)wxs「彼は身につけた，着た」は，JH の読みから可能なソグド語形を推定したものだが，全く文脈に合わない．SW 自身はそのことをよく認識していて，脚注で w[yδ]β'xs「広まった」と読む可能性を示唆している．筆者は SW のこちらの提案を採用した．おそらく文字 β と文字 ' の結合が -w- のように見えるのであろう．さらにそ

[65] その限りでは šyr も可能である.

[66] ソグド語銘文は縦書きされているので，ループ状の筆画は実際には右横に存在する．本稿では通例に従い，ソグド文字を横書きされたものとして図版を作成しているので，このような表現になるので注意されたい.

れに先行する文字δの一部も，かすかに見えているように思われる．SWの提案にはJHが（p）と読む部分をwと読むことも含まれているが，estampageでも拓本でも，Frag. 1の左端に文字の痕跡を確認できなかった．

8（4）JH p/ / / /(4)/ / /(•šzn)y γrβ'kyh, SW p[r(4)](•šz)ZY γrβ'kyh, YY2 **p[r(4)py](r'y?) ZY γrβ'kyh**.（図）

ZYに先行する部分は殆ど読むことができない．従って，筆者の読みは拓本やestampageから文字を読み取ったというよりむしろ，14行目のpr RBkw p(yr'y)ZY γrβ'kyhに基づく復元に近い．

9行

(1)ZY ptškw'nh "γt w'nkw ZY cymyδ t(r)γty'kh β(r')yδt ZY ZKn z-'wr δβrδ' ZY c'nkw βγy 'xšywny 'y(n)y ptškw'(n)h ptyγwš (x)wt(y ')M 'rps[t'(2)]kw 'sp'δy p(r)'yw kw βγp(wr)st(n)w s'r x[r'(4)](m)tδ'rt xyδ 'sp'(δy)['n 大きな破損]

(1) そして（可汗への）依頼のメッセージが来た：「この逼迫（した状況）から救って下さい．そして彼に援助を与えて下さい．」神（のごとき）帝王はこの依頼のメッセージ聞いたとき，自ら強力な（2）軍隊とともに天子の国（＝中国）へと（4）赴かれた．その軍隊の [< 大きな破損 >]

9（1-1）YYβ(wc)δt, JHβ(rn)ydt, SW/YY2 **β(r')yδt**.（図）

文字の読みは比較的に確実である．βr'yδtは*βr'ytδ「助けて！（2人称複数命令形）」から音転位によって成立した形式である（DMSB, p. 55b）．この同じ形式は未発表の文書Ch/U 6536aにも在証されているので，単なる誤記とは考えられない．実際にそのように発音されていたと考えられる．語末において摩擦音と閉鎖音が音転位を起こす例としてはpwtystβ ~ pwtysβtの例が知られている（Yoshida 2008, pp. 344-350）．βr'ytの語源*fra-yātaya-についてはSims-Williams（1989, p. 261）を参照せよ．コレズム語の同源語はfy'cy'k（不定詞形）である．

9（1-2）OH/YY/JH/SW/YY2 **ZKn.**（図）

京大拓本やestampageではnkynないしはnkrynのように見える．しかしそのような

語は知られていない．ZKn のいくらか不規則なこの外見は，碑文の表面のいびつなへこみのせいであるようだ．この文脈では ZKn は z'wr に先行する冠詞ではあり得ず，3 人称の人称代名詞である．従って ZKn z-'wr δβrδ' は「（あなた方は／あなた様は）彼を助けなさい」を意味する．この場合「彼」と呼ばれているのは手紙の差出人であろう．漢文史料によれば，牟羽可汗に信書を送ったのは，史思明の息子の史朝義であった．ただしソグド語の銘文を素直に読めば，手紙を送ってきたのは中国皇帝であったように見える．

9（1-3） OH δynδ'ry, JH dynd'(r)y, YY/SW δβrδ' ZY, YY2 ***δβrδ' ZY**.（**図**）

拓本と estampage を具に見れば，石工は最初 δynδ' と彫ったようだ．これは意味の無い語形であるが，ここで期待される δβrδ' と外見が似ているので，単なる誤刻であったのだろう．石工はその後 c'nkw を彫ってから，ZY を彫り忘れたことに気づき，δynδ' 末尾の -' の尾の部分に ZY に当たる文字を刻んだ．その結果，*δβrδ' ZY を彫るつもりで成立した δynδ'-ZY を，OH と JH は δynδ'ry と読んだ．

9（1-4） JH βwty or ywty, SW/YY2 ***xwty**.（**図**）

初頭の文字は実際のところ x- よりは β- あるいは y- のように見える．しかしながら，estampage をよく見ると，小さめの文字 x が β-/y- の下に添えられていることがわかる．[67] この場合も石工は自分の犯した誤りを訂正しようとしたのであろう．

9（2-1） OH(t)γyw, YY(..)yw, JH/SW/YY2 **p(r)'yw**.（**図**）

初頭から 2 番目と 3 番目の文字は合体して，š あるいは x/γ のように見える．OH の読みはそのためである．しかし文脈を考えればここに前置詞 'M と呼応する後置詞 pr'yw を読むことに何ら問題はない上に，残画も矛盾がない．

9（2-2） JH zkw, SW/YY2 **kw.**（**図**）

kw と読むことに問題がない訳ではない．Radloff 拓本を素直に見れば，kpy「魚」と書いてあるように見える．Frag. 2 の京大拓本は全体として Radloff のものに比べて良く読めないので，p に見える文字の後にもう一画あったかどうかを調べるには役に立たない．京大拓本は Radloff 拓本を作成してから十数年後に作成されたものだと考えられるが，その間に表面の劣化が進行したようだ．1997 年に作成された阪大拓本に至っては，

[67] 銘文は縦書きであるから，実際には β- /y の右横に添えている．

実際上利用価値がなくなっている．文脈から期待されるのは, 前置詞 kw（書記上のヴァリアントは 'kw, k'w）なので，-y と見えるのは，書き損じか碑文表面の破損のせいなのだろう.

9（2-3） JH βγpcystrw, SW *βγp（wr）st（n）w, YY2 **βγp（wr）st（n）w**.（**図**）

吉田（1988, p. 43）でも述べたように，文脈からここには中国を意味する語が期待される．筆者は当時 cynstnw を読もうとしたが残画とは合致しない．JH の読みをもとに SW が提案した読みは，残画とも一致し意味の上からも問題がなく筆者もこれに従う．なお βγp'wr-stny は Pelliot sogdien 8, line 166 に在証されている．Henning（1946, p. 736）によれば，βγpwrstn は 8 世紀のソグド語で中国を意味する語であったという.

9（2）-（4） JH γ/ / / /[（4）]（š/γ）td'rt, SW x[rt ...（4）]（γ）tδ'rt, YY2 **x[r'（4）]（m）tδ'rt**.（**図**）

Frag. 4 の右端の文字はあいまいで，estampage でも拓本でも字形を確定できない．SW は脚注で x[r']（m）tδ'rt の読みを提案している．文脈を考慮したのであろう．この読みは DMSB, p. 216a において採用されている．筆者もこの読みに従う.

9（4） JH 'sp'yš, YY/SW 'sp'（δy）, YY2 **'sp'（δy）['n]**.（**図**）

筆者の復元は確実ではないし，文脈上必ず期待される語形であるわけでもないが，直格の指示詞 xyδ に後続するので，'sp'δ「軍隊」の斜格形ではない語を復元しただけである．その一方で 'sp'（δy）の最後の 2 文字は模糊としていて , JH の読みの 'sp'yš あるいは 'sp'ys も十分に可能である.

10 行

（1）（δβ）tyk（w）'nxw（n）cw 'krtw δ'r'nt s't δynykt *"z-y<r>'nt ZKw βγy m'rm'ny δynh（w'βr）c'nkw 'yny（n'p）t 'βškrty wβ' βγy 'xš（'）y-wny 'M 'r（p）[s（2）]t'kw '（s）p'δy pr'yw mδy（'w）ytwk'n z-'y（h）[（4）s]（'r "γ'）z-'nt "（γ）t[　　]kw s't•γ•t（rt）[y ある程度破損（6）]（n）ctβ'r ptšm（'r••••δ•••）[大きな破損]

（1）彼らは再び戦闘を行なった．異教徒たちはみんな神なるマール・マーニーの宗教をそれほど迫害したので，この人々は追放された．神（のごとき）帝王は（2）強力な軍隊とともに，ここオチュケンの地に連れて来はじめた [< ある程度破損 >（6）] 数にして四 [< 大きな破損 >]

10（1-1） JH（dβ）ty（k）y, SW（δβ）ty（k）y, YY2（**δβ）tyk（w）**.（**図**）

拓本では全体はぼやけていて文字の判読が難しく，OH も YY も単語を読み取っていない．SW は脚注で，むしろ（δβ）ty（k）w と読むべきではないかとしている．最後の文字も曖昧模糊としているので，-w で終わるより一般的な形式を筆者は採用した．

10（1-2） JH ’nγwncy, SW ’nxwncy, YY/YY2 **’nxwncw**.（**図**）

ここでも SW は脚注で ’nxwncw と読むべきではないかとしている．実際の所，estampage でも拓本でも語末の -w は確実である．

10（1-3） JH（zw’z）-y（’nt）, etc., SW *（pt）z-（’）’nt “acknowledged”, YY2 ***”z-y<r>’nt**.（**図**）

estampage でも拓本でも ”z-y’nt「彼らは生まれる／生まれた」は概ね確実に読み取れる．しかしこの語は文脈において意味をなさないから，SW は異なる読みを提案したが，語頭に p を読むことはできない．筆者はテキストに修正を加えて ”z-y<r>’nt「彼らは傷つける，痛めつける」と読んで見た．外見では類似する 4 つの文字（y, r, ’, n）を誤って 3 文字しか彫らなかったと考えるのである．もっとも全体を ”z-yrnt と読めば修正の必要はなくなる . その一方で *”z-’n’nt のように修正して読んで, 想定される動詞 *”ž/z’n を，マニ教文献に見られる trγty’ ”j’nynyṭ（cf. GMS §890 , M 134 I R 4；”j’n の現在分詞形）と同じ動詞とみなすこともできるかもしれない．Sundermann（1981, p. 178b）は，この動詞の現在分詞形を “die Bedrückung *Abwendenden（憂いを回避する）” と翻訳するべきかとする．しかし DMSB, p. 6b によれば ”j’n の意味は不明である．

10（1-4） JH（w’βd）, etc., SW（w’βyδ）, YY2（**w’βr**）.（**図**）

初頭の w- は通常の w より遙かに大きく奇妙であるが，他の読みはできない．それに続く部分は模糊としているが，筆画がベースラインより上に突き出るような文字はないので，JH/SW のように δ と読むことはできないように見える．

10（1-5） JH ’（dp）t, SW ’（δp）t, YY2（**n’p）t “people”?**（**図**）

文脈からはマニ教徒の弾圧が問題になっているように見える．n’p（= n’β）「人民」の複数形は必ずしも期待される形式ではないので [68]，z’kt「（原義）息子たち」と読むべきかも知れない．ベゼクリクで出土したマニ教ソグド語の手紙では δynz’k「宗教の子供，息

[68] しかし 19 行目では複数形の n’βt が見られる．10 行目で n’pt が複数形である背景として，迫害されたマニ教徒に，中国人以外に他の民族がいたということも考えられなくはない．

子」は僧侶を意味している．対応する中世ペルシア語の表現 dyn przynd'n やウイグル語の nom oγulanï も参照せよ（Yoshida 2019, p. 197）．ただしこれに一致する後続の定動詞は，3 人称単数形の 'βškrty wβ' であって，複数形の主語を想定するのはやや躊躇する．

10（1-6） 'βškrty wβ'「迫害・追放された」．動詞 fškr- の意味については，Sims-Williams 2019 を参照せよ．

10（1-7） JH rm, SW —, YY2 **'M**. SW は JH のノートにある，判読が難しい文字で書かれた分かりにくい説明を，この段階では見逃していたようである．しかし現在は正しく認識している，DMSB, p. 73a.

10（2-1） JH（yty）, SW（rty）, YY2 **pr'yw**.（**図**）

SW は脚注において JH の読みを疑っている．Radloff の拓本でも京大拓本でも rty や yty の読みは全く支持されない. 先行する前置詞 'M と呼応する後置詞 pr'yw が期待され，拓本に見える文字の残画と矛盾しない.

10（2-2） JH（.）prm"y, etc., SW prm（'n）, YY2 **mδy**.（**図**）

JH と SW が文字 p と見なした部分は，先行する後置詞 pr'yw の語末の -w である．JH はこの w とそれに続く空白部と m を prm と読み，動詞 prm'y「命令する」と関連する語を想定したようだ．Radloff 拓本では m の直後に δ がはっきりと見えている.

10（2-3） OH twtwk'n,[69] JH/SW γrβtwk'n, YY2（**'w）ytwk'n**.（**図**）

文脈と後続する z-'yh「土地，地方」からここには地名が期待され，さらにそれが -wtk'n で終わっていることから, 古代トルコ語の ötükän yer「オチュケンの地」（トニュクク碑文）に対応するソグド語の表現であることが分かる．拓本に残る残画も 'wytwk'n と矛盾しない．オチュケンの地とは，オルホン河の流域で，突厥やモンゴルなどモンゴル高原の遊牧民が都を置いた草原で，カラバルガスン遺蹟もここに存在する.

10（4-1） JH]（k）pγ p（y）z'nt "（s）t, SW]（k）pγ p（t）z（'n）t "（s）t "acknowledged, took", YY2 **"γ'z-'nt "（γ）t**「彼らは来始めた／将来し始めた」.（**図**）

この部分では z-'nt の読みはほぼ確実である一方で，先行する部分は模糊としている.

[69] Livshits（2015, p. 72）は未だにこの語形を引用して，totoq の複数形だとしている.

ただしこの部分には，筆画がベースラインより下に来る p のような文字は確認できない．筆者は，後続する ”γt（”st ではない）を過去不定詞と見なし，それを支配する動詞として ”γ’z「～し始める」を想定した．”γt は動詞 ’ys「来る」あるいは ”βr「持ってくる，将来する」の過去不定詞である．

10（4-2） JH/SW/YY2 **s’t•γ•t（rt）[y.**

筆者の読みは JH のそれを踏襲したものに過ぎない．estampage ではよく判読できなかった．JH の読みは Radloff 拓本に基づくのだと思われるが，そちらでも文字は良く見えない．

10（6） OH .. ctβ’r ptšmr. . . . .δ . . .tw, JH ////(t)ctβ’r ptšm(rt)•••δ• •••tw///, SW](t)ctβ’r ptšm(’r)•δ• •••tw[, YY2 **](n)ctβ’r ptšm(’r••••δ•••)[.**（**図**）

Frag. 6 の右端には，文字の長い尾が見えている．pt(š)- に後続する部分は Radloff 拓本では失われている．京大拓本では文字を確認できないものの，残画は残っているので，Radloff 拓本の原拓には存在したのであろうが，写真版を作成する際に削除されたのだろう．OH はその原拓の写真を提供されていたのかもしれない．いずれにしても JH の読みは OH の読みに基づいているのだと考えられる．OH の読みは最後の tw 以外，京大拓本と比べて矛盾がない．漢文版の VIII 行目の「將睿息等四僧入國」と比べることによって，[δn](n)ctβ’r ptšm[’ry δyn]δ[’rt pr’yw]「4 の数の僧侶と共に」と復元できるかもしれない．

11 行

(1)[•](p•)yšy-m(s)k(wn)w ZY ptkwnw pδkh δ’rymskwnw ZKn δywty ’spyšymskwnw kδry βγy ’xšy-wny ’rky βynt ’yny δsty ’krty p(tkr’y)t s’t [(2)] ”try swc(’y)δy(n)h βγy m’rm’ny δynh ptcxš(’)[(4)](y)pts’r βγy ’xšy-wny[ある程度破損(6)’]šm’xw L’ ptcγt kwnδ’(p)[’r]ZY[大きな破損 (Frag.Rus.)](•••)t [わずかな破損]

(1) 我々は [...] している．そして我々は誤った法（教え）を持っていて，悪魔たちに仕えている．さて，神（のごとき）帝王はこの（人間の）手で作られた（偶）像をみんな (2) 火で燃やし，宗教としては神なるマール・マーニーの宗教を受け入れることを（臣下たちに）委託した．(4) それから，神（のごとき）帝王は [< ある程度破損 > (6)]

あなたがた（或いは：帝王である，あなたは）は受け入れる事はできない（或いは：できなかった）．[なぜ] なら [< 大きな破損 >]

11（1-1） JH 'spyšy(-)my(-)k(')rw, SW *'spyšy-m(s)k(wn)w, YY2 **[•] (p•) yšy-m (s) k (wn) w**.（**図**）

筆者は estampage で [ ](p•)yšy-mskwnw しか確認することができなかった．また文字 p は，11 行目の殆ど冒頭に位置するので，その前に 's- を復元するスペースはないように思う．図ではその点を見るために，9 行目から 11 行目の冒頭部を掲げた．筆者にはどのようにして JH が 'sp- の読みを得たのか理解できない．いずれにせよ ZKn δywty 'spyšymskwnw がすぐ後にあるので，'spyšymskwnw という形式は必ずしも期待されるわけではない．(pr)yšymskwnw「我々は送っている」や，[n](p')ysymskwnw「我々は書いている」と補うこともできるかもしれない．

11（1-2） 複数形の名詞 δywt「悪魔たち」に先行する冠詞の ZKn は所謂 general obl. form（DMSB, p. 37a, s.v. 'wyn）である．

11（1-3） JH(p')y y('n)t, SW *(pt)y-(syn)t, YY2 **'rky βynt**.（**図**）

文脈からは，可汗が家来たちに対して為した行為が期待され，SW の(pt)y-(syn)t「彼は同意した」はそこから来ているのであろう．しかし，拓本でも estampage でも s の読みは不可能である．もし後続する swc'y「燃やす」が現在不定詞なら，この動詞に支配されていることになる．筆者の 'rky βynt は，他の二つの読みに比べて，残された文字の形に良く合致する．字義通りには「仕事・任務に拘束する」を意味するが，この文脈における意味を推定するには対応する漢文版が参考になるように思う．漢文では「(曰) 既有志誠任即持賫應有刻畫魔形悉令焚爇（既にして志誠有り，即ち應有あらゆる刻畫魔形を持賫して，悉く焚爇せ令しむるに任す．)」とあるから，'rky βynt は「任す」に対応することになる．'rkβynty という複合語は知られており DMSB, p. 18a は "setting (someone) to work" と訳している．また 'rk と βynt の組み合わせは Vessantara Jātaka の 1238–1240 行に在証されている：rty šn nwkr 'wyn pr''mn 'ynch pr'γ'z 'rkh βsty ZY prm'nh prm't「さてバラモンの妻は彼らを仕事に拘束し，命令を与え始めた」(Benveniste 1946)．

11（1-4） JH/SW（p）'ty 'pyšm（r）t, YY2 **'krty p（tkr'y）t**.（**図**）

筆者が estampage と拓本で見ることができる限りでは，JH/SW が p'ty と読む部分の p はあり得ない．この文字はむしろ k と読むべきであり，さらにその前に小さな文字の跡が見える．結局筆者はこの部分を 'krty「作られた」と読む．ptkr'yt「偶像，像」については，12 行目の δsty 'krt(y)ptkryt「（人間の）手で作られた偶像」を参照せよ．これは漢文版の「刻畫魔形」に対応する．

11（2）-（4） JH ptcγšδ ////š, SW *ptcxšδ['r'nt ...]š, YY2 **ptcxš（'）[]（y）**.（**図**）

既に繰り返し述べているように Frag. 2 と Frag. 4 の間の破損部は極めて小さい．著しい場合は 14 行目で，そこでは事実上 1 文字も失われていない．従って JH が š と読む文字は，ptcxš で始まる語の末尾である可能性が高い．JH が δ と読む文字は上部が破損していて，δ であることは不可能ではないものの確実ではない．筆者は ptcxš（'）[]（y）と読んで，先の 'rky βynt に支配される ptcxš-「受け取る」の現在不定詞と考えた．もしも Frag. 2 の最後の文字が δ であるとすれば，Frag. 4 の冒頭の破損した文字は，その δ の末尾である可能性もある．その場合，この語に ptcxš（δ）と読むことになるが，それは 2 人称複数の現在形ないし命令形になる．前後の文脈を考慮すれば命令形であって，δynh ptcxš(-)[(4)](δ)「あなた方は宗教を受け入れなさい」と翻訳される．12 行目の pr'm'y w'nkw ZY ptcxšδ「（可汗は）命令した：『あなた方は（マニ教を）受け入れなさい』」も参照せよ．この解釈を採用すれば，kδry 以下は，「さて，神（のごとき）帝王はこの（人間の）手で作られた（偶）像をみんな（2）火で燃やすことを（臣下たちに）委託した．『あなた方は，宗教としては神なるマール・マーニーの宗教を受け入れなさい』（と言いつつ）」.

11（4） JH 10 cm ny dy[n]h（p）t[cγ]šd（z）m（y）ny（p）7 cm, SW（δ••••••••••••）ZY δy[n]h（p）t[cx]š（δ'rt）ZY（p）[, YY2 **[no text]**.

SW のテキストは JH の読みに従って入るだけのようだ．estampage でも拓本でも，確実に読み取ることが出来る文字はないので，筆者はここでは文字の読みを提示しない．JH のこれほど多くの文字の読みがどのようにして得られたのか筆者には分からなかった．

11（6-1）'ǰšm'xw L' ptcγt kwnδ'「あなた方は（マニ教を）受け入れることができない（能

力が無い)」．動詞は現在形であるが，否定文なので，未完了過去の否定文と解釈することも不可能ではない[70]．この碑文では，本来軽語幹であるはずの動詞 ptcxš-/ptcγt- は，一貫して重語幹の活用を示すが，その理由は筆者には分からない．ただこの動詞は重語幹の振る舞いをすることが他でも認められる（DMSB, p. 152）.

11（6-2） JH pty(mw)..., SW pty mw[z'k', YY2(**p**) **['r]ZY**.（**図**）

筆者は estampage でも拓本でも，JH が読んだ文字を確認する事はできなかった．SW は JH の読みに基づいて，pty を慕闇の名前と解釈し Patti と翻訳している.

12 行

(1)(wy)δp(')t (β)γy 'xšy-wny pty-s(yn)t prm'nh pr'm'y w'nkw ZY ptcxšδ cywyδ pyδ'r δyw(t)y 'sp's(z-w)šy ZY nm'cw(")γtδ'rym xy-(δ)δsty 'krt(y)[(2)] ptkryt ZKwy γr'(m')kw (n')m (z-')yh s't "try (s)[w(4)](c)ym ZY(γr)'n βγy 'x(š)y-[wny ZY](wyspδ)[ryt]••••••• βγy m'rm'ny [δynh ある程度破損(6)]('sky)ZY c'δr c'nkw βγy(mry)nyw(rw)'n m(w)z-'k(')[大きな破損（Frag.Rus.)] (p)wrst'y mrts'r [rty ZKwy(Frag.Paris)'xš']w'nty

次行に続く

(1) その時，神（のごとき）帝王は同意して，命令を発した：「受け入れなさい．その故に私たちは，悪魔たちに供養と，犠牲と捧げ物を捧げた．その（人間の）手で作られた（2）（偶）像を富という名前の土地で，みんな火で燃や（4）そう.」そして偉大な神（のごとき）帝 [王と] 王子たちは ... 神なるマール・マーニーの [宗教 < ある程度破損 >（6）マニ教徒たちは往来した（?)] 上方と下方に（＝東西に）．神（のごとき）マール・ネーウ・ルワーン慕闇は [オルホンの宮廷にやってきた(?)< 大きな破損 >(Frag. Rus.)] こちらに帰った．そして領土の各地に < 次行に続く >

NB：Frag.Rus. については「Ⅰ-2 ソグド語面の復元：断片の位置の推定」を参照せよ.

12（1-1） JH(wy)p(y)t or "p't, SW/YY2(**wyδ**) **p(')t**.（**図**）

---

[70] 2 人称複数形は，2 人称単数の敬語形としても使うことができるので（吉田 2006），ここでは可汗が主語である可能性も排除できないことにも留意が必要である.

estampage において文字 δ を確認することができるので，SW の提案が正しかったことが判明する．

12（1-2） JH pšγtd'rym, SW pšγtδ'rym, YY/YY2 **(”) γtδ'rym**.（**図**）

この語の初頭部分は破損が著しい．最初の文字は p- から '- に修正されているように見えるので，筆者は（”）γtδ'rym「我々は持ってきた」と読んだ．いずれにしてもこの文脈では pšync/pšγt-「（液体を）注ぐ」は期待されない．この本文批判については「Ⅲ-１（C）他の特徴と石工による彫り損じ」も参照せよ．

12（1-3） JH γm(d) or γm(y), SW γm(y), YY2 **xy-(δ)**.（**図**）

JH が γm(d) あるいは γm(y) と読む語は，おそらく xy-δ と読むべきなのだろう．

12（1-4） JH 'št///, SW 'št[, YY2 **'krt(y)**.（**図**）

拓本や estampage を一見すると，JH/SW の 'št[の方が筆者の 'krt(y) より優れているように見える．しかし具に見てみると，彼らが š と読んだ文字は，通常の š に比べてかなり大きくいびつである．それ故筆者の kr も不可能ではない．また文字 t の後ろには y の痕跡が見えている．上でも見たように，11 行目に δsty 'krty ptkr'yt が在証されているから，その同じ組み合わせをここに読み取ることに問題はないだろう．

12（2-1） YY γr'(...)kw(n')m(z-')yh, JH γr't'kw(t)'m(z')yh, SW γr't'kw(n')m(z-')yh, YY2 **γr'(m')kw(n')m z-'yh**.（**図**）

JH/SW が γr't'kw と読む語では -t- が異常に大きく，kr のようにさえ見える．つまり -t- の読みは確実とは言えない．後続する n'm z'yh「～という名前の土地」という表現から，ここには地名が期待され，当時はある程度知られた地名であったことが示唆される．ところが，この名前に含まれた文字 x/γ と k は，ウイグル語の母音調和・子音調和のに合致していないので，ウイグル語の要素ではなかったことが知られる．それ故筆者は，γr'(m')kw と読んで「富」を表すソグド語と解釈する．-t- にしても -m- にしても，拓本で見ることが出来る筆画とは必ずしも合致しないことは同じである．しかし γr'm'kw「富」という地名は，Šine Usu 碑文（西面 5 行）に見られる Bay Balïq「富の町，富貴城」を容易に想起させるので，ここでは Bay Balïq を意味していると考えたい．

12（2）-（4） JH s////(4)//d(')rym, SW(s)[wγtw(4)]δ(')rym, YY/YY2(**s**)**[w(4)]cym**.（**図**）

Radloff 拓本でも京大拓本でも，Frag. 4 の冒頭の]cym は非常に明瞭である．しかるに

estampage では対応する箇所に文字の痕跡を確認できなかった．いずれにしても δ の読みは不可能で問題にならない．Frag. 2 と Frag. 4 間の破損は極めて小さいことも，SW の推定を支持しないだろう．

12（4-1） JH srβw(γ) or snww(š), etc., SW *(š'n)w(x), YY2 **γr'n**.（**図**）

この場合も estampage では文字を確認できなかった．問題の語は γ/x, š, s のような文字で始まり，水平に伸びる長い尾で終わっている．その中間は模糊としているので，š'nwx と γr'n のどちらも不可能ではない．筆者が ' と読んだ文字を JH/SW は w と読んでいる訳だが，' の前に石の表面の凹凸があり，それが ' と合わさって w のように見えているのだと思う．国会図書館の拓本は γr'n の読みを支持するように見えた．

12（4-2） JH(wyspd)•••••••••• βγy m'rm'ny ••••••••••, SW](wyspδ)[ryt]••••••• βγy m'rm'ny [, YY2 **](wyspδ)[ryt]••••••• βγy m'rm'ny [ ]**.（**図**）

筆者は estampage に（wyspδ)[ryt] を確認する事が出来なかった．Radloff 拓本には何も見えないが，京大拓本にはかすかな文字の跡を見ることができる．しかしここの文字を読むことは不可能であった．βγy m'rm'ny についても状況は同じで，Radloff 拓本では何も見えないが，京大拓本と estampage には文字の痕跡を認めることができる．筆者は，ここでは概ね JH/SW の読みに従っている．

12（6-1） JH /•γšy(z)kw(y)/RBkw, SW]*(')xšy-(wn'kw)(?), YY2(**'sky?)ZY**.（**図**）

c'δr の前では ZY を除けば文字の跡は見えるが，全体として模糊としている．筆者の 'sky は c'δr の反意語をここに推定しただけである．'sky と c'δr の組み合わせは Pelliot sogdien 3 の 234-235 に見ることができる．そこでは，'sky と c'δr はそれぞれ東と西を意味している（Azarnouche / Grenet 2010, p. 64）．実際，漢文版の対応する箇所である X 行目には「東西」が見えている：東西循環，往來教化（東西に循環し，往來して教化す）．

12（6-2） JH βγy 'γšy-wny, SW βγy('xšy-wny)(?)(•••), YY2 **βγy mry nywrw'n**.（**図**）[71]

SW の 'xšy-wny 読みは JH のそれを踏襲しているだけであるが，JH 自身は筆者が rw'n と読む部分で rw- と読むべきかと疑うメモを残している．拓本では βγy の後に m'r（或

[71] ここの図には，1997 年に筆者もメンバーとなっていた大阪大学のチームが，現地で採拓した Frag. 6 の拓本の対応する部分も含めている．

いは mry）と読むことができる．nywrw'n は阪大拓本のほうが良く残っている．牟羽可汗がマニ教に改宗した当時の慕闍の名前は，森安が研究したマニ教ウイグル語の断片にも残されている．この慕闍及び当時の状況に関しては上記「Ⅱ-2-1 マニ教導入の経緯」を参照せよ．

13 行

(1)[w](yδβx)s pw z-r'yš wβ' c'nkw pwkw x'γ-'n tnp'r pr'γtδ'rt w'nkw 'l-pw xwtl-wγ pyl-k' x'γ-'n nysty xwty šyr γrβ'kw ZY(γ)[n(2)](k)ynw wm't(ZY)'(sky c'δ)r γrβ 'xš'wncykw 'rkh (')[(4)](k)rtw δ'rt ZY 'x(š'w)['nh ある程度破損(6)c'nkw t]np'r p'rycw tnkryδ' pwl-mys kwl-wk pyl-k' x('γ)[-'n nysty 大きな破損（Frag.Rus.)] ZY mγ-wnw z-γtw δ'rt [(Frag. Paris)c'n]kw 次行に続く

(1) 広まり，（往来に？）途切れることがなくなった．③牟羽可汗が身体を棄てた（＝身罷った）とき，かくして④ Alp Qutluγ Bilgä 可汗が位に即いた．自身はとても賢く (2) [雄々] しかった．そして上方でも下方において（＝東でも西でも）国家に関わる多くの仕事を行ない，領土を [すばらしく（?）維持した < ある程度破損 >（6）この可汗が] 身体を棄てた（＝身罷った）とき，⑤ Tängridä Bolmïs Külüg Bilgä 可 [汗が位に即いた < 大きな破損 >（Frag.Rus./Paris)] そして全部を保持した．[そして] < 次行に続く >

13（1-1） JH/SW [wy]δβxs, YY2 **[w](yδβx)s**.（**図**）

estampage には，明瞭な s の前に yδβx のように見える文字の痕跡を確認できた．しかし拓本では s だけしか確認できない．

13（2-1） YY 's(ky. . . .), JH('γ's'tk w)xsyr, SW '(s•s•••w)xsyr, YY2 **'s(ky c'δ)r**.（**図**）

文字の痕跡は見えるがあまりに模糊としていて，この部分で文字を読み取ることはできない．筆者の読みは単なる推定だが，文字の痕跡と矛盾しない．

13（2)-(4） JH/SW(w)[...(4)']krtw δ'rt, YY2(')**[(4)](k)rtw δ'rt**.（**図**）

Frag. 2 と Frag. 4 の間の破損はとても小さいので，Frag. 4 の krtw と Frag. 2 の末尾の文字の跡との間に 1 語を復元することはできないように思われる．従って，JH/SW が

(w)[と読もうとする文字は，実際には 'krtw-δ'rt の初頭の '- であるのだろう．

13（4） JH/SW 'xš'w'(n)yh ••••••pw• •••t••••• δ'rt ZY(w)[].

筆者は 'x(š'w)['nh の後に，拓本でも estampage でも判読できる文字を認めることができなかった．しかし JH/SW の読みは以下のように復元できるので，正しく文字を読み取っていた可能性が高い：'x(š'w'nh šyr xw)pw(ZY p)t(s'γty z-γtw?)δ'rt ZY(c)['nkw ... x'γ'n(6)t]np'r p'rycw「彼は領土をとても良く整った状態で保持した．…可汗が身体を棄てたとき」．šyr xwpw ZY pts'γty z-γtw δ'rt という組み合わせについては，14 行目を参照せよ．この復元が正しいとすると，Frag. 4 と Frag. 6 の間の破損部はそれほど大きくなかったことが知られる．この点については「Ⅰ-2 ソグド語面の復元：断片の位置の推定」を参照せよ．

13（6） SW は tnkryδ' pwl-mys kwl-wk pyl-k' x'γ-'n *(nys)ty と読み，あたかも nysty の部分が残っているように考えている．これは OH のテキストの対応する部分にある γ'γ-'n γšty を参考にしているのだと考えられる．しかし拓本で見る限り nysty に当たる部分は完全に破損して存在しないので，γšty は OH の推定復元であった可能性が高い．

14 行

(1)xwtl-wγ pyl-k' x'γ-'n 'βc'npδy xr'mtδ'rt pts'r tnkryδ' 'wl-wk pwl-mys 'l-pw xwtl-wγ 'wl-wγ pyl-k' x'γ-'n [(2)nys]ty pr RBkw p(yr'y)ZY γrβ'kyh γny ZY mrt'ny-'kh(4) prnxwntkyh(ZY)prnpδ['ky'kh ある程度破損 (6)]šyr xwpw ZY pts'γty z-γtw δ'rt ZY wyδp'(t) [大きな破損（Frag.Rus.）kw prnxwntk(?)'x]šy-wn'kw s'r m'δ ptyškwy'(n)[t? 軽微な破損で次行へ]

(1) ⑥ Qutluγ Bilgä 可汗が，（この）世界を（出て）行ったとき（＝崩御したとき），そのとき⑦ Tängridä Ülüg Bulmïs Alp Qutluγ Uluγ Bilgä 可汗（＝第 7 代懐信可汗）が (2) 位に [即] いた．偉大な信仰と智慧，技倆と男らしさ，栄光持てることと栄光あることによって [< ある程度破損 >（6）領土を] とても良く整備された状態で維持した．そしてその時，[< 大きな破損 >（Frag.Rus.）栄光ある（?)] 帝王に，次のように彼らは申し上げた（＝奏上した）．[< 軽微な破損で次行へ >]

NB：この行では，第 7 代懐信可汗の即位の記事の後に，臣下たちが可汗に嘆願するシーンが記され，その嘆願は 15 行目まで続いているように見える．臣下たちは懐信可汗に，王子時代の後の 8 代保義可汗を後継者に任命するように願っているようだ．この部分は漢文版では，破損している XI 行目の末尾から XII 行目にかけてに対応していると考えられる．その部分は次のように読まれる：**愛登里囉汨没蜜 /12/ 施**合毗伽可汗，當龍潛之時，於諸王中最長．都督・刺史・内外宰相・*親***信**官等奏曰，「○○天可汗，垂拱寶位，輔弼須得賢**人**．〓〓〓〓〓〓〓*佐*治之才，海岳之量．國家體大，法令須明．特望○天恩允臣等所請.」（（その当時）⑧［愛登里囉汨没蜜 $_{12}$ 施］合毗伽可汗は龍潛の時に當り，諸王中に最長たり．都督・刺史・内外宰相・親信官等奏して曰く，「天可汗よ！寶位に垂拱せんとすれば輔弼には須すべからく賢人を得べし．[... ...]（彼すなわち後の保義可汗の）佐治の才たるや海岳の量あり．國家の體大たれば，法令は明なるを須もとむ（or 須く明たるべし）．特ただ天恩もて臣等の請う所を允ゆるさんことを望む」と.）

14（1） OH は 13 行目の末尾に cn’kw を推定復元していたが，これは Frag.Paris の発見で確実となった．なお OH の cn’kw は現在では c’nkw と読まれている．

14（2） JH p（yry）, SW p••••, YY2 **p（yr’y）**．（**図**）

表面が磨滅していて，筆者の読みを確認することはできないが，残画と矛盾しない．その限りでは JH の p（yry）も可能である．筆者は森安／オチル 1999 において p[tz-’n] を提案していた．DMSB, p. 160 s.v. [1]ptz’n では，この場所で ptz’n の読みは難しいとしている．

14（4） SW prnpδy[’kh, YY2 **prnpδ[’ky’kh**.

SW の推定復元は OH/JH の読み prnpδy... に基づいている．しかし estampage と拓本を見る限り -y は見えない．その一方で , prnpδy の抽象名詞形の frnpδ’ky’ はベゼクリクの手紙 A に在証されている（Yoshida 2019, p. 140）．類義語反復（hendiadys）を構成する単語の順序の規則（Yoshida 2019, p. 142）によれば，2 番目の単語は 1 番目の単語と比べて音節数がより少なくなることはない．*prnpδy’kh は 3 音節のはずだが，先行する prnxwntkyh は 4 音節であり prnpδ’ky’kh も 4 音節である．

15 行

(1)(••••)[](’šm)’xprn ’xš’w’nδ’ry w’δy n(y)sty ’skwδ’skwn ZY ’xš’w’ncykw ’rkh šyr γr’n ZY k(w)z-py xcy kδ’m ’yδ’k pr γ(n)[y(2)Z](Y)mrt’nyh *s’(r)L’ p(t••)nty ZY pr δynh γrβ’kyh [(4)z-]’wr ’xš’w’nδ(’r••••••••)L’ •••••••••y wyspδ(ry)t[ある程度破損(6)pr γny](Z)Y mrt’nyh MN s’t ”z-’tyty yx(ws)t[’y ZY ’ny’z-’nkw? 大きな破損（Frag.Rus.)](h) ’nβrz-βr’t δ[’r]t [(7)](•)x(y) 次行に続く

(1) [...] あなた様は支配者の座に座っておられ，国家に関する仕事はきわめてすばらしくかつ精力的です．誰も技倆（2）と男らしさにおいて勝る（？）者はおりません．そして宗教の智慧（4）の力で, 支配者 [...] ない [...] 王子たち [< ある程度破損 >（6）技倆] と男らしさにおいてすべての貴族たち（＝自由人たち）から区別され [別格だった < 大きな破損 >（Frag.Rus./7)... を，] 彼は世話した（或いは：訪れた）．[...] < 次行に続く >

NB：この行の前半部分（Frag. 6 まで）と並行する漢文テキストについては上記を参照せよ．第 7 代懐信可汗の即位後の記事ではあるが，この部分の内容は 8 代可汗の資質に関わっているようにみえる．しかるに 15 行目の終わりから 16 行目にかけては，また 7 代懐信可汗がテーマになり，懐信可汗が即位する以前，彼がまだ大臣の地位にあったときのことが記録されている．KB 碑文の漢文版に関する森安と筆者の共同論文では，第 7 代可汗の即位のときから後の 8 代可汗は, その片腕となって活躍していたのであり，そのことを明示するために，漢文版でもソグド語版でも，第 7 代可汗の即位に続けて 8 代可汗がその支配をサポートしたことが記載されているのだとしている．第 7 代懐信可汗は彼の多大な貢献から，「天可汗」という特別の称号を与えられ，碑文でも相当のスペースが彼の事績の記録に割かれているのは事実であるが，碑文それ自体は他でもない第 8 代可汗に捧げられたものであり，彼が未だ王子であった時代からの活躍を述べることによって，彼の偉大さを強調しているのであろう．

15（1-1） JH p(š)m’γprn, YY/SW/YY2(**’šm)’xprn**.（**図**）

estampage でも拓本でも JH が p と読んだ文字を確認できなかった．

15（1-2） OH p(y).p(t)', YY p(..p..), JH/SW kwzpy, YY2 **k(w)z-py**.（**図**）

estampage で見る限りでは w 以外の文字は明瞭である．2 つの拓本では文字の読みはずっと難しく，冒頭の文字はむしろ p に見える．語中の z や語末の -y の読み取りも容易ではない．特に後者は円形に見え，その後に文字が続いているように見える．OH や YY の読みはそのような拓本から判読されたものである．

15（2-1） OH/SW s'r, YY s'n, JH s't or s'n, YY2 ***s'r**.（**図**）

この語は水平の長い尾で終わっており，その限りでは s'r の読みは不可能である．語末に -t を読もうとすると，それに見合うループ状の文字の本体が見えない．筆者は結局 OH/SW の読みである s'r を採用することにした．石工は当初 s'n と彫り，後に誤りに気づき文字 r に特徴的な「頭」を添えたように見える．前置詞 pr と後置詞 s'r との組み合わせは珍しいが，数例知られている（Sims-Williams 2015, p. 70）．

15（2-2） OH ptγwnty, SW ptz'nty "(whoever in respect of skill and valour)is(not) acknowledged", YY2 **p(t•••)nty**.（**図**）

初頭の p- と語末の -ty の読みは確実だが，中間の数文字は模糊として判読が難しい．p の後の t は不可能ではないが確実ではない．文脈からは，「～より優れている」のような意味の動詞が期待される．ptrz-「起き上がる，勝ち誇る」の 3 人称単数現在形の ptrzty が ptr'zty と表記されるとは考えにくいから，-ya 語尾による派生形 *ptr'yzty（< *pati-razya-ti）と読むべきなのかもしれない．この自動詞形が存在する可能性については Yoshida（2019, p. 141, n. 268）を参照せよ．Henning 1937, p. 76 は動詞 ptγwz「覆う」の活用形だと考えている[72]．それが正しいとすれば, ptγwzty は 3 人称単数中動形とみなされるだろう．この文脈では「彼は身を隠さない」は, 優れた人はどうしても目立ってしまうほどの意味になるだろう．も一つの可能性は，*s'r を s'n「敵」，この部分を ptw'yrty と読むことである．この形式は ptw'yrt「（敵を）打ち負かす，排除する」の 3 人称単数希求法であり，全体は「（彼以外の）誰も技倆と男らしで敵を打ち負かすことはないだろう」という意味になる．

---

[72] この動詞は，Pelliot sogdien 5, line 33 に ptγwzt「彼は覆う」という動詞を認めることによって得られる動詞語幹である．この動詞を ptγwnt と読み，ptγwnt「覆う」の 3 人称単数形（ptγwnt < *ptγwnt-t）と見なすことも可能で，実際そちらの方があり易い．

15（4-1） JH]'wr, SW/YY2 **[z-]'wr**.（**図**）

京大拓本では [ ]'wr の読みはほぼ確実だが，estampage や Radloff 拓本では良く読めない.

15（4-2） JH/SW 'xš'w'nδ[']ry(w)[']δy L', YY2 'xš'w'n(δ'r••••••••)L'.（**図**）

'xš'w'nδ[']ry(w)[']δy L' は「支配者の座に…なかった」を意味し，その読みが正しければ，歴史的な背景を考慮する余地がある．しかし筆者は，拓本でも estampage でも，'xš'w'n と L' の間には文字を判読できなかった．このように（w)[']δy「玉座」の読みは不確定である上に，JH/SW が 'xš'w'nδ[']ry と読んだ所でも，'xš'w'n の後ろの文字 δ を特徴付けるベースラインから突き出た筆画は，石の表面の破損の可能性もあるから，この部分を 'xš'w'n(h)「領土，支配権」と読むことも不可能ではない.

15（4-3） JH wyspd(rwt), SW/YY2 **wyspδ(ryt)**.（**図**）

Radloff 拓本ではほぼ何も見えていないが，京大拓本や estampage ではかなり明瞭に読み取ることができる.

15（6） JH βγ(ws)t(ry), YY/SW/YY2 **yx(ws)t['y].**

京大拓本では Radloff 拓本よりもう少し良く読むことが出来るが，末尾にあったはずの aka 語尾の ['y] は全く見えない．JH が ry をどのようにして読み得たのか分からない.

15（7） JH](w)γy ~](w)γz, SW cn']wx(y), YY2 **](.)x(y)**.

SW の復元の cn']wxy は，次の行の冒頭に cn[m'ny] を読み取ることと関係している．cn'wxy cnm'ny は一種の熟語であり，「心の底から」を意味する．種々のヴァリアント形がある：cnxwy cm'ny（P5, line 75), cnxwcm'ny（Intox. 36)．しかしながら，筆者は次行の冒頭に cn を確認する事ができなかったので，この復元には従わない．また，もし 16 行目の初め付近の筆者の読み [　c'](n)kw mwn'kw *ptškw'nh pty-(sy)nt「この奏上の言葉に同意して／この願いを聞き入れて」が正しいなら，その直前に cn'wxy cnm'ny を復元することは統語構造上不可能である.

16 行

(1)[　c'](n)kw mwn'kw *ptškw'nh pty-(sy)nt ZY pr s't pw(yrw)xty xwy-štr 'yl 'wk'sy 'l-pw xwtl-wγ t(yk)'yn n'm δ'βr ZY xwt(y)[(2)M](N)"z-y mrts'r MN s't 'yδ'yty yxwst'y ZY

’ny’z-’nk[(4)] wm’t ZY ’(β)c[’n]pδ[yk　　](L’)xypδ[ある程度破損(6)](•)ZY cntr pr δynh cywyδ p’t(••••)[大きな破損（Frag.Rus.)](yw)rtms（’w)[(7)](k)[••](’)n（’ncm)nw c’nkw 次行に続く

(1) [...] この奏上の言葉に同意して，すべての buyruq「大臣」たちの中で尊長の il ögasi「宰相」たる Alp Qutluγ に，tegin「王子」の名称を与えた．そして彼自身は（2）誕生のとき [から] すべての人たちとは区別され別格（4）であった．そして世界の [...] ない ... 自分の [< ある程度破損 >（6)] そして内部では宗教においてその時から [< 大きな破損 >（Frag.Rus.)] そしてまた [（7)...] 教団（?)．< 次行に続く >

NB：この行の内容は，ほぼ漢文版の XIII 行に対応する：●●**天** /XIII/ **可***汗*宰衡之時，与諸相殊異．爲降誕之際，禎祥竒特．自幼及長，英雄**神**武．（［天 $_{13}$ 可］汗宰衡の時，諸相と殊に異なれり．降誕の際爲たるや，禎祥は竒特たり．幼き自より長ずるに及び，英雄・神武たり）．

16（1-1） JH cn•••, SW cn[m’ny, YY2 **[　]**.

SW の cn[m’n] に関しては前の行の注釈を参照せよ．拓本でも estampage でも，16 行の冒頭は破損して文字の痕跡は確認できなかった．

16（1-2） JH/SW]ykw, YY2 **[c’](n)kw**.

拓本でも estampage でも，最後から 3 番目の文字の読みは確定できないので，JH/SW の読みも，筆者の読みも可能である．ただ文脈から接続詞 c’nkw「～したとき，～したので」が予想される．

16（1-3） JH ptškw’t, YY/SW ptškw’nh, YY2 ***ptškw’nh**.（**図**）

拓本でも estampage でも ptškw’ty と読まざるを得ない．この形式は動詞 ptškw’y「申し上げる，懇願する，奏上する」の過去分詞で，「懇願された（こと)，奏上された（こと)」を意味する．しかし名詞形の ptškw’nh の方が期待されるので，敢えて読みを修正した．

16（1-4） OH/JH pw(rn)βγty, SW *pw(rny’n)t , YY2 **pwyrwxty**.（**図**）

ここにウイグル語の単語 pwyrwx「大臣」を読むことについては吉田（2011, p. 82)，

Yoshida（2011a, p. 16）を参照．ウイグル語の単語については Clauson（1972, p. 387）の buyruk の項目を見よ．pw- と -xty の間の文字は比較的良く残っているが，それでいていくつかの読みが可能であり，OH/JH の読みも不可能ではない．しかし x/γ は確実なので，SW の pw(rny'n)ty “meritorious actions” は不可能である．

16（1-5） JH '(š)t n'm, SW(t)[wγ ZY] n'm, YY2 **t(yk)'yn n'm**.（**図**）

拓本と estampage で見る限り，筆者の読みは支持されると思う．SW の(t)[wγ ZY] “salary and” は 20 行目にある，twγ ZY n'm という表現にもとづく推定である．奇妙なことに JH は 'št と読んでいて，筆者の読みとあまりにかけ離れているので驚く．JH は語末の -yn を -t と読み，筆者が -k'- と読んだ部分を -š- と読んだのであろう．これと類似する読み違いが 12 行目でも見受けられた．そこでは筆者が 'krt[と読む部分を JH は 'št[と読んでいたのであった．いずれにしても初頭の t- は比較的に良く見えているので，彼が何故この部分を無視するのか理解できない．言語学的に見てみると，(a) s't pw(yrw)xty xwy-štr「すべての大臣たちの中で首長である者」，(b)'yl 'wk'sy「イル・オゲシ，宰相」，(c)'l-pw xwtl-wγ「Alp Qutluγ」，(d)t(yk)'yn「王子，王の息子」の 4 つの名詞句の意味的な関係は曖昧である．ここでは，第 7 代可汗は王子として迎え入れられる以前から，Alp Qutluγ という名前を名乗っていたと考えた．一方 吉田 (2011) 及び Yoshida (2011a) では，「すべての大臣たちの中で首長である者に Alp Qutluγ Tegin という名前を与えた」と翻訳していた．

16 (2)-(4) JH(cn)t////(4)///(t/k), YY/SW 'ny'z-'nk[(4)](w), YY2 **'ny'z-'nk[(4)](#)**.（**図**）

文字 -k の尾は Frag. 4 の右端に見えているので，（w）の読みは不可能である．実際 JH はこの位置に -t あるいは -k の文字を想定している．SW の読みは YY の誤った読みに引きずられたのであろう．

16（4-1） JH/SW/YY2 **'(β)c['n]pδ[y]k**.

筆者は JH/SW の読みに従ったが，筆者自身はその読みを十分に確認することはできなかった．

16（4-2） JH/SW δ(β)yš('n)t, YY2(**L'**) **xypδ**.（**図**）

この読みは estampage ではほぼ確実である．しかし拓本では全く文字の痕跡は見えない．JH の δ(β)yš('n)t は，estampage で筆者が見たのと同じ痕跡を見ているものと思

われる．SW は ‘they harmed’ と翻訳している．

16（6-1）cntr pr δynh「内側では宗教に関して」.

この表現については Yoshida（2019, p. 115）を参照せよ．

16（6-2）cywyδ p’t を SW は “afterwards” と翻訳しており，筆者もその翻訳に従った．DMSB, p. 134a では ³p’t という項目を設けて，“time, occasion” の訳語を与えるが，クエスチョンマークも付している．cywyδ p’t は cywyδ pyδ’r p’t “because” のヴァリアント形と見なすことができるかもしれない．このフレーズの p’t は，接続詞 p’r(w)ty “for, because” の遅い時代の形式である．

16（6-3）JH/SW(šrγw), YY（••••）.（**図**）

SW はこの語を翻訳していないが，おそらく šrγw「ライオン」は文脈に合わないと考えたのかも知れない．現在ではこの語を mrxw と読んでいるようで，DMSB, p. 115b の mrx- “straight, flat, even” の項目に，単数対格形に由来する副詞として登録している．šrγw にせよ mrxw にせよ，筆者にはそのように読める文字の痕跡を見ることができなかった．

16（7-1）OH]k(..)n, JH/SW tn]kryδ’, YY2 **] (k) [••] (’) n**.（**図**）

筆者には JH がどのようにして]kryδ’ と読むことができたのか分からなかった．語末の尾の長い文字の前に -ryδ- と読むことができる筆画は見当たらない．筆者が（k）と読んだ文字は（p）かもしれない．ベースラインの下に湾曲した筆画が残っているだけであり，どちらでもあり得る．語末の尾の長い文字は -n でも -k でもあり得る．むしろ -k のようにも見える．可能な復元としては(k)[yr](’)n「方角，方向」あるいは(p)[yr](’)k「信じる（こと／者）」が，この文脈ではありえるだろうか．

16（7-2）JH(’)šmrw, SW(’z)mnw, YY2 **(’nc) mnw**.（**図**）

m のように見える文字に先行する部分は模糊として文字を読み取ることが出来ない．SW の読みも筆者の読みも -mnw で終わる短い単語を想定しているだけである．無論(š)mnw「悪魔」も可能だが，文脈からは期待されない．

17 行

(1) (••••)[ ](p)wkw ’xšy-wn’k z-mnyh ”xw’š wβ’ ZY wyδp’t δ(yn)m(y)ncw pts’k δ(βty)w

k'm "(x)w('š)t rty xwty y(')xy(')[(2)x]šy-wn'k wm't ky pr y'kwβ βr'y-(št)'k 'xšnyrkw xypδ[(4)]CWRH *(pyst)δ'rt(rty δnn γzny ZY γ)[r'm'kw?　](••)"γ(t••)[ある程度破損 (6)]ty nβ'nt w'št nβyr'k(z-)mn(w)(?)[大きな破損（Frag.Rus.)']xš'w(nδ)['(7)]ry w'δy nysty L' wm't pr 次行に続く

(1) [...] 牟羽帝王の時に "xw'š（不明語）があったように，その時に宗教のモニュメントをもう一度 "xw'š (不明語) しようと欲した．そして自らは勇猛な (2) 帝王であって，天使ヤコブの特徴で自分 (4) 自身を飾り立てていた (?)．そして富と財 [産] を以て [< ある程度破損 > (6)] のそばにいた．相談役の時 (?) [< 大きな破損 > (Frag. Rus./7)] 支配者の座に就いていなかった．< 次行に続く >

NB：次の 18 行目で記されるキルギス族の制圧は，懐信可汗が即位する前の事績なのであるから，「相談役であったとき」や「支配者の座に就いていなかった」という表現の主語は，即位前の懐信可汗その人である．

17（1-1） OH wn'kw, YY w'nkw, JH/SW/YY2(**p**)**wkw**.（**図**）

pwkw の読みは estampage ではほぼ確実である．pwkw に先行する 17 行目の冒頭部分は 8 文字ほど破損がある．その最後の文字には長い尾はないことが残存部から判明する．文脈からは [ZKwy βγy](p)wkw 'xšy-wn'k z-mnyh「神のごとき帝王 Bögü のとき」と補うことが出来そうである．JH は行の初めに ny を読み取り，SW はそれを ZY と転写しているが, 直前の語は 16 行目の最後にある接続詞 c'nkw「～した時に」であるから，その後に ZY は期待されないだろう．

17（1-2） JH '(')γw(nš), SW "x'ns, YY2 **"xw'š**.（**図**）

文字は良く残っているが，意味がよく分からない語である．DMSB, p. 6b では，後続の "γw'št と合わせて，"γw'š ... "γw'št という見出しを立て，次のように記している：Two related forms, noun and past inf. respectively, reading and meaning of both unclear．JH と筆者は同じ文字列を認めているが，SW の古い読みの "x'ns は実際にはテキストを修正していることになる．この部分に関連する歴史背景については「Ⅱ-3（b）懐信可汗によるマニ教復興」を参照せよ．

17（1-3） YY δ(βt-ykw), JH dysyw, SW δ(βtyk)w, YY2 **δ(βty)w**.（**図**）

文字 δ と w の間は模糊としていて文字を確認することは難しい．estampage を参考にして筆者は δβtyw と読んだ . この読みは JH の dysyw とも呼応する.

17（1)-(2） YY/SW/YY2(’) **[x]šy-wn’k.**（**図**）

これは基本的に OH の読み [’γ-](2)šy wn’k 同じであり，SW もそれに従っている．これに先行する Frag. 1 の左端を JH は k’/// と読んでいるが，それは全く不可能である．また YY/SW/YY2 の（’)[] の方も確実ではない．Frag. 2 の冒頭の文字列 šy-wn’k からは容易にこの語が推定復元される．’- が確実でないとすれば，そのヴァリアント形である *xšy-wn’k が書かれていたのかもしれない．初頭に ’ を伴わない綴りは珍しいが，ソグド文字で書かれたマニ教文献には確かに在証されている．DMSB, p. 40b を参照せよ.

17（2-1） pr ~ ’xšnyrkw は中世ペルシア語の pd nyš’n(‘y）~ やパルティア語の pd ~ nyš’n「～の様相で，～のように」と比較できるだろう.

17（4-1） JH(p)y(š)yδt, etc. SW nyšyδt, YY2(**pyst)δ(’r)t**.（**図**）

JH は最初と 3 番目の文字に対していくつかの可能性を挙げている．最初の文字に対しては p/k/z，3 番目に対しては š/s/r/k/z をあげている．SW の nyšyδt “he places” はそれらの可能性から選び出されている．拓本や estampage で筆者が見る限り，最初の文字は点のように見え, その後に短いスペースが続くので, z- と読むのが良いように見える．その一方で JH の読みの p- からも推定できるように，最初の文字は大きく破損した p- のようにも見える．いずれにせよ，筆者の pyst は残画から読み取ったというよりは復元に近い．それに続く δ と末尾の文字 -t の間には 2 つの小さい文字の痕跡が見えていると思うので，筆者は δ(’r)t と読んだ.

17（4-2） JH pt(y•)d •••t, SW pty•δ•••t, YY2(**rty δnn**).（**図**）

筆者が（pyst)δ(’r)t と読んだ語の後には，Radloff 拓本でも estampage でもほとんど文字の痕跡はない．京大拓本は少しましである．後続する（γzny ZY γ)[r’m’kw?] については，筆者は SW のテキストに従っただけで，大きな根拠はない.

17（4-3） Frag. 4 の筆者が ”γ(t••）と読む語の前に JH/SW は pc’y ‘profit’ を読み取っているが，estampage でも拓本でも確認できなかった.

17（6-1） OH c’δr, JH/SW(nm’c), YY2(**z-)mnw**.（**図**）

YY はここに単語を読み取ることができなかった．もし SW が考えるように -c で終わっているのなら，長い尾があるはずであるが，それは全く見えない．筆者が z- と読む文字はぼやけているが，残りの 3 文字はかなり明瞭である．可能性としては（.)m'r もあり得るが，その場合には（š)m'r, etc. のような読みが可能かもしれない．

17（7-1） ']xš'w(nδ)['']ry w'δy nysty L' wm't「支配者の座に就いていなかった」．この表現から，第 7 代懐信可汗はまだ即位していなかったことが知られる．漢文版からも分かるように，18 行目に記録されている懐信可汗によるキルギス族の制圧は，791 年頃にあった北庭争奪戦以前であったから，確実に彼の即位以前の出来事であった．

17 (7-2) YY/JH/SW/YY2 **pr.** 行末の pr を OH は読み取っていないが, 拓本ではとてもはっきり見えている．

18 行

(1)y'(k)[wβ βr]('yš)ty 'xšn(y)rkw wysprδ γr'n γny ZY mrt'nyh wyn'ncykw 'krtw δ'rt ZKn 40 RYPW ptšm'ry x(r)γyz-y x'γ-'n(pr)[(2)x]ypδ δsty' pr š(yr)p(')δ p'š'y rtšy 'xš'w'nh "st w'r'kw ZY(pw)[(4)](•)syrk kw(r)δ mr(t)[xm'yt](L'?)[　xy]pδ(••)[ある程度破損(6) ky](m')k(?)x'γ-'n(y) β'tryncw(••w••••••)[大きな破損(7)tw]γ ZY krt'k δβr'ntskwnw rtms γrβ 次行に続く

(1) 天使ヤコブのように至るところで大きな技倆と男らしさを示した．40 万の数のキルギス（族）の可汗を（2）自らの手で（放つ）すばらしい矢によって放り飛ばした．そして彼の領土を取った．（その国は）空虚で [（4)...] がなく，そこには人は [...] しない [< ある程度破損 > (6) [キマ] クの (?)] 可汗を降伏させた [< 大きな破損 > (7) 賠償] 金（?）と富の蓄積（?）を，彼らは（今も）与えている．また < 次行に続く >

18（1-1） JH/SW w'γ[ ], YY2 **y'(k) [wβ]**.（**図**）

筆者が estampage で見る限り，y'k- は不可能ではないが，JH/SW の w'γ- は不可能なように見える．17 行目の pr y'kwβ βr'yšt'k 'xšnyrkw を考慮すれば，後続する βr]('yš)ty 'xšn(y)rkw もこの読みを支持するであろう．

18（1-2） OH/JH 20, YY/SW/YY2 **40**.（**図**）

OH/JH の読みにも拘わらず，数字の「40」の読みは明瞭である．

18（1-3） JH p/ / /, SW p[r], YY2（**pr**）.（**図**）

Radloff 拓本では前置詞 pr の痕跡がぼんやり見えるが，京大拓本では模糊として読むことができない．estampage では p は良く見えている．

18（1）-（2）（pr）[（2）x]ypδ δsty’「彼の手で」．前置詞 pr と位格の組み合わせは文法的には破格であり，pr xypδ δstw と xypδ δsty’ の混交形ではないかと思われる . しかし，この種の前置詞と格形の不一致は他に見つからないわけではない．Cf. [p]（r）prymyδδ pnc δβrty’（BBB 668-669）, pr mzyx γzny’（E27, 51R4）[73].

18（2-1） OH pr wysprδ, YY pr（s..p.）δ, JH pr pw p（r）δ 或いは pr ks-p（r）δ, SW pr wysprδ, YY2 **pr šyr p’δ**.（**図**）

一見すると全体は pr š（.）p（’）δ のように見える．もしかしたら石工は，後続する p’š’y に引きずられて，pr と彫ったあとに š を彫ってしまったのではないだろうか．それが正しいとすると，本来は pr p’δ p’š’y「彼は矢で投げ飛ばした」とあったのかもしれない．筆者の šyr は，p’δ の直前の š で始まる短い語を文脈を考慮して推定しただけである．

18（2）-（4） JH/SW pt[（4）]’syδ’, YY2 **p（w）[（4）]（.）syrk**.（**図**）

w’r’kw ZY p（w）[ ]（.）syrk「空虚で～なし（の状態）」は漢文版の XIV 行目の「國業蕩盡，地無居人（國業は蕩盡して，地に居人無し）」に対応するのであろう．筆者が -yrk と読む部分には，例えば yβn のような種々の読みが可能である．しかし JH/SW の ’syδ’，とりわけ -δ- は不可能である . 筆者は意味のある語を復元できないが, 先行する w’r’kw「空の」との組み合わせで「財物がなくなり居住できなくなった」というほどの意味であったのだろう．

18（4-2） JH/SW kw（n）δ’,YY2 **kw（r）δ**.（**図**）

SW は欄外の注で kw（r）δ と読むべきではないかとしている．拓本をみれば kwrδ の読みは十分可能である．いずれにしても，この文脈で 2 人称複数の動詞は期待されない．

18（4-3） YY2 **mr（t）[xm’yt]**（**図**）. JH/SW は文字を読んでいないが，初頭の mr- は確実なように見える．mr- で始まる語は少なくないので，適切な語を復元することができな

[73] Sims-Williams は *γzny’* を独立した語幹と見なし,「宝庫」と訳している（Sims-Williams 2016, p. 90）.

い．この碑文では mrt'nyh がしばしば見られるが，いつも γny との組み合わせで使われる．もしも筆者の復元である mr(t)[xm'yt] が正しければ，漢文版の「地無居人」と比較できるかもしれない．

18（6-1） JH/SW]t(yn), YY2 **ky](m')k**.（**図**）

語末の長い尾以外は模糊としているので，いろいろな読みが可能である．筆者の復元は，強い根拠があってのものではない．可汗を表す語に先行する語は遊牧民族の名前であり，文脈からウイグルより西に居住していたことがうかがえる．またここで後に話題になるトゥルギシュとは考えられないし，語尾もそれを支持しない．この時期のイスラム史料では Toquzoghuz（すなわちウイグル）と並んで Kimäk が言及されるので，試みにこのように復元した．Kimäk については Minorsky（1948, p. 303）を参照せよ．

18（6-2） JH(β)γw štry/βγynstry, SW *(β)γ(y-š)t(')y, YY2(••w••••••).

拓本ではこの場所で文字を読み取ることは不可能なように見えるので，JH がどのようにしてこのように読むことが出来たのか筆者には分からない．円弧のような筆画をかろうじて確認できる．これは文字 p ないし w の一部と考えられよう．

18（7-1） OH/YY/JH/SW/YY2 **krt'k**.（**図**）

この語は，外形だけなら動詞 kn-「掘り起こす」の過去分詞形の knt'k 読むことも出来るが，この文脈では意味をなさない．DMSB, p. 99a は，ここの krt'k を unclear word だとしている．この同じ krt'k という語形は，ブグト碑文に 2 回現れるが，2 回とも šyr'k γr'm'k krt'k というフレーズの中で使われている．γr'm'k「富, 財産」を参考にして，吉田（2019, p. 12）は「すばらしい財産の蓄積（？）」と訳し，ここでもそれに従った．先行する語は -γ で終わっているから，[tw]γ「（賠償金の）支払い」と復元できるかもしれない．

18（7-2） JH δynyntskwn, δββyntskwnw, δβryntskwnw, YY2 **δβr'ntskwnw**.（**図**）

SW のテキストには δβr'ntskwnw とあり，それを “they were scattered” と訳している．JH の提案する読み δynyntskwn, δβyntskwnw, δβryntskwnw を参考にすれば，この段階で SW は，*δβy'ntskwnw 或いは *δyβ'ntskwn と読むことを考えていたようだ．現在 DMSB, p. 72a では, δβr'ntskwnw と読み δβr- ‘to give’ の 3.pl.pres.dur. であるとしている．

つまり「彼らは（現在なお）与えている」と理解している[74].

19 行

(1)prwrt['k M]N k(ws)'n γr'n twp'ytc'ny 'sp'δ mnxw'y ZY ctβ'r twγr'y(s)tny ZY γrβ '(n)y-'ty 'wt'kt wyš'nty ('y)δ(')yt (x)[ypδ(2)'x]š'w('n)h (xw)ty pty-(c)xš (rt)ms 'δry xrl-wγt n'βt MN γnt'k [s'(4)]n twp(yt)y p[yδ'r?]y t[ある程度破損(6)γ](rβ)prwrt'kw γ(n'y)[ZY mrt'nyh? 大きな破損(7)](t)δ'rt 'rt'wty ZY nγ'wš'kty γr'n wrcy-'w(')kw 次行に続く

(1) 何度もクチャからチベットの大軍を撃破し，4 トグリの地と多くの奪取されていた国々（と）その人々の（2）領土を自ら手にした．そしてまた三（姓）のカルルクの人々は邪悪な (4) [敵] であるチベットのせいで [< ある程度破損 > (6)] 何度も技倆 [と男らしさ（?）< 大きな破損 > (7)] 彼は [...] をした．（そして）マニ教の僧侶と聴者（= 一般信者）たちに大きな安寧を < 次行に続く >

NB：この 19 行目では，漢文版の XVI 行目に当たる，クチャと焉耆地区に於ける対チベット戦でのウイグルの勝利が記録されている．漢文版の XIV—XV では相当のスペースを割いて，790/791 に行われた北庭をめぐるウイグルとチベットとの戦闘について記録している．この北庭争奪戦に対応する記事がソグド語版に見えないのは非常に奇妙である．とはいえこの重要な事件が，ソグド語版の 18 行に見える，キルギスとの戦いを記した後の破損部にごく短くまとめてあったとも考えにくい．漢文版とソグド語（及びウイグル語版）では，基本的に同じ内容を同じ順番で記述していたと思われるが，記録される事件の重点に違いがあったということなのだろう．

19（1-1）JH](k)krn, SW](k)*ZKn, YY2 **M]N k(ws)'n**.（図）

JH の krn 及びそれに基づく SW の ZKn は，筆者の k(ws)'n「Küsüan，クチャ」に対応する．ちなみに Küsän は「クチャ」を意味するウイグル語の形式である．語頭の k- と語末の -n の間のスペースは，語中の -r- 一字分より大きい．ここでは [M]N k(yr)'n「側

[74] 筆者は，ここでは，ウイグルによって制圧された民族が，碑文の作成時においてなお賠償金を支払っている，という事実を伝えたものではないかと考える．

面から」と読むことも出来るかもしれない．いずれにしても，この部分を r や s と読もうとすれば，字形にいくらか難があることは事実である．DMSB, p. 104a は筆者の kws'n の読みに対して 'doubtful' であるとしている所以である．しかしこの文脈で「クチャ」を意味する語は確かに期待され，文字の残画も矛盾しない．筆者の kws'n の読みと解釈が正しいとすると，この部分は漢文版の XVI 行目に対応する．そのテキストは次の通りである:「復, 吐蕃大軍, 攻圍龜茲．○○天可汗領兵救援．吐蕃〓〓奔入于術．四面合圍，一時撲滅．屍骸臭穢，非人〓〓．〓〓〓山，以爲京觀．敗没餘燼（復た吐蕃の大軍は龜茲を攻圍す．天可汗は兵を領して救援するに，吐蕃は［...］して于術に奔入す．四面より合圍して，一時に撲滅したれば，屍骸は臭穢にして，人の［...］するに非ず．［...］山，以て京觀を爲つくる．敗没せる餘燼)」．ソグド語版の 19 行目，漢文版の XVI 行目に記録されている事件を，Yoshida（2009a）は，同時代のコータン語の世俗文献を参考にして，西暦 798 年のこととした．

19（1-2） JH twγr(y)k'tny, SW twγr(y)k(c')ny, YY2 **twγr'y(s)tny**.（**図**）

SW の twγr(y)k(c')ny は，JH の読みよりは OH や YY の読みを参考にしているようである．estampage では twγr'yktny のように読めるように見えた．しかし k のように見えた文字はいくらかいびつな字形の s であろうと思う．いずれにしても，estampage でも拓本でも，-t- は非常に明瞭で -c- と読むことはできない．この読みと Tughristan を漢文版の于術に比定する点については Yoshida（2018a）を参照せよ．

19（1-3） YY/SW 'ny 'ny, JH 'ny 'ty, YY2 **'ny-'ty**.（**図**）

JH と YY2 の読みは基本的に同じであり，estampage 及び拓本でも確認できる．筆者は 'ny-'ty を ny's「取る，奪取する」の過去分詞と考えた．

19（1）-（2） JH γ///, SW x[ypδ], YY2(**x**) **[ypδ]**.

筆者の読みは SW の読みに従っている．筆者自身は Frag. 1 の左端に文字 x の痕跡を確認することができなかった．もしかしたら，次の語の 'xš'w'nh が Frag. 1 の末端から始まっていたのかもしれない．つまり，(')[(2)x]š'w'nh と考えるのである．

19（2-1） JH(')spty, YY/SW/YY2(**xw**) **ty**.（**図**）

ty に先行する部分は読みづらいが，JH の -p- はあり得ない．

19（2-2） JH pty-(cy)γ(š), YY/SW/YY2 **pty-(c)xš**.

ptcxš- は普通「受け取る，受け入れる」と翻訳される．しかしキリスト教ソグド語文献 E27/60R23 では ptycxš は「取る，つかみ取る」を意味している：ptycxš cn xypθ qwcy wyny x'št「（狼は）彼の衣服を自分の口でつかんだ」（Sims-Williams 1985, p. 127）．ここでは，西域北道のオアシス国家の支配権を手に入れたことを言っているのであろう．

19（2）-（4） JH t////（4）///d（•t）, SW t[.....（4）]δ（•t）, YY2 **[s（4）']n**.（**図**）

筆者は Frag. 2 の左端に文字 t を読み取ることは出来なかった．また Frag. 4 の右端には文字 ' あるいは n の長い尾が見えるだけである．JH が d と読んだ文字，すなわち δ は石の表面にあった破損であろう．Frag. 2 と Frag. 4 の間の破損はわずかなので，Frag. 2 の最後の語 γnt'k「悪い，邪悪な」の後に続く語として，この位置に 1 語 [s']n「敵」を復元することにした．もしかしたら，n の前にある ' の一部も見えている，つまり [s]（'）n と読むことが出来るかもしれない．

19（6） JH γ（'nt）/γ（w'y）, SW/YY2 **γ（n'）y**.（**図**）

JH が提案する複数の読みからも知られる通り，語頭の x/γ 以降は模糊としており，読みは定まらない．従って x（w）y[štr]「先輩，尊長」のような語を復元することも不可能ではない．

19（7-1） JH ///γd'rt, SW]γδ'rt, YY2 **]（t）δ'rt**.（**図**）

δ'rt. の前の残画はすこぶる曖昧で，ベースラインの上や下に突き出る筆画のない文字ならばどの文字でもかまわない．筆者の読みも JH/SW の読みも，この残画と矛盾しないので，その限りではどちらも可能である．

19（7-2） OH/YY/JH/SW/YY2 **nγ'wš'kty**. ルーン文字の断片（森安／オチル 1999, p. 220 の Fragment 7c）の 5 行目には nuγošak と読むことができる．このルーン文字銘文は，ソグド語の Frag. 6 及び Frag. 9 と同じ石に刻まれているので，銘文全体における位置は Frag. 6 の位置から推定できる．（**図版 1**）その点を考慮すると銘文全体では，ほぼ中間の位置に当たるのではないかと考えられる．ソグド文字面の 19 行目に位置する nγ'wš'kty を，そのルーン文字形と同じ文脈にあると推定することができるかもしれない．無論ルーン文字の形式はソグド語版の 21 行目の nγ'wš'kt や，漢文版 XXII 行目の聴士に対応している可能性も排除できない．

20 行

(1) (')krtw δ'rt (r)[t]y CWRH ptw(y)sty xrl-wγty 'nβr(z)-kr 'l-pw yncw pyl-k' ypγw nyšyδ twγ ZY n'm δ'βr ZY m('yδ) (')'st(ny)k tw[rk(2)y]š x(w)β x'γ-'n ky pr δs' p'δ 'δry twrkyš 'xš'w'nδ'r wm't ZY(•)[(4)](••δt)MN [ある程度破損(6)](')mn x'γ-'n(•••)[大きな破損 (7)p](r)wyš'nt 'nβrz-kr w'sty rtms pr mγ-wn t'z-yk'n'y 次行に続く

[19] マニ教の僧侶と聴者（＝一般信者）たちに大きな安寧を[20]（1）もたらした．そして自分自身を差し出したカルルクの大臣の Alp Inčü Bilgä を葉護に任命し，纛（＝旌節）と称号を与えた．そしてこの本来の（2）トゥルギシュの領主である可汗で 10 の矢の 3 つのトゥルギシュ（＝十箭三姓突騎施）の支配者であった者 [...（4）] から [< ある程度破損 >（6）] 可汗 [< 大きな破損 >（7）] 彼らの大臣に据えた．そしてまた全大食の < 次行に続く >

20（1-1） OH, YY, JH/SW 文字を読み取らない；YY2(**r**) **[t]y**.（**図**）

吉田（2011, p. 18）及び Yoshda（2011a, p. 82）は（x)[wt](y）と復元しているが，その復元も可能である．estampage ではほとんど何も見えない．筆者の読みは(x)[wt](y）であれ（r)[t](y）であれ単なる推定に近いが，非常に短い語でなければならない．

20（1-2） SW ptw'sty, JH/YY2 **ptwysty**「捧げられた，差し出された」.（**図**）

SW は ptw'sty と読んで "returned" と翻訳しているが，それも読みとしては可能である．Radloff 拓本では語末は -t'y のように見えるが，estampage や京大拓本では明らかに -ty と読める．

20（1-3） OH/YY/JH s'rβγty, SW(xrl-w)γty, YY2 **xrl-wγty**.（**図**）

SW は文脈だけを参考にして，従来確実視されていた s'rβγty「塔（複数・斜格）」の読みを改め，ここに xrlwγ「カルルク」の複数形を読み取ることができた．筆者は，拓本でも estampage でも問題のないこの読みに従う．なお「カルルク」を意味するソグド語形には xr'lwγ も存在する（吉田 2007）.

20（1-4） JH '(nw'z)kr, YY/SW 'nβrz-kry, YY2 **'nβrz-kr**.（**図**）

YY が k と読んでいた文字は，やや大きめに彫られた z であった．その直後に表面の破損があり，その組み合わせが全体として k のように見えている．同じ語はやはり 20 行

目の終わり付近，Frag. 7 の部分に見られる．従来 'nβ'rzkr'k（aka-stem）「大臣，重要な地位にある家臣」は知られていたが，この 'nβrzkr はそれと同意語であると考えられる . aka 語尾を持たない語幹の複数形 'nβrzkrty も在証される（Sundermann 2012, p. 161）．aka 語尾のない語幹に関しては Chr. 'brzqry'（或いは 'brzbry'?）"agency, business" も参照せよ（Sims-Williams 2016, p. 22）．漢文版では 対応する語は「主」である．その漢文版の XXI 行目は次のようになっている：與歸順葛禄，册真珠智惠葉護，爲主（復た歸順せる葛禄の與ために，真珠智惠葉護に册して主と爲す）.

20 (1-5) JH/SW/YY2 **twγ ZY n'm**「纛（＝旌節）と称号」．この表現については吉田（2011, p. 18）及び Yoshda（2011a, p. 82）を参照せよ.

20（1-6） JH mnδ, SW m(')δ, YY2 **m('y)δ**.（**図**）

JH が n と読んだ文字は模糊としていて，全体は m(y)δ 或いは m('y)δ とも読める．estampage ではむしろ mδy「ここ」のように見える．もしこちらの読みが正しいとすれば，翻訳は，「ここ（チュー河流域）では本来のトゥルギシュの領主である可汗」のようになる.

20（1-7） YY 'st'rk, JH(')'st(n')k, SW(')'st('r)k, YY2(**'**)**'st(ny)k**.（**図**）

JH 自身は種々の読みを提案している．その中では "stnyk「本来の（トゥルギシュの領主）」が文脈にぴったりの意味を提供する．従来 "stnyk 及び "stn'y は「永続する，常なる」と翻訳されてきたが，この語は漢文仏典から翻訳されたソグド語仏典では，原典の「本」に対応しており「本来の」を意味することが指摘されている，Sims-Williams 1983, p. 42.

20（2）-（4） JH/SW p[...(4)]w(δ)t, YY**(•) [(4)] (••δt)**.

Frag. 2 の左端に文字の痕跡は見えるが，筆者には判読できなかった．Frag. 4 の δ の前の文字を JH は w と読んでいるが，これは Radloff 拓本に，大幅に手を加えた修正版の拓本にのみ見えるものであり，とうてい信頼できない.

20（6） JH p(cw)m', SW p(c')m', YY2 **[(')mn**.（**図**）

SW は脚注で pr'm' と読む可能性を示唆している．筆者が見る限りでは，JH が -c- と読んだ部分は文字のようには見えない．つまり 'm'（或いは 'mn）の前には空白があるのであり，この部分は独立した語のように見える．'mn と読めば，ベゼクリク出土のマ

ニ教ソグド語の手紙にある，1人称複数の付属人称代名詞 'mnw「我々の／に」と比較できるかもしれない（Yoshida 2019, p. 98）．いずれにせよ，この部分は文脈を欠いており，あまり文字の読みに拘泥する意味が無い．

20（7） JH ///wyš'(n)t, SW]wyš'nt, YY2 **[p](r) wyš'nt.**（図）

wyš'nt に先行する語の末尾が Radloff 拓本にはわずかに見えており，r のように見える．

21 行

(1)['x]š'w'nyh(pyz)t ZY p(r)šk'r wm't ZY prnpδy 'xšy-wn'k c'nkw c'δr xr'mtδ'rt kw xwr's'n xm'yr ZY kw('n)[y(2)γr](β ')wt'kcykt xm'yr ZY 'xš'w'nδ'r s'r prm'nh(pr')šy wyš'nt[ある程度破損(6)](n)γ'wš'kt [大きな破損(7)] mwmyn xm'yr prm MN prnxwnt'kw 'xšy-wn'k 次行に続く

(1) 領土に，弾圧と迫害があった．それで栄光ある帝王は下方へ（＝西方へ）赴かれたときに，ホラーサーンのアミールと [他] の（2）[多] くの国々のアミール及び支配者たちに命令を発した．彼ら [< ある程度破損 >（6)] 聴者たち（＝マニ教の一般信者たち）[< 大きな破損 >（7)] カリフまでもが栄光ある帝王に対する，< 次行に続く >

21（1-1） JH py(.)t, pw(.)t, p'(.)t, SW py(.)t, YY2(**pyz)t**.（図）

estampage では語末の t は明瞭であり，語頭には p のように見える筆画が見えている．後続する語を p(r)šk'r「迫害」と読むことが出来るなら，類似の意味を持つ語を想定することができるだろう．筆者は当初（py)[š]t と復元し, 動詞 pyz/pyšt-「打つ, たたく」に基づく行為名詞ではないかと考えた．ただ pyšt- は軽語幹なので，古代イラン語の接尾辞 *ti に基づく行為名詞も軽語幹が期待され *pyšty になるはずである．それゆえここでは（py)[z]t と復元し，行為名詞 pyz "(act of) striking"（cf. DMSB, p. 165b pyz）の複数形，あるいは動詞 pyzt "to chase, frighten（?)"（cf. DMSB, ibid.）に基づく行為名詞・動名詞と見なすべきかもしれない．本稿の語彙表では pyz の複数形として登録している．

21（1-2） JH p'šk'r, prškr, SW p'šk'r "honoured(?)," YY2 **p(r)šk'r**.（図）

SW の翻訳の "honoured" は，この語を p'š "respect, honour; guard, watch, fastening" と

k'r "action" からなる複合語と理解したことを示している．筆者は pršk'r と読んで，語根 škr「追跡する」[75] と接頭辞 pr から形成される動詞 *pršk'r「迫害する」(< *pari-hiškara-）の名詞形と考えた．キリスト教ソグド語の pšq'r「迫害」は，綴りは違うが同じ語である可能性がある．キリスト教ソグド語では，動詞接頭辞 pr の r が脱落する例が知られている，cf. Chr. pšt'y「準備する」< pršt'y. pršk'r という語は，L52 の 6 行目にも在証されている："c p(r)šk'r ZY pẓ'rn nyst「いかなる迫害も危害もない」[76]．マニ教の迫害が問題になっているとすると，アッバース朝治下のマニ教弾圧に言及しているのであろう．カリフ　al-Mahdī（r. 775 - 785）の時だけでなく，Hārūn ar-Rashīd（r. 786 - 809）時代にも異教の弾圧があった．Hārūn ar-Rashīd の異教に対する政策については *Encyclopaedia Iranica*（on line edition）の Hārūn ar-Rashīd の項目を参照せよ：http://www.iranicanline.org/articles/harun-al-rasid.（2019 年 9 月 6 日最終閲覧）具体的な記述については Gulácsi（2016: 110-111）も参照せよ．

21（1-3） JH/SW kw pt[(2)]t , YY2 **kw ('n)[y(2)γr](β)**.（**図**）

拓本で見る限り，模糊とした残画から JH のように pt[と読み取ることは不可能なように見える．estampage では文字の存在は確認できなかった．筆者の（'n)[y は，単なる推測である．また JH は Frag. 2 の冒頭部分を]t と読んでいるが，その部分には先行する失われた文字の長い尾が見えるだけであるから，尾の長い文字であれば -t だけでなく，-', -β, -n でも良い．筆者は [γr](β）と読んで見た．

21（2-1） JH rtšy ~ ptšy ~ ktšy, YY/SW(βr')šy, YY2(**pr')šy**.（**図**）

拓本で最初の文字を注意深く見てみると，β- よりは p- の方が残画とよく合う．pr'šy は βr'šy の異なる表記法に過ぎない．

21（2-2） YY wym'nt, JH/SW/YY2 **wyš'nt**.（**図**）

どちらの読みも可能だが，wyš'nt「彼ら」のほうが wym'nt「境界地域」より文脈に良く合う．

21（7） JH ymwmd'(JH は他にも多くの読みをあげる), SW(')mwmyn, YY/YY2 **mwmyn**.

---

[75] 古代イラン語の語根は *skar である（Cheung 2007, pp. 345–346）.

[76] この文書を最初に発表した Ragoza（1980, p. 40）は，対応する部分を 'yc p'šk'r ZY pk'rn [...]yšt と読み翻訳していない．

（図）

JH は y と読むが，m の前には文字の跡は見えず，この語は m- で始まっている．mwmyn xm'yr はアラビア語のカリフを意味する表現 'amīr al-mu'minīn「信者たちの指導者」がソグド語に借用された形式である．漢文版の XXII 行目にある「悶□闇名（中古漢語 *muən <?> ·ậm mịäng）」も同じ表現であろう．この点に関しては森安／吉田の共同論文を参照せよ．吉田（印刷中）でも述べたように，懐信可汗（r. 795-808）の時代のカリフは Hārūn ar-Rashīd（r. 786 - 809）である．

22 行

(1)[p'](š) ZY pckwyry [w](')β prw'rt'k 'rp'st'k("z-'ty)t ZY(γr)'n nm'ck'n βšmtw δ'r'nt c'nkw p(rnxw)[nt'k(2)]'xšy-wn'k prw c'δr 'wt'kt wyptm'kw γr'n δynmyncw(p)[ts'k(?)ある程度破損(6)](•)s'r(•••)[大きな破損(7)]tδ'rt ZY ZKwy mγ-wnw 'xš'w'nyh pr βγ(y)次行に続く

(1)［尊敬］と畏敬から何度も有力な貴人と莫大な貢ぎ物を送ってきた．栄光ある（2）帝王は，下方（＝西方）の国々に計り知れないほど偉大な宗教の［モニュメントを（？）< ある程度破損 >（6）］へ［< 大きな破損 >（7）彼は ...］をした．そして全領土において，神である < 次行に続く >

22（1-1） JH ...(t)/ny(or ..γšny, etc.), SW(••t)ZY, YY2 **[p'](š)**.（図）

ZY pckwyry に先行する部分には極短い語が入る．文脈からは pckwyr「恐れ，畏怖，信仰」の類義語が期待される．拓本では全く文字を確認できないが，estampage では -š あるいは -s の残画が見える．従って [p'](š)「尊敬，敬意」あるいは [tr](s)「畏怖，敬意」を復元できるが，後者はソグド語では在証されていない．

22（1-2） YY [γ](r)β, JH/SW γrβ, YY2 **[w]'β**.（図）

JH が γ と読む文字は完全に破損している．また彼が r と読む文字はむしろ ' あるいは n のように見える．そのようなわけで筆者は [w]'β「それ程」あるいは [c]'β「どれ程（か）」と読むべきだと考えた．

22（1-3） JH "zytyt(y'd), SW '('z'ty)t(y *δn), YY2 **("z'ty)t ZY**.（図）

ここで問題にしている文字列の最後に ZY を読み取ること，それに先行する語の末尾が -t であることはほぼ確実である．筆者は JH がどの部分を δ と読んだのか分からなかった．この -t に先行する部分は模糊として文字を判読することは難しい．ただベースラインより上や下に突き出るような筆画は認められない．筆者は SW の提案する ”z’tyt「貴人（複数）」の読みを採用した．キリスト教ソグド語文献には ’rpsty ’w’zy「有力な集団」（STii 2, line 8 = E24c2.8, cf. Sims-Williams 2016, pp. 30, 35）という表現があるので，それを参考にすれば ’rp’st’k（’nw’z-）yt「有力な集団（複数）」と読む事も可能かもしれない．ここに言う「有力な貴人／集団」は，カラバルガスンにあった第 7 代ウイグル可汗の宮廷に，カリフが派遣した使節団であったと考えられよう．そしてその使節団は，Minorsky（1948）が研究したことで有名な Tamīm b. Baḥr が率いたものであった可能性がある．Minorsky はこの使節団は 821 年に派遣されたと考えていたが，それは彼が，漢文版の天可汗を保義可汗（r. 808–821）であると考えていたからであった．天可汗は懐信可汗（r. 795–808）のことであるから，使節団を派遣したカリフは Hārūn ar-Rashīd であったことになる．アッバース朝とウイグルとの関係については別稿を用意している（吉田 印刷中）．

22（1-4） OH/JH pylk’, YY/SW/YY2 **p（rnxw）[nt’k]**.（**図**）

JH は OH に従って pylk’ と読むが，彼は筆者が -rn- と読む部分を -yl- と読んでいることになる．拓本では文字 l の補助記号のように見えるのは，石の表面の破損のようである．文字 l と後続する文字の間はスペースを空けるはずなのに，ここではそれが確認できない．Frag. 2 の冒頭に ’xšy-wn’k「帝王」とあるので，prnxwnt’k はまさに文脈上期待される形容詞である．残念なことに estampage では，ここに対応する部分において文字の痕跡を確認できなかった．

22（2） JH ny/ / / or np/ / /, SW/YY2（**p**）**[ts’k]**.（**図**）

JH が n- と読んだ部分は石の表面の破損であるようだ．δynmyncw（p）[ts’k] という復元が正しいとすれば，これはマニ教に関する宗教施設ないしは教団を指す表現である．ここでは「モニュメント」という曖昧な訳語を選んだ．解釈がさらに難しいのは，その宗教施設ないし教団が関与している c’δr ’wt’kt「下方の国々／地方（複数）」の具体的な意味である．c’δr は ’sky の対義語として「下方」にだけでなく「西方」も意味する．

この文脈では上ソグドたるセミレチエの西方にあるソグディアナの諸国を指しているのかもしれない．10 世紀のサマルカンドにマニ教の信者集団がいたことはよく知られている（Yoshida 2019, pp. 34-43）．いずれにしても，懐信可汗の最晩年の 807 年に，中国にマニ教寺院が建設されたことはよく知られているが（Chavannes and Pelliot 1913, pp. 275-276, Text XX），この「下方の国々」は中国ではあり得ない．この碑文では中国は βγpwrstn と呼ばれているからである．

22（6） JH/SW [p]ts'r, YY **](•) s'r**.（**図**）

筆者は文字 t を判読できなかった．その位置には文字 -h の末尾のように見える部分があるが，極めて不確実である．

22（7） JH pr βγ(y)(•), SW/YY2 **pr βγ(y)**.（**図**）

Radloff 拓本でも阪大拓本でも βγy の部分は極めて模糊としていて，文字の読みは確実とは言えない．22 行はこの語で終わっているようだ．

23 行

(1)[m'rm'ny δynh wγ](š)y ZY xws'nty-'kh 'krty p'rZY(pry)-myδ 'xš'w'nyh cw δynmyncw pts'k(•••••)[ある程度破損(2)'βc'np]δy xr'mty L' wm't pts'r c'nkw βγy 'xšy-wn'k [ある程度破損(6)](δ')rt [大きな破損(7)]'(w•)[　　]

(1)［マール・マーニーの宗教］において［喜］びと満足が生じた．なぜならこの領土において宗教のどんなモニュメントが［< ある程度破損 >（2）この世界］を（出て）行ってはおられなかった（＝お隠れになっていなかった）．それから神（のごとき）帝王は［... した］とき［< ある程度破損 >（6）］した．［< 大きな破損 >（7）］[. . .]

23（1-1） YY(wyγw)š, JH ••'γšy, SW](w)γšy, YY2 **wγ](š)y**.（**図**）

-šy は -š とも読める . 拓本でも estampage でも，筆者はこの文字の前には文字らしきものを確認できなかったので，JH がどのようにしてこの読みを得たのか分からない．YY の（wyγw)š「彼は喜んだ」は，文字の痕跡から読み取ったものではなく，文脈から復元したに過ぎない．ここでは SW の推定する読みに従った．

23（1-2） YY('y)w, OH/SW 'yw, JH/YY2 **cw**.（**図**）

拓本も estampage も語頭に c- を読むべきであることを示しているように見える.

23（2）**[’βc’np]δy xr’mty L’ wm’t**. この過去完了形は「[この世界] を（出て）行ってはおられなかった」を意味する.「世界から出て行く」は，可汗が死ぬことを意味する婉曲表現であるから，ここでは，懐信可汗がまだ死んでいなかったこと，そしてこの後程なくして死んだことを含意している．天可汗＝懐信可汗はソグド語では prnxwntk/prnpδy ’xšywn’k と表現されるから，直後の βγy ’xšywn’k「神のごとき帝王」は，懐信可汗ではなく保義可汗を指しているのだと考えられる.

24 行

大きな破損（2）] c’δr ctβ’r kyr’n p(••••••••••••••••) [

[< 大きな破損 >]（2）下方（＝西方）の四方に [< 大きな破損 >]

24（2）JH pt(γw)••d••(wynp’), SW pt(γw)[š]δ[’rt](wyzp’)ZY [pckwyr, YY/YY2 **p(••••••••••••••)[**.

筆者が見ることができる Radloff 拓本 , 京大拓本，阪大拓本では何も文字は確認できないので，ここでは JH や SW の読みに従わないことにした.

Fragment 9

推定 32* 行]••••[

推定 33* 行](w βγ)y(ZY)δ(w••)[

推定 34* 行]•••(pr)’yw γr’n(w’)[

推定 35* 行]’sp(t)’kw prβ’yrt[δ’rt?

推定 36* 行 γz-](n)y(Z)Y γr’m’kw γrβ 1-(LPw)[’](’p)ryw[n?

推定 37* 行](•)w’nkw pr RBkw γrβ’ky’kh cntr δynh ZY[

推定 38* 行](•••••t)ypγw mγ-wnw t’z-’yk’n’k ’xš’w’nh[

推定 39* 行](•)ZY šyrn’m ky ctβ’r kyr’n wyδβ’xs w’nkw ZY(w•)[

推定 40* 行](w)βyw ZY ms MN ctβ’r kyr’nw ’xš’w’nty-(h)[

推定 41* 行]”l-pw pyl-k’ x’γ’n [

推定 42* 行　　](k)y mδy 'skw'nt[

推定 43* 行　　](•)m(•)[ ](••)[

推定 *32 行　　...

推定 *33 行　... 神と ...

推定 *34 行　... といっしょに偉大な ...

推定 *35 行　... 完全に説明した ...

推定 *36 行　...[宝] 物と財産を多く，1000（?)... 祝福（?)...

推定 *37 行　... かくして偉大な智慧によって内側では宗教に関して ...

推定 *38 行　... 葉護は全大食の領土 ...

推定 *39 行　... 四方に広まった名声（の内容）は次のようで ...

推定 *40 行　... そしてまた四方の領土から ...

推定 *41 行　... ⑧ Alp Bilgä 可汗（＝第 8 代保義可汗)...

推定 *42 行　... 彼らはここにいる ...

推定 *43 行　...

***33-1** OH/YY/SW βγy ZY, YY2(**βγ**)**y**（**ZY**)．(**図**)

β は判読が難しく，βγy ZY と読んだ部分は xwty のようにも見える．

***33-2** JH d(yw')t, SW δ(ynh), YY2 **δ(w••)**．(**図**)

Frag. 8 の 2 行目にある βγy ZY δynh の δynh は，この部分とかなり異なるように思うので，δynh の読みは採用しなかった．

***34** SW]•(r)m['](p)r'yw "with the people(?)", YY2 **]••• (pr) 'yw**.（**図**)

筆者は pr'yw に先行する部分に判読できる文字を確認できなかった．DMSB, p. 228a の yp'k "anger" の項目によると，この行にこの語が見つかるとしている．筆者が（w')[と読んでいる部分を，(yp)['k] と読もうとしているのかもしれない．残された筆画は曖昧なので，この復元も不可能ではない．

***35** OH prβrtyt, YY prβyr(')t [, JH prβry'(.)t, SW prβ'yr(')t[, YY2 **prβ'yrt[δ'rt.**（**図**)

SW の prβ'yr(')t は不可能ではないが，prβ'yrt のほうが良いと思う．語末の -t には長い尾があるので，過去形の助動詞 δ'rt との間にはスペースがあったと考えた．

***36-1** OH γrβ δp[, YYγrβ δp[yry'kh?, JH γrβ(z)ds•••, SWγrβ δp[yry'kh , YY2 **γrβ 1-(LPw)[.**（図）

JH の読み γrβ(z)ds••• からも分かるように，γrβ と δp- の間には文字 z- のようなくぼみがある．筆者はこれを数字の「1」とみなして 1-（LPw）「千」と読んだ．しかし「千」を表す数詞では，「1」を表すストロークは次の文字と続け書きするので，この読みには不安が残る．DMSB, p. 235a によれば，この部分を z-ynt "weapons" と読んでいる．

***36-2** JH •••(kyyw)•••, SW •••w•••, YY2](')ryw[.（図）

破損部に続く部分は](')ryw[と読むことができる．これは後置詞 pr'yw のヴァリアント形（DMSB, p. 16）かもしれないが，ここでは "prywn「祝福」を意味する形式を復元した．

***37 cntr δynh**「内側では宗教に関して」この表現については 16 行目の注釈を参照せよ．

***38** ここの ypγw「葉護」は漢文版の XX 行目で言及される葉護と同じ人物だと考えられる．そこでは彼は「葉護爲不受教令（葉護教令を受けざる爲に，其の土壌を離る）」と記されている．懐信可汗に敵対し続けたこのカルルクの曲者の葉護については，吉田（印刷中）を参照せよ．

***39** SW pr, OH/YY/JH/YY2 **ky**.（図）

ky の読みはほぼ確実である．たしかに pr の方が文脈にはよく合うので，もし本来 pr とあるべきであったのなら，これは誤刻であろう．ただ関係代名詞の ky でも意味は通じる．

***40** JH/SW 'xš'w'nty δ[; YY2 **'xš'w'nty-(h) []**.（図）

筆者にはどのようにして JH がここに文字 δ を読み取ったのか理解できなかった．

***41 "l-pw**. KB 碑文では．ウイグル語の形容詞および人名要素の alp「勇敢な」を表記する綴りは 3 種類ある：'l-pw, 'l-p, "l-pw[77]．この表記上の揺れは，ウイグル語の正書法が，当時はまだ確立していなかったことを示すのかもしれない．

[77] 1 行目と 3 行目にある 'lp'yn'ncw を加えれば 4 種類になる．

Fragment 8（位置不明）

1　　判読不可能

2　　c'n](k)w βγy ZY δynh(••••••)[

3　　](t)γrβ krtr wxš[n'yt?

4　　](γ)r'n xws'nty'kh 'krty [cyw]yδ sγ[tm'n(?)

5　　] s'r sytδ'rt ZY pr 'βt'δ'ny' [

6　　](••)δβnz pty('r•••)[

7　　](••••••)[

8　　](••••)[

1　　判読不可能

2　　... 神と宗教が ...[したと] き ...

3　　... 多くのグループの [救済者たち（?)]...

4　　... 大きな満足が生じた．その全 [員か] ら ...

5　　... へ持ち上げた．そして拂多誕の位（?）において ...

6　　... 広範な（?）災難 ...

7　　判読不可能

8　　判読不可能

3 krtr の意味に関しては色々な議論があった．現在, Sims-Williams(2017, p. 35)は "rank, order, host" と訳している．DMSB, p. 88b にある γrf-krtr は "of many kinds, numerous" と訳されている．いずれにしても krtr は人間の集合体を意味する語である．

4 JH 'krty •••(n)yd s(γ)[, SW 'krty(cyw)yδ sx••[, YY2 **'kr(ty) [cyw]yδ sγ[tm'n]**.（図）(cyw)yδ の前半部は模糊として文字を判読できない．

5 YY/JH/SW 'βt'δ'nyh, YY2 **'βt'δ'ny-'**.（図）

語末の文字が -h ではなく ' であることは確実である．この語は, 重語幹名詞の 'βt'δ'n「拂多誕」の位格とは考えられず，抽象名詞を派生する接尾辞 -y'(kh）を伴っているのであろう．そしてその抽象名詞は「拂多誕の座」を意味し，保義可汗のときにカラバルガスンに，拂多誕の座が設置されたことを示しているのだと考えられる．この点につ

いては上記「Ⅱ-3 東ウイグル可汗国とマニ教（2）：改宗後のマニ教関連の記事」を参照せよ.

6 YY δβz(’), JH dβ’nz pty(r’yd) [, SW δβz(’)pty(’r•••) [, YY2 **δβnz pty(’r •••) [.**（**図**）

DMSB, p. 72b によれば YY の δβz’ はむしろ δβn’ “fear” と読むべきかもしれないとする. さらにこの同じ語を δynh と読む可能性を指摘している. この部分の読みが確定しない理由の一つとして, ’ の文字には尾がなく, 語中の形式を取っていること, つまり後続の部分と合わさって, δβn’pty’r, etc. のようになっていることがあげられる. この碑文では文字 z は概ね次の文字と続け書きされないので, δβz’pty’r とは読めない. 筆者は δβnz pty’r と読んで「広範な（＝ひどい？）災難」と翻訳してみた.

語彙表

”βr/”γt vb. 持ってくる

”γt past.inf. *10（4）

”γtδ’rym 3.pl.tr.pret. *12（1）

”γ’z/ vb. ～し始める

”γ’z’nt 3.pl.impf. *10（4）

”γ（t••）[ ] ？ 17（4）

”lpw pylk’ prop.n. ウイグル人名：Alp Bilgä Cf. also ’lpw.

”lpw pylk’ <41>

”p’y noun 理解（力）

”p’y 5（1）

”prywn noun 祝福 *<36>

”s/’yt vb. 取る

”st 3.sg.impf.mid. 18（2）

”st’nt 3.pl.impf.mid. 6（1）

’ytδ’r’nt 3.pl.pret.tr. 6（4）

”stnyk adj. 本来の，永続する

”stnyk *20（1）

”šn’s-knty adj. 阿史那族の [DMSB, pp. 26b, 97b two words]

”šyn’s-knty 6（1）

”tr f. 火

”try obl. 11（2）, 12（2）

”xw’š noun（不明語）設立，設置？ *’nγwnš*, etc. の読みも可；下記も参照

”xw’š 17（1）

”xw’št（不明動詞の過去語幹；名詞形は上記参照）*’nγwnšt*, etc. の読みも可

”xw’št past inf. 17（1）

”y tnkryδ’ xwtpwlmys ’lp/’lpw pylk’ prop.n. ウイグル第８代可汗の名称：Ay Tängridä Qutbulmïs Alp Bilgä

”y tnkryδ’ xwtpwlmys ’lpw pylk’ *hdl., 1（1）, *2（1）

”z’ty m. 自由人，貴族

”z’tyt pl. *22（1）

”z’tyty pl.obl. 15（6）

”zy noun 誕生

”zy 16（2）

***”zyr/** vb. 傷つける

”zyr’nt 3.pl.impf. *10（1）（”zr’nt と表記される）

’βc’npδ f. 世界 ’βc’npδy xr’m 世界から進み出る＝死ぬ

’βc’npδy obl. 14（1）, *23（2）

’βc’npδyk adj. 世界の

’βc’npδyk *16（4）

’βc’npδykw 2（1）

’βškr-/’βškrt- vb. 追い出す

'βškrty wβ' 3.sg.pass.impf. 10（1）

'βt'δ'ny' f. 拂多誕の座，地位

'βt'δ'ny' Fr.8/5

'δry num. 3

'δry 19（2）, 20（2）

'krt- s.v. **βw-/'krt-** 及び **kwn-/'krt-**

'lp, 'lpw, ''lpw s.v. **''y tnkryδ' xwtpwlmys 'lp/'lpw pylk', tnkryδ' 'wlwk pwlmys 'lpw xwtlwγ 'wlwγ pylk', ''lpw pylk'**

'lp'yn'ncw pγ'trx'n ウイグル人名：Alp Inančü Baγatarxan

'lpyn'ncw pγ'trx'n *1（1）

'lp'yn'ncw pγ'trx'n 3（1）

'lpw xwtlwγ prop.n. ウイグル人名（第 7 代可汗の即位前の名前）：Alp Qutluγ

'lpw xwtlwγ 16（1）

'lpw xwtlwγ pylk' prop.n. ウイグル第 4 代可汗の名称：Alp Qutluγ Bilgä

'lpw xwtlwγ pylk' 13（1）

'lpw yncw pylk' prop.n. ウイグル人名：Alp Inčü Bilgä

'lpw yncw pylk' 20（1）

'mn 1.pl.pers.pron.encl. 我々の，我々に

'mn *20（6）

***'nβrz-βr/'nβrz-βr't** vb. 世話をする，気遣う

'nβrz-βr't δ'rt 3.sg.tr.pret. *15（Frag. Rus.）

'nβrzkr noun 大臣

'nβrzkr 20（1）, 20（7）

'ncmn noun 会衆，教団

'ncmnw *16（7）

'nxw'y/ vb. 傷つける，破損する

mnxw'y 3.sg.impf. 19（1）

'nxwnc noun 戦闘，戦争

'nxwncw 10（1）

***'nxyrš/** vb. 引き寄せる（？）

mnxyrš 3.sg.impf. *7（1）

'ny- adj. 他の

'ny *21（1）

'ny's/'ny't vb. 取る

'ny'ty p.p. *19（1）

'ny'z'nk adj. 異なる，異種の，特別な

'ny'z'nk 16（2）

'ny'z'nkw 8（1）

'pryw s.v. **pr'yw**

'rk f. 仕事

'rkh 13（2）, 15（1）

'rky obl. 11（1）

'rpst'k adj. 権力ある，強力な

'rp'st'k 22（1）

'rpst'kw 7（1）, *9（1）-（2）, *10（1）-（2）

'rt'w m. マニ教僧侶（原義：正義の（人））

'rt'wty pl.obl. 19（7）

’skw-/’skw’t vb. 留まる；nyδ/nyst- の項目も参照

’skw’nt 3.pl.pres. <42>

’skw’skwnw 3.sg.impf.dur.（或いは ’z-pret.?）5（1）

’skwδ’skwn s.v. **nyδ**

’sky adv. 上方へ，東方へ

’sky *12（6），*13（2）

’sp’δ noun 軍隊

’sp’δ 19（1）

’sp’δy obl. 9（2），10（2）

’sp’δy’n noun 兵士

’sp’δy’n *9（4）

’sp’s noun 奉仕，仕えること，供養

’sp’s 12（1）

’spt’k adj./adv. 完全な／に

’spt’kw <35>

’spyš-/ vb. 奉仕する，仕える

’spyšymskwnw 1.pl.pres.dur. 11（1）

’šm’x pron.2.pl. あなた方

’šm’xw 11（6）

’šm’xprn pron. + noun あなた様

’šm’xprn 15（1）

’wγwz prop.n. ウイグルの部族名：Oghuz

’wγwz 3（1）

’wk’ ウイグル語 *ögä* 大臣，補弼

’wk’ 2（3），3（1）（x2），3（3），3（5）

’wk’sy s.v. **’yl ’wk’sy**

’wlwγ s.v. **tnkryδ’ pwlmys ’yl ’ytmys ’wlwγ pylk’, tnkryδ’ ’wlwk pwlmys ’lpw xwtlwγ ’wlwγ pylk’**

’wlwk s.v. **tnkryδ’ ’wlwk pwlmys ’lpw xwtlwγ ’wlwγ pylk’**

’wst’y/ vb. 置く，任命する

w’sty 3.sg.impf. 20（7）

’wšt/ vb. 立つ，いる

w’št 3.sg.impf. 17（6）

’wt’k noun 場所，地方，国

’wt’kt pl. 19（1），22（2）

’wt’kcyk adj. 国の，地方の

’wt’kcykt pl. 21（2）

’wts’r adv. そこへ，そこから

’wts’r *4（3）

’wtyr pγ’trx’n prop.n. ウイグル人名：Ötir Baghatarkhan

’wtyr pγ’trx’n 3（1）

’wyγwr prop.n. ウイグル語の部族名：Uighur

’wyγwr *hdl., 1（1），*2（3）

’wytwk’n prop.n. ウイグル地名：Ötükän

’wytwk’n 10（2）

’xš’w’nh, ’xš’wnh noun 領土，支配権

’xš’w’nh 5（1），6（1），7（1），*13（4），18（2），*19（2），<38>

’xš’w’nty pl.obl. *12（Frag.Paris）

’xš’w’ntyh pl.obl. <40>

'xš'w'nyh obl. *21 (1), 22 (7), 23 (1)

'xš'wnh *6 (4), 7 (1)

'xš'w'ncyk, 'xš'wncyk adj. 領土の

'xš'w'ncykw 15 (1)

'xš'wncykw 13 (2)

'xš'w'nδ'r, 'xš'wnδ'r m. 支配者，王

'xš'w'nδ'r 7 (1), *15 (4), 20 (2), 21 (2)

'xš'w'nδ'ry obl. 15 (1)

'xš'wnδ'r 2 (1), 4 (1), 6 (1)

'xš'wnδ'rt pl. *4 (2-3), 6 (1)

'xš'wnδ'rty pl.obl. *6 (2)

'xš'wnδ'ry obl.sg. 8 (1), *17 (Frag. Rus.)-(7)

'xšnyrk noun 印，徴

'xšnyrkw 17 (2), 18 (1)

'xšywny m. 帝王（可汗を指す）

'xš'ywny 10 (1)

'xšywn'k 17 (1), *17 (1)-(2), 21 (1), 21 (7), 22 (2), 23 (2)

'xšywn'kw *14 (Frag.Rus.)

'xšywny 2 (1), 9 (1), 11 (1), 11 (4), 12 (1), *12 (4)

'yδ'k, 'yδy m. 誰か

'yδ'k 15 (1)

'yδ'yt pl. *19 (1)

'yδ'yty pl.obl. 16 (2)

'yδyty pl.obl. 5 (4)

'yl s.v. **tnkryδ' pwlmys 'yl 'ytmys 'wlwγ pylk'**

'y1 'wk'sy ウイグル語 il ögäsi 宰相，総理大臣

'yl 'wk'sy 3 (1), 16 (1)

'yny dem. これ

'yny nom.sg.m. hdl.*1, 1 (1), 9 (1) (as acc.), 10 (1), 11 (1) (as acc.)

mwn'kw acc.sg.m. 16 (1)

mwnkw acc.sg.m. 1 (5)

'ys/"γt vb. 来る

"γt 3.sg.pret.intr. 9 (1)

'ytδ'r'nt s.v. **"s/'yt**

'ytmys s.v. **tnkryδ' pwlmys 'yl 'ytmys 'wlwγ pylk'**

'M prep. = δnn ～といっしょに

'M 9 (1), 10 (1)

βγ- m. 神，神のごとき，主

βγy nom.sg. 9 (1), 10 (1), 11 (1), 11 (4), 12 (1), 12 (4) (x2), 12 (6), 23 (2), <33>, Fr.8/2

βγy gen.-dat.sg. hdl., 1 (1), 10 (1), 11 (2), 22 (7)

βγyšty pl.obl. 2 (1)

βγpwr'k adj. 中国の（？）*1 (5)

βγpwrstn noun 中国

βγpwrstnw 9 (2)

βr'yšt'k m. 天使

βr'yšt'k 17 (2)

βr'yšty *18（1）

βr'yt/ vb. 助ける，救う

βr'yδt 2.pl.impv. 9（1）（音転位による < *βr'ytδ）

βrγn- f. 様式，あり様

βrγnh 8（1）

βš'm/βšmt- vb. 送る

βšmtw δ'r'nt 3.pl.tr.pret 22（1）

βtrync/ vb. 降伏させる

β'tryncw 3.sg.impf. 7（1），18（6）

βw-/'krt- vb. ～になる

'krt'nt 3.pl.intr.pret. 6（1）

'krty 3.sg.intr.pret. 7（1），23（1），Fr.8/4

wβ' 3.sg.impf. 13（1），17（1）

βxtwny f. 分裂

βxtwny *6（1）

βynt vb. tr. 縛る 'rky βynt 委任する

βynt 3.sg.impf. 11（1）

c'δr adv./adj. 下方へ，西方へ

c'δr 12（6），*13（2），21（1），22（2），24（2）

c'nkw conj. ～するとき，～なので

c'nkw 5（1），*7（1），8（1）（x2），9（1），10（1），12（6），13（1），*13（Frag. Paris），*16（1），16（7），21（1），22（1），23（2），*Fr.8/2

cntr adv. 内に

cntr 16（6），<37>

ctβ'r num. 4

ctβ'r 8（1），10（6），19（1），24（2），<39>，<40>

cw rel.pron. 何，何であれ

cw 23（1）

CWRH f. 体，自分

CWRH 7（1），17（4），20（1）

cymyδ prep.+dem. これから，この～から

cymyδ 9（1）

cywyδ prep.+dem. あれから，あの～から

cywyδ 5（1），6（2），12（1），16（6），*Fr.8/4

δ'βr s.v. **δβr-**

δ'r/zγt- vb. 保持する，持つ

δ'rymskwnw 1.pl.pres.dur. 11（1）

zγtw δ'r'nt 3.pl.tr.pret. 4（1）（x2），6（1）

zγtw δ'rt 3.sg.tr.pret. 5（1），7（1），13（Frag.Rus.），14（6）

δβnz adj. 厚い，ひどい

δβnz Fr.8/6

δβr-/ vb. 与える

δ'βr 3.sg.impf. 16（1），20（1）

δβr'ntskwnw 3.pl.pres.dur. 18（7）

δβrδ' 2.pl.impv. 9（1）

δβtyk adj./adv. 再び，2 度目に

δβtykw 6（4）, 10（1）

δβtyw adv. 再び

δβtyw *17（1）

δnn prep. ～といっしょに

δnn *17（4）

δs’ num. 10

δs’ 20（2）

δst- m. 手

δsty nom.sg 11（1）（as instr.-abl.）, 12（1）（as instr.-abl.）

δsty’ loc.sg. 18（2）

δyn f. 宗教，教会

δynh *8（2）-（4）, 10（1）, 11（2）（x2）, 15（2）, 16（6）, <37>, Fr.8/2

δynmync adj. 宗教の，教会の

δynmyncw 17（1）, 22（2）, 23（1）

δynyk noun 異教の

δynykt pl. 10（1）

δyw m. 悪魔

δywty pl.obl. 11（1）, 12（1）

γn- m. 技倆，徳

γn’y *19（6）

γny nom.sg. 2（4）（as acc.）, 5（1）（as acc.）, 8（4）（as acc.）, 14（2）（as acc.）, *15（1）（as acc.）, 18（1）（as acc.）

γnkyn adj. 勝ち誇った，勇敢な

γnkyn *4（1）, *5（4）

γnkynw *13（1）-（2）

γnt’k adj. 悪い，邪悪な

γnt’k 19（2）

γr’m’k m. 富

γr’m’kw *12（2）, *17（4）, <36>

γr’n adj. 重い，偉大な，重大な

γr’n *2（4）, *12（4）, 15（1）, 18（1）, 19（1）, 19（7）, 22（1）, 22（2）, <34>, Fr.8/4

γrβ adj. たくさんの

γrβ 5（1）, 7（1）, 13（2）, 18（7）, 19（1）, *19（6）, *21（2）, <36>, Fr.8/3

γrβ’k adj. 賢い

γrβ’kw 2（1）, 4（1）, 13（1）

γrβ’ky’kh, γrβ’kyh f. 智慧，知識

γrβ’ky’kh <37>

γrβ’kyh 8（4）, 14（2）, 15（2）

γrβ’y m. 知識，理解力

γrβ’y 5（1）

γw’δwk noun 玉座（読みは不確定）

γw’δwk 3（1）

γwβty’kh f. 賞賛，讃えること

γwβty’kh *hdl., 1（1）

γyrtr adv.（時間的に）後に

γyrtr *5（1）

γzn- m. 宝物

γzny nom.sg. *17（4）（as instr.-

abl.), *<36>

k'm/ vb.　欲する，望む

k'm　3.sg.impf. 17（1）

kδ'm inter.-rel.pron. どの（～でも）

kδ'm 4（1), 15（1）

kδry adv. 今，さて

kδry 11（1）

knty s.v. **''šn's-knty**

krt'k noun（不明語）富の蓄積（？）

krt'k 18（7）

krtr noun 人々，群衆

krtr Fr.8/3

kw prep. ～へ

kw 7（1), 9（2), 21（1）（x2）

kwl s.v. **kwl pylk'**

kwl pylk' prop.n. ウイグル人名（初代ウイグル可汗の名前）：Köl Bilgä

kwl pylk' *5（2), *7（2）

kwlwk s.v. **tnkryδ' pwl-mys kwl-wk pyl-k'**

kwn-/'krt- vb. "to do, make"

'krtw δ'r'nt 3.pl.tr.pret. 10（1),

'krtw δ'rt 3.sg.tr.pret. 13（2)-(4), 18（1), 20（1）

'krty p.p. 11（1), *12（1）

kwrδ rel.adv. 何処，～する場所

kwrδ *18（4）

kws'n（地名）クチャ

kws'n *19（1),

kwzp- adj. 精力的な

kwzpy nom.sg.m. 15（1）

ky rel.pron. ～する人

ky 17（2), 20（2), <38>, <42>

kyZY 6（1）

kym'k prop.n. 遊牧民族の名前：Kimäk（推補は不確実）

kym'k *18（6）

kyr'n noun 方角，方面

kyr'n 24（2), <39>

kyr'nw 8（1), <40>

L' adv.（否定辞）

L' 11（6), 15（2), 15（4), *16（4), 17（7), *18（4), 23（2）

m'δ adv. 次のように（直接引用を導入する）

m'δ 14（Frag.Rus.）

m'rm'ny prop.n. 人名：マール・マーニー

m'rm'ny 10（1), 11（2), 12（4）

m'x pers.pron.1.pl. 我々，我々の／に

m'xw 2（5）

m'yδ s.v. **myδ**

mδy adv. ここ

mδy 10（2), <42>

mγwn adj. 全部，全体

mγwn 20（7）

mγwnw 13（Frag.Rus.), 22（7),

<38>

MN prep. ～から

MN 2（1）, *2（4）, *5（4）, 15（6）, *16（2）, 16（2）, *19（1）, 19（2）, 20（4）, 21（7）, <40>

mnxw'y s.v. **'nxw'y**

mnxyrš s.v. **'nxyrš**

mrt'nyh f. 男らしさ

mrt'ny'kh 14（2）

mrt'nyh *2（4）, 5（1）, 15（2）, 15（6）, 18（1）

mrts'r adv. こちらに

mrts'r 12（Frag.Rus.）, 16（2）

mrtxm'k m. 人

mrtxm'yt pl. *18（4）

mry nywrw'n prop.n. 人名：Mār Nēw Ruwān

mry nywrw'n *12（6）

ms adv. また

ms 1（5）, <40>

rtms 16（Frag.Rus.）, 18（7）, *19（2）, 20（7）

mwmyn xm'yr noun カリフ（アラビア語の 'amīr al-muʿminīn「信者たちの指導者」からの借用語）

mwmyn xm'yr 21（7）

mwn'kw, mwnkw s.v. **'yny**

mwz'k noun 慕闍（マニ教僧侶の最高位の称号）možak

mwz'k' 12（6）

myδ dem./adv. これ，このように；とても

m'yδ *20（1）

myδ <32>

n'β s.v. **n'p**

n'm noun/adv. 名前，称号

n'm 12（2）, 16（1）, 20（1）

n'p, n'β noun 人民，国民

n'βt pl. 19（2）

n'pt pl. *10（1）

nβ'nt postp. ～のそばに

nβ'nt 17（6）

nβyr'k m. 相談役，補弼

nβyr'k 17（6）

nγ'wš'k m. 聴者（マニ教の世俗信者）

nγ'wš'kt pl. 21（6）

nγ'wš'kty pl.obl. 19（7）

nm'c noun 敬意，崇拝

nm'cw 12（1）

nm'ck'n noun 捧げ物

nm'ck'n 22（1）

np'yk noun 書いたもの，書物 *1（5）

npys/np'xšt- vb. 書く

np'xštw δ'rym 1.pl.tr.pret. *hdl., *1（1）, 2（5）

nšyδ/ vb. 任命する，設置する

nyšyδ 3.sg.impf. 20（1）

ny'k m. 祖父，祖先

ny'k 2（1）

ny'kw *1（3）

nyδ/nyst- vb. 座る，王位に就く

nysty 3.sg.intr.pret. *5(3), 8(1)(x2), 13（1), *14（2）

nysty 'skwδ'skwn 3.sg.pres.perf.dur. 15（1）

nysty L' wm't 3.sg.pluperf.neg. 17(7)

nywrw'n s.v. **mry nywrw'n**

p'δ noun 矢

p'δ 18（2), 20（2）

p'rZY conj. なぜなら

p'rZY *11（6), 23（1）

p'š noun 敬意，尊敬，断食

p'š *22（1）

p't noun 時，場合

p't 16（6）

pckwyr noun 畏怖

pckwyr 8（1）

pckwyry obl. 22（1）

pδk- f. "law, rule, rite"

pδkh acc. 11（1）

pγ'trx'n noun ウイグル語の称号：

baghatarkhan s.v. **'lp'yn'ncw pγ'trx'n, 'wtyr pγ'trx'n**

pr prep. ～に，～で，～のために

pr 4（1), 5（1), 8（1), 8（2), *8（2), 8（4), 14（2), 15（1), 15（2), 16（1), 16(6), 17(2), 17(7), *18(1), 18（2), 20（2), *20（7), 20（7), 22（7), <37>, Fr.8/5

pr'šy s.v. **pryš/pryšt**

pr'yw postp. ～といっしょに

'pryw *<36>

pr'yw 6（1）[DMSB p. 141b pr"w "therefore"], 9（2), 10（2), *<34>

prβ'yr/prβ'yrt vb. 説明する

prβ'yrt δ'rt 3sg.pret.tr. *<35>

prm postp. ～まで

prm 21（7）

prm'n f. 命令

prm'nh 12（1), 21（2）

prm'y vb. 命令する

pr'm'y 3.sg.impf. 12（1）

prn noun 栄光，幸運（敬）～様，～殿；'šm'xprn も参照

prn 4（1), 8（2）

prnβyrty adj. 栄光を手に入れた

prnβyrty 2（1）

prnpδ'ky'kh f. 栄光を備えていること

prnpδ'ky'kh *14（4）

prnpδy adj. 栄光ある

prnpδy 21（1）

prnxwnt'k adj. 栄光ある，福徳を備えた

prnxwnt'k *22（1）

prnxwnt'kw 21（7）

prnxwntkyh f. 栄光を備えていること

prnxwntkyh 4（1）, 8（2）, 14（4）

pršk'r noun 迫害

pršk'r *21（1）

prw prep. ～に，～で，～のために

prw *4（4）, 22（2）

prwrt'k m. 度，回

prw'rt'k 22（1）

prwrt'k *19（1）

prwrt'kw 19（6）

pryc/prγt- vb. 棄てる，後にする；tnp'r pryc 肉体を棄てる＝死ぬ

p'ryc 3.sg.impf. 5（1）, *7（2）

p'rycw 3.sg.impf. 13（6）

pr'γtδ'rt 3.sg.tr.pret. 13（1）

prymyδ prep. + dem. この～に，この～のために

prymyδ 23（1）

prys/pr'γt vb. 到着する

prys'nt 3.pl.impf. *4（4）

pryš/pryšt vb. 送る，派遣する

pr'šy 3.sg.impf. *21（2）

pš'y/ vb. 放り投げる

p'š'y 3.sg.impf. 18（2）

ptcxš-/ptcγt- vb. 受け取る，手にする

ptcγt kwnδ' 2.pl.pres.pot. 11（6）

ptcxš'y pres. inf. *11（2）-（4）

ptcxšδ 2.pl.impv. 12（1）

ptycxš 3.sg.impf. 19（2）

ptγwš/ vb. 聞く

ptyγwš 3.sg.impf. 9（1）

ptkry m. 偶像

ptkr'yt pl. *11（1）

ptkryt pl. 12（2）

ptkwn adj. 異教の，邪見の，逆さまの

ptkwnw 11（1）

pts'k noun モニュメント

pts'k dir. *hdl., 1（1）, 17（1）, *22（2）, 23（1）

pts'r adv. それから

pts'r 11（4）, 14（1）, 23（2）

ptsγty pp./adj. よく整備された，よく支配された（pts'c「配置する，配列する，装備する」の過去分詞）

ptsγty 7（1）

pts'γty 14（6）

ptsynt/ vb. 満足する，同意する

ptysynt 3.sg.impf. 12（1）, 16（1）

ptškw'n noun（目上の人への）言葉，お願い

ptškw'nh 9（1）（x2）, 16（1）（written ptškw'ty）

ptškwy- vb.（目上の人へ）申し上げる，お願いする

ptyškwy'nt 3.pl.impf. *14（Frag. Rus.）

ptšm'r noun 数

ptšm'r 10（6）

ptšm'ry obl. 18（1）

ptwysty p.p./adj. 捧げられた（ptwyδ「捧げる」の過去分詞）

ptwysty *20（1）

pty'r noun 災厄，敵対

pty'r Fr.8/6

p(t••)nty ？ *15（2）

pwkw prop.n. ウイグル人名，第３代可汗の名前：Bögü

pwkw 13（1），17（1）

pwlmys s.v. **tnkryδ' pwlmys 'yl 'ytmys 'wlwγ pylk', tnkryδ' pwl-mys kwl-wk pyl-k', tnkryδ' 'wlwk pwlmys 'lpw xwtlwγ 'wlwγ pylk'**

pwrt/pwrst- vb. 返る，帰る

pwrst'y 3.sg.intr.pret. 12（Frag. Rus.）

pwyrwx noun ウイグル語 buyruq 大臣

pwyrwxty pl.obl. 16（1）

pw-zr'yš adj./adv. 融通無碍，障碍のない

pw-zr'yš 13（1）

py't/pyst vb. 飾る

pystδ'rt 3.sg.tr.pret. *17（4）

pyδ'r postp. ～の故に，～のために

pyδ'r 12（1）（cywyδ pyδ'r），*19（4）（MN ... pyδ'r）

pylk' s.v. **"y tnkryδ' xwtpwlmys 'lp/'lpw pylk', tnkryδ' pwlmys 'yl 'ytmys 'wlwγ pylk', 'lpw xwtlwγ pylk', tnkryδ' pwl-mys kwl-wk pyl-k', xwtlwγ pylk', tnkryδ' 'wlwk pwlmys 'lpw xwtlwγ 'wlwγ pylk', 'lpw yncw pylk', "lpw pylk'**

pyr'y m. 信じること，信仰

pyr'y *8（4），*14（2）

pyz noun 打撃を与えること

pyzt pl. *21（1）

RBk adj. 大きい，巨大な

RBkw 2（1），14（2），<37>

rt s.v. **rty**

rty conj.（定動詞句の始まりをマークする）

rtms 16（Frag.Rus.），18（7），19（2），20（7）

rty *4（1），*10（4），17（1），*17（4），*20（1），

rtyšy 18（2）

RYPW num. 10,000

RYPW 18（1）

s'n noun 敵

s'n *19（4），

s'r postp. ～の方へ，～方から

s'r 7 (1) (kw ... s'r), 9 (2) (kw ... s'r), *10 (4), 14 (Frag.Rus.), 15 (2) (corrected from s'n; pr ... s'r), 21 (2) (kw ... s'r), 22 (6), Fr.8/5

s't adj. すべての

s't 7 (1), 8 (1), 10 (1), 11 (1), 12 (2), 15 (6), 16 (1), 16 (2)

s't•γ•t ? *10 (4)

sγtm'n adj./noun 全員／全体（の）

sγtm'n *2 (5), *4 (2), *Fr.8/4

srδ noun 年

srδ 5 (1), *6 (1)

srδy obl. 7 (1)

swc vb. 燃やす

swcym 1.pl.inj. *12 (2)-(4)

swc'y pres.inf. 11 (2)

***syn/syt** vb. 上げる，掲げる

sytδ'rt 3sg.pret.tr. Fr.8/5

šx- adj. 硬い，すごい

šxy nom.sg.m. 8 (1)

šy 3.sg.pers.pron.encl. 彼に／の , etc.

rtyšy 18 (2)

šyn s.v. **šyr**

šyr adv./adj. とても；すばらしい

šyr 7(1) (written *šyn*!), 13(1), 14(6), 15 (1), *18 (2)

šyrn'm noun 名声

šyrn'm <38>

t'zyk'n'y adj. 大食の

t'z'yk'n'k <38>

t'zyk'n'y 20 (7)

tnkryδ' s.v. **"y tnkryδ' xwtpwlmys 'lp/'lpw pylk'**

tnkryδ' 'wlwk pwlmys 'lpw xwtlwγ 'wlwγ pylk' prop.n. ウイグル人名，第 7 代可汗の称号：Tängridä Ülüg Bulmïs Alp Qutluγ Uluγ Bilgä

tnkryδ' 'wlwk pwlmys 'lpw xwtlwγ 'wlwγ pylk' 14 (1)

tnkryδ' pwlmys 'yl 'ytmys 'wlwγ pylk' prop.n. ウイグル人名，第 2 代可汗の称号：Tängridä Bulmïs Il Itmis Ulugh Bilgä

tnkryδ' pwlmys 'yl 'ytmys 'wlwγ pylk' *7 (4)

tnkryδ' pwl-mys kwl-wk pyl-k' prop.n. ウイグル人名，第 5 代可汗の称号: Tängridä Bulmïs Külüg Bilgä

tnkryδ' pwl-mys kwl-wk pyl-k' 13 (6)

tnp'r noun 肉体，身体（tnp'r pryc「肉体を棄てる＝死ぬ」）

tnp'r 5 (1), 7 (2), 13 (1), *13 (6)

trγty'kh f. 不幸，厄介事

trγty'kh 9 (1)

¹twγ noun 旗指物（漢語「纛」中古漢語 *d'uok からの借用語）

twγ 20（1）

²twγ adv. すばやく

twγ *6（2）

³twγ noun 支払い，賠償金

twγ *18（7）

twγr'ystn prop.n. 地名 Tughristan

twγr'ystny obl. 19（1）

twpyt prop.n. 国名，チベット

twpyty *19（4）

twpytc'ny adj. チベットの

twp'ytc'ny 19（1）

twrk prop.n. 民族名，突厥

twrk 6（1）

twrkc'ny adj. トルコ族の 2（1）

twrkyš prop.n. 民族名，突騎施

twrkyš *20（1）-(2), 20（2）

tykyn m. ウイル語：tegin「王子」

tyk'yn *16（1）

tykyn 2（3）

w'β adj./adv. それほど多くの，それほどの

w'β *22（1）

w'βr adv. それほど多くの，それほどの

w'βr *10（1）

w'δ noun 坐席，玉座

w'δy obl. 8（1）, 15（1）, 17（7）

w'nkw adv. そのように；w'nkw ZY（直接引用を導入する）

w'nkw 13（1）, <37>

w'nkw ZY 9（1）, 12（1）, <39>

w'r'k adj. 空の，空虚な

w'r'kw 18（2）

w'sty s.v. **'wst'y**

w'št s.v. **'wšt**

wβ' s.v. **βw-/'krt-**

wβyw adv./conj. ～も，そしてまた

wβyw ZY <40>

wγš- m. 喜び，慶事

wγšy nom.sg.m. *23（1）

wm't s.v. **x-/wm't**

wrcy'w'k m. 安寧

wrcy'w'kw 19（7）

wxšn'y m. 救済者

wxšn'yt pl. *Fr.8/3

wyδ'sγwny adj. 奇特な，すばらしい

wyδ'sγwny 8（1）

wyδβxs- vb. 広まる，流布する，流通する

wyδβ'xs 3.sg.impf. *8（1）-(2), <39>

wyδβxs 3.sg.impf. *13（1）

wyδp't adv. その時

wyδp't 12（1）, 14（6）, 17（1）

wyn'ncyk adj. 目に見える，明瞭な

wyn'ncykw 18（1）

wyptm'k adj. 計りきれない

wyptm'kw 22（2）

wysp- adj. すべての，みんな

wyspw acc.sg.m./indcl. 7（1）

wyspδry m. 王子

wyspδryt pl. *12（4）, *15（4）

wysprδ adv. 至る所で

wysprδ 18（1）

wyš'nt 3pl.pers.pron. 彼ら

wyš'nt 20（7）, 21（2）

wyš'nty obl. 19（1）

wyzp- f. 恐怖，脅威

wyzp' nom.sg.f. 8（1）

x-/wm't vb. ～である

wm't 3.sg.intr.pret. 6（2）, 8（1）, 13（2）, 16（4）, 17（2）, 17（7）, 20（2）, 21（1）, 23（2）s.v. **nyδ, xr'm**

wm't'nt 3.pl.pret. *4（1）

wm't'y 3.sg.intr.pret.opt. 4（1）

xcy 3.sg.pres. 15（1）

x'γ'n noun ウイグル語 qaghan，可汗

x'γ'n *hdl., 1（1）, 5（2）, 7（2）, 8（1）, 13（1）（x2）, *13（6）, 14（1）（x2）, 18（1）, 20（2）, 20（6）, <41>

x'γ'ny obl. 18（6）

xm'yr noun アミール；アラビア語からの借用語；mwmyn xm'yr も参照

xm'yr 21（1）, 21（2）

xr'm/xr'mt vb. 進む，歩む（敬語）；'βc'npδy xr'm 世界から進み出る＝死ぬ

xr'mtδ'rt 3.sg.tr.pret.tr.（instead of intr.）9（2）-（4）, 14（1）, 21（1）

xr'mty L' wm't 3.sg.plupf.neg. *23（2）

xrγyz noun 民族名 Khirghiz

xrγyzy obl. 18（1）

xrlwγ noun 民族名 Qarluq

xrlwγt pl. 19（2）

xrlwγty pl.obl. 20（1）

xwβ noun 王，領主

xwβ 20（2）

xwp adj./adv. 良い，上手な

xwpw 14（6）

xwr's'n prop.n. 地名 Khorasan

xwr's'n 21（1）

xws'nty'kh f. 喜び，幸せ

xws'nty'kh 23（1）, Fr.8/4

xwtlwγ s.v. **'lpw xwtlwγ pylk', tnkryδ' 'wlwk pwlmys 'lpw xwtlwγ 'wlwγ pylk, 'lpw xwtlwγ**

xwtlwγ pγ'trx'n prop.n. ウイグル人名：Qutluγ Baghatarkhan

xwtlwγ pγ'trx'n *3（1）

xwtlwγ pylk' prop.n. ウイグル人名，第 6 代可汗の称号：Qutluγ Bilgä

xwtlwγ pylk' 14（1）

xwtpwlmys s.v. **"y tnkryδ' xwtpwlmys 'lp/'lpw pylk'**

xwty adv. 自ら，本人が（人称代名詞で表現される人物を強調する；人称代名詞は表現されていない場合もある）

xwty 5（1），6（1），*9（1），13（1），16（1），17（1），19（2）

xwyštr adj./noun 目上の（人），尊長

xwyštr 16（1）

xyδ dem. あの，あれ

xyδ 9（4），*12（1）

xypδ adj. 自分の

xypδ 5（1），16（4），17（2），*18（2），*18（4），*19（1）

y'kwβ prop.n. 天使ヤコブ

y'kwβ 17（2），*18（1）

y'xy adj. 勇敢な

y'xy 4（1），17（1）

yγl'xr prop.n. ウイグルの部族名：Yaghlaqar

yγl'xr 3（1）（x2）

yncw s.v. **'lpw yncw pylk'**

ypγw noun トルコ語の称号 yabghu；カルルクのリーダーを指示する

ypγw 20（1），<38>

yw'r conj. しかし

yw'r 6（1）

ywk noun 教え，教訓

ywk 4（5）

yxwst'y adj. 区別された，特別の（yxw'y「分離する」の過去分詞）

yxwst'y 5（4），*15（6），16（2）

z't'y m. 息子

z't'y *5（1）

z'wr noun 力，援護；z'wr δβr- 援助する

z'wr 4（1），5（1），9（1）（z'wr δβr-），*15（4）

z'y f. 土地，場所，大地

z'yh 10（2），12（2）

zγt- s.v. **δ'r**

ZKn art./3.sg.pron.gen.-dat. 彼に

ZKn 9（1）（pron.），11（1）（art. with pl.），18（1）（art.）

ZKw art. acc.sg.（定冠詞）

ZKw 10（1）

ZKwy art.loc.（定冠詞）

ZKwy 12（2），22（7）

zmn- neut. 時間，時

zmnyh loc.sg. 17（1）

zmnw acc.sg. 4（4），*17（6）

zr'yš noun 断絶 s.v. **pw-zr'yš**

zwšy m. 供物

zwšy 12（1）

ZY conj.（**i**）そして，（**ii**）それから［（i）と（ii）の区別は，特に破損部ではやや恣意的である］，（**iii**）補文化詞

(**i**) ZY 2 (4), 4 (1) (x2), 5 (1) (x2), 7 (1), 8 (1), 8 (2), 8 (4) (x2), 9 (1) (x2), 11 (1), 12 (1), 12 (6), 13 (1), *13 (2), 13 (4), 13 (Frag. Rus.), 14 (2) (x2), 14 (4), 14 (6), 15 (1) (x2), *15 (2), 15 (2), 15 (6), 16 (2), 16 (6), *17 (4), 18 (1), 18 (2), 18 (7), 19 (1), 19 (7), 20 (1), 21 (1) (x2), 21 (2), 22 (1) (x2), 23 (1), <33>, <36>, <37>, <38>, <39>, Fr.8/2

(**ii**) ZY 4 (1) (x2), 6 (1), 6 (4), 8 (1) (x2), 9 (1), 12 (4), 14 (6), 16 (1) (x2), 16 (4), 17 (1), 19 (1), 20 (1), 20 (2), 21 (1), 22 (7), Fr.8/5

(**iii**) ZY 6 (1) (kyZY), 9 (1) (w'nkw ZY), *11 (6) (p'rZY), 12 (1) (w'nkw ZY), 23 (1) (p'rZY), <39> (w'nkw ZY), <40> (wβyw ZY)

数字

i 6 (1)

40 18 (1)

1-LPw 1000 *<36>

不完全な語

p(t••)nty 15(2)

(pw)[ ](•)syrk 18(2)-(4)

wxš[Fr.8/3

sx[Fr.8/4

[•](p•)yšy-m(s)k(wn)w 11(1)

γn'[19(6)

]tδ'rt 19(7), 22(7)

]δ'rt 23(6)

](•)x(y) 15(7)

]kw 10(4)

略号

1., 2., 3.	1st, 2nd, 3rd person	neut.	neuter
acc.	accusative	nom.	nominative
adj.	adjective	nom.-acc.	nominative-accusative
adv.	adverb	num.	numeral
art.	article	obl.	oblique
conj.	conjunction	opt.	optative
dem.	demonstrative	part.	participle
dir.	direct	pass.	passive
dur.	durative	perf.	perfect
encl.	enclitic	pers.pron.	personal pronoun
f.	feminine	pl.	plural
fut.	future	plupf.	pluperfect
gen.	genitive	postp.	postposition
gen.-dat.	genitive-dative	p.p.	past participle
impf.	imperfect	prep.	preposition
impv.	imperative	pres.	present
inf.	infinitive	pret.	preterite
inj.	injunctive	pron.	pronoun
inst.-abl.	instrumental-ablative	prop.n.	proper name
inter.	interrogative	rel.	relative
intr.	intransitive	sg.	singular
loc.	locative	subj.	subjunctive
m.	masculine	tr.	transitive
mid.	middle	vb.	verb
neg.	negative	voc.	vocative

文献表

Azarnouche, A. / F. Grenet, 2010. “Thaumaturgie sogdienne : Nouvelle édition et commentaire du texte P. 3,” *Studia Iranica* 39, pp. 27-77.

Bang, W. / A. von Gabain, 1929. “Türkische Turfan-Texte II : Manichaica,” *SPAW*, pp. 411-430.

BBB = Henning 1937.

Benveniste, É. 1940. *Textes sogdiens*, Paris.

—— 1946. *Vessantara Jātaka*, Paris.

Böhlig, A., 1978. “Jacob as an angel in Gnoticism and Manicheism,” in: R. M. Wilson（ed.）, *Nag Hamadi and Gnosis*, Leiden, pp. 122-130.

Chavannes, Éd. / Pelliot, P., 1913. “Un traité manichéen retrouvé en Chine（deuxième partie）,” *Journal Asiatique* 11, sér. I, pp. 99-199, 261-394.

Cheung, J., 2007. *Etymological dictionary of the Iranian verb*, Leiden/Boston.

Clark, L. V., 2000. “The Conversion of Bügü Khan to Manichaeism,” in: R. E. Emmerick, W. Sundermann, and P. Zieme（eds.）, *Studia Manichaica. IV. Internationaler Kongreß zum Manichäismus, Berlin, 14.-18. Juli 1997*, Berlin, pp. 83-123.

—— 2009. “Manichaeism among the Uygurs: The Uygur Khan of the Bokug Clan,” in: J. D. BeDuhn（ed.）, *New light on Manichaeism. Papers from the sixth International Congress on Manichaeism*, London / Boston, pp. 61-71.

—— 2017. *Uygur Manichaean texts. Texts and translations commentary. Volume III: Ecclesiastical texts*, Turnhout 2017.

Clauson, G. L., 1972. *An etymological dictionary of pre-thirteenth-century Turkish*. Oxford.

Dähne, B., 2016. “Karabalgasun – City layout and building structures,” in: L. Russell-Smith / I. Konczak-Nagel（eds.）, *The ruins of Kocho. Traces of wooden architecture on the Ancient Silk Road*, Berlin: Museum für Asiatische Kunst, pp. 35–41, incl. figs. in colour.

—— 2017. *Karabalgasun – Stadt der Nomaden. Die archäologischen Ausgrabungen in der frühuigurischen Hauptstadt 2009–2011*. Wiesbaden.

De Lacoste, B., 1911. *Au pays sacré des anciens Turcs et des Mongols*. Paris.

DMSB = Sims-Williams and Durkin-Meisterernst.

Gershevitch, I., 1954. *A grammar of Manichean Sogdian*, Oxford.

Gulácsi, Zs., 2001. *Manichaean art in Berlin collections*, Turnhout.

—— 2016. *Mani’s pictures. The didactic images of the Manichaeans from Sasanian Mesopotamia to Uygur Central Asia and Tang-Ming China*, Leiden/Boston 2016.

Hamilton, J., 1971. *Le conte bouddhique du bon et du mauvais prince en version ouïgoure*. Paris.

—— 1986. *Manuscrits ouïgours du IXe-Xe siècle de Touen-houang*. 2 vols., Paris.

—— 1990. “L’inscription trilingue de Qara Balgasun d’après les estampages de Bouillane de Lacoste,” in: A. Haneda（ed.）, *Documents et archives provenant de l’Asie Centrale*, Kyoto, pp. 125–133.

Haloun, G. / Henning, W. B., 1952. “The Compendium of the Doctrines and Styles of the Teaching of Mani, the Buddha of Light,” *Asia Major*, New Series III, pp. 184-212.

羽田亨 1957「唐代回鶻史の研究」『羽田博士史学論文集　上巻　歴史篇』京都，pp. 157-324.

Hansen, O., 1930. “Zur soghdischen Inschrift auf dem drei sprachigen Denkmal von Karabalgasun,”

Journal de la Société Finno-Ougrienne 44-3, pp. 1-39.

Heikel, A. 1892. *Inscriptions de l'Orkhon recueillies par l'expédition finnoise 1890 et publiées par la Société Finno-Ougrienne*, Helsingfors.

Henning, W. B., 1937. "Ein manichäisches Bet- und Beichtbuch," *APAW* 1936, No. 10（= BBB）.

—— 1938. "Argi and the 'Tokharians,'" *Bulletin of the School of Oriental Studies* IX/3, pp. 545-571.

—— 1946. "The Sogdian texts of Paris", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* XI/4, 1946, pp. 713-740.

—— 1949. "The name of the 'Tokharian' language," *Asia Major* 1/2, pp. 158-162.

Hüttel, H.-G. / B. Dähne, 2012. "Ausgrabungen in Karabalgasun 2009 und 2010," *Zeitschrift für Archäologie Außereuropäischer Kulturen* 4, pp. 419–432.

Kljaštornyj, S. G. and V. A. Livšic, 1972. "The Sogdian inscription of Bugut revised," in: *Acta Orientalia Hungaricae* XXVI（2）, pp. 69-102.

Livshits, V. A., 2015. *Sogdian epigraphy of Central Asia and Semirech'e*,（Corpus Inscriptionum Iranicarum II/III/IV）, London.

Lurje, P., 2010. *Personal names in Sogdian texts*,（R. Schmitt, et al.（eds.）, Iranisches Personennamenbuch, Band II, Faszikel 8）, Vienna.

MacKenzie, D. N., 1970. *The 'Sūtra of the Causes and Effects of Actions' in Sogdian*, London.

—— 1976. *The Buddhist Sogdian texts of the British Library*, Acta Iranica 10, Leiden/Tehran.

Mackerras, C., 1972. *The Uighur Empire according to the T'ang Dynastic Histories. A study in Sino-Uighur relations 744-840*. Canberra.

—— 1990. "The Uighurs," in: D. Sinor（ed.）, *The Cambridge history of early Inner Asia*, Cambridge, 1990, pp. 317-342.

Mahrnāmag = Müller 1913.

Minorsky, V., 1948. "Tamīm ibn Baḥr's Journey to the Uyghurs," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* XII/2, pp. 275–305.

森安孝夫 1979「増補：ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦及びその後の西域情勢について」『アジア文化史論叢』3，東京，山川出版社，pp. 199–238.

—— 2003. "Four lectures at the Collège de France in May 2003. History of Manichaeism among the Uighurs from the 8th to the 11th Centuries in Central Asia [in French and Japanese]," in: T. Moriyasu（ed.）, *World history reconsidered through the Silk Road*, Osaka, pp. 23–111, +15 pls. in colour, +8 maps, +3 figs.

森安孝夫 2015.『東西ウイグルと中央ユーラシア』名古屋.

森安 孝夫／A. オチル（共編）1999『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』大阪 .

森安孝夫他 2009.「シネウス碑文訳注」『内陸アジア言語の研究』XXIV, pp. 1-92.

森安孝夫／吉田豊（印刷中）.「カラバルガスン碑文漢文版の新校訂と訳註」『内陸アジア言語の研究』XXXIV.

Müller, F. W. K., 1909. "Ein iranisches Sprachdenkmal aus der nördlichen Mongolei." *Sitzungsberichte der Preußischen Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse*, pp. 726-730.

—— 1912. "Der Hofstaat eines Uiguren-Königs," in: *Festschrift für Vilhelm Thomsen*, Leipzig, pp. 207-213.

—— 1913. "Ein Doppelblatt aus einem manichäischen Hymnenbuch（Maḥrnâmag）," *APAW* 1912,

No. 5.

Palumbo, A., 2003. “La versione cinese dell’inscrizione trilingue di Karabalgasun,” in: G. Gnoli（ed.）, *Il Manicheismo*, *Vol. I: Mani e il Manicheismo*, Fondazione Lorenzo Valla / Arnoldo Mondadori Editore, pp. 249–277.

Radloff, W. W., 1891. *Das Kudatku Bilik des Jusuf Chass-Hadschib aus Bälasagun.* Teil 1., St. Petersburg.

—— 1892. *Atlas der Alterthümer der Mongolei. Arbeiten der Orchon-Expedition*, 1. Lieferung, St.Petersburg.

—— 1895. “Das uigurische Denkmal von Kara-Balgassun,” in: W. Radloff, *Die alttürkischen Inschriften der Mongolei*, 3. Lieferung, St.Petersburg,（Repr.: Osnabrück 1987）, pp. 283–298.

Ragoza, A. N., 1980. *Sogdijskie fragmenty central’noaziatskogo sobranija Instituta Vostokodenija*, Moscow.

Reeves, J. C., 2011. *Prolegomena to a history of Islamicate Manichaeism*, Sheffield/Oakville.

佐口透 1972.「回鶻伝（旧唐書・新唐書）」, 佐口透他（訳注）『騎馬民族史』2（東洋文庫 223）東京 , pp. 299–462.

SCE = MacKenzie 1970.

Sims-Williams, N. 1983. “Chotano-Sogdica,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* XLVI, pp. 40-51.

——1985. *The Christian Sogdian manuscript C2*, BTT XII, Berlin.（= C2）

——1989. “New studies on the verbal system of Old and Middle Iranian,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* LII, pp. 255-264.

—— 2015. “A Manichaean Sogdian hymn in two scripts,” in: Zhang Xiaogui et al.（eds.）, *Sanyijiao yanjiu: Lin Wushu xiansheng guxi jinian lunwenji*（Research on Three Foreign Religions: Festschrift for Mr Lin Wushu on His 70th Birthday）, Lanzhou, 2014 [2015], pp. 64-76.

—— 2016. *A dictionary: Christian Sogdian*, *Syriac and English*, Wiesbaden.

—— 2017. *An ascetic miscellany: The Christian Sogdian manuscript E28*, BTT XLII, Berlin.

—— 2019. “The wisdom of Aḥiqar and the wisdom of Ādurbād: A Manichaean parallel,” in: A. Hintze, D. Durkin-Meisterernst, and C. Naumann（eds.）, *A thousand judgements. Festschrift for Maria Macuch*, Wiesbaden, pp. 363-372.

Sims-Williams, N. / Durkin-Meisterernst, D., 2012. *Dictionary of Manichaean Sogdian and Bactrian.*（Corpus Fontium Manichaeorum, Subsidia, *Dictionary of Manichaean Texts*, Vol. III: *Texts from Central Asia and China*, Part 2）, Turnhout.

Sims-Williams, N. and Hamilton, J. 1990. *Documents turco-sogdiens du IXe-Xe siècle de Touen-houang*, London.

—— 2015. *Turco-Sogdian documents from 9th-10th century Dunhuang*,（translated by N. Sims-Williams with an appendix by Wen Xin）, London.

STii = Müller, F. W. K., and Lentz, W., 1934. *Soghdische Texte II*（Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Kl., 1934, No. 21）, Berlin.

Sundermann, W., 1981. *Mitteliranische manichäische Texte kirchengeschichtlichen Inhalts*, BTT X, Berlin.

—— 2012. *Die Rede der Lebendigen Seele*, BTT XXX, Turnhout.

Yoshida, Y., 1988.「カラバルガスン碑文のソグド語版について」『西南アジア研究』28, pp. 24–52.

—— 1990. “Some New Readings of the Sogdian Version of the Karabalgasun Inscription,” in: A. Haneda（ed.）, *Documents et archives provenant de l’Asie Centrale*, Kyoto, pp. 117–123.

吉田豊 , 2000.「粟特文考釈」吐魯番地区文物局（編）『吐魯番新出摩尼教文献研究』北京 , pp. 3-199.

—— 2006.「ソグド語の敬語について」『中央アジア古文献の言語学的・文献学的研究』（Contribution to the Studies of Eurasian Languages 10）, pp. 81-94.

—— 2007.「ソグド人とトルコ人の接触に関するソグド語資料２件」『西南アジア研究』67, pp. 48-56.

—— 2008. “Die buddhistischen sogdischen Texte in der Berliner Turfansammlung und die Herkunft des buddhistischen sogdischen Wortes für Bodhisattva,” *Acta Orientalia Hungarica* 61/3, pp. 325-358.

—— 2009. “Turco-Sogdian features,” in: W. Sundermann, A. Hintze and F. de Blois（eds.）, *Exegisti monumenta. Festschrift in honour of N. Sims-Williams*, Wiesdbaden, pp. 571-585.

—— 2009a. “The Karabalgasun Inscription and the Khotanese documenrs,” in: D. Durkin-Meisterernst, Ch. Reck, and D. Weber（eds.）, *Literarische Stoffe und ihre Gestaltung in mitteliranischer Zeit*, Wiesbaden, pp. 349-360.

—— 2010. “Karabalgasun ii. The Inscription,” in: *Encyclopædia Iranica*, vol. 15-5, New York, pp. 530–533.

—— 2011.「ソグド人と古代のチュルク族との関係に関する三つの覚え書き」『京都大学文学部研究紀要』50, pp. 1–41.

—— 2011a. “Some new readings in the Sogdian version of Karabalgasun Inscription,” in: M. Ölmez（ed.）, *Ötüken’den İstanbul’a = From Ötüken to İstanbul*, Istanbul, pp. 77–86.

—— 2013.「バクトリア語文書研究の近況と課題」『内陸アジア言語の研究』XXVIII, pp. 39–65.

—— 2013a. “Buddhist texts produced by the Sogdians in China”. In: M. Maggi et al.（eds.）, *Buddhism among the Iranian peoples of Central Asia*, Vienna, 2013, pp. 155-179.

吉田豊 2017.「中国，トルファンおよびソグディアナのソグド人景教徒—大谷探検隊将来西域文化資料 2497 が提起する問題—」入澤崇・橋堂晃一（編）『大谷探検隊収集西域胡語文献論叢仏教・マニ教・景教』京都 , pp. 155–180.

—— 2018. “Historical background of the Sevrey Inscription in Mongolia,” in: H. Chen and X. Rong（eds.）, *Great journeys across the Pamir Mountains: Festschrift in honour of Zhang Guangda on his eighty-fifth birthday*, Leiden/Boston, pp. 140-145.

—— 2018a. “Farewell to the Teacher of Four Twγryst’n,” in: Zs. Gulácsi（ed.）, *Language, society, and religion in the world of Turks: Festschrift for Larry Clark at seventy-five*,（Silk Road Studies XIX）, Turnhout, pp. 267-279.

—— 2019.「ブグト碑文のソグド語版について」『京都大学文学部研究紀要』58, pp. 1-33.

—— 2019a. “On the Sogdian articles”, *Annual report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University for the academic year 2018[2019]*, Vol. XXII, pp. 261-285.

—— 2019b. “Sogdian version of the Bugut Inscription revisited”, *Journal Asiatique* 307/1, pp. 97-108.

吉田豊（印刷中）「カラバルガスン碑文に見える大食とウイグルの関係」

—— forthcoming a. “Bögü Qaghan, Zieme, Clark, and Moriyasu —On some aspects of the early

phase of the Uighur Manichaeism—."

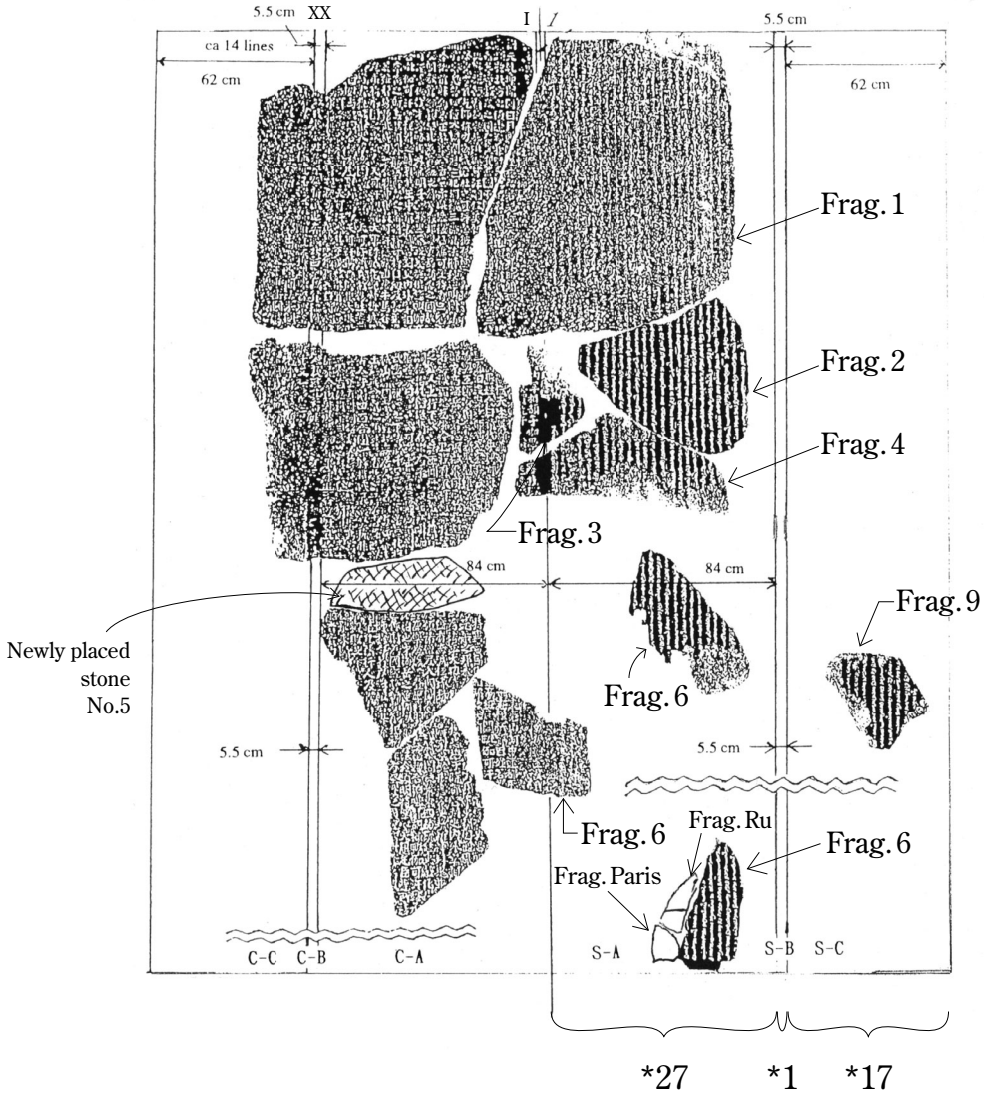
—— forthcoming b. "VI. The eastern spread of Manichaeism: 2. Manichaeism between Transoxiana and Turfan."

Zhang Zhan, 2018. "Secular Khotanese documents and the administrative system in Khotan", *Bulletin of the Asia Institute* 28, pp. 57-98.

Zieme, P., 2003. "Il testo antico-turco dell'inscrizione trilingue di Karabalgasun," in: G. Gnoli（ed.）, *Il Manicheismo*, *Vol. I: Mani e il Manicheismo*, Fondazione Lorenzo Valla / Arnoldo Mondadori Editore, pp. 243–247.

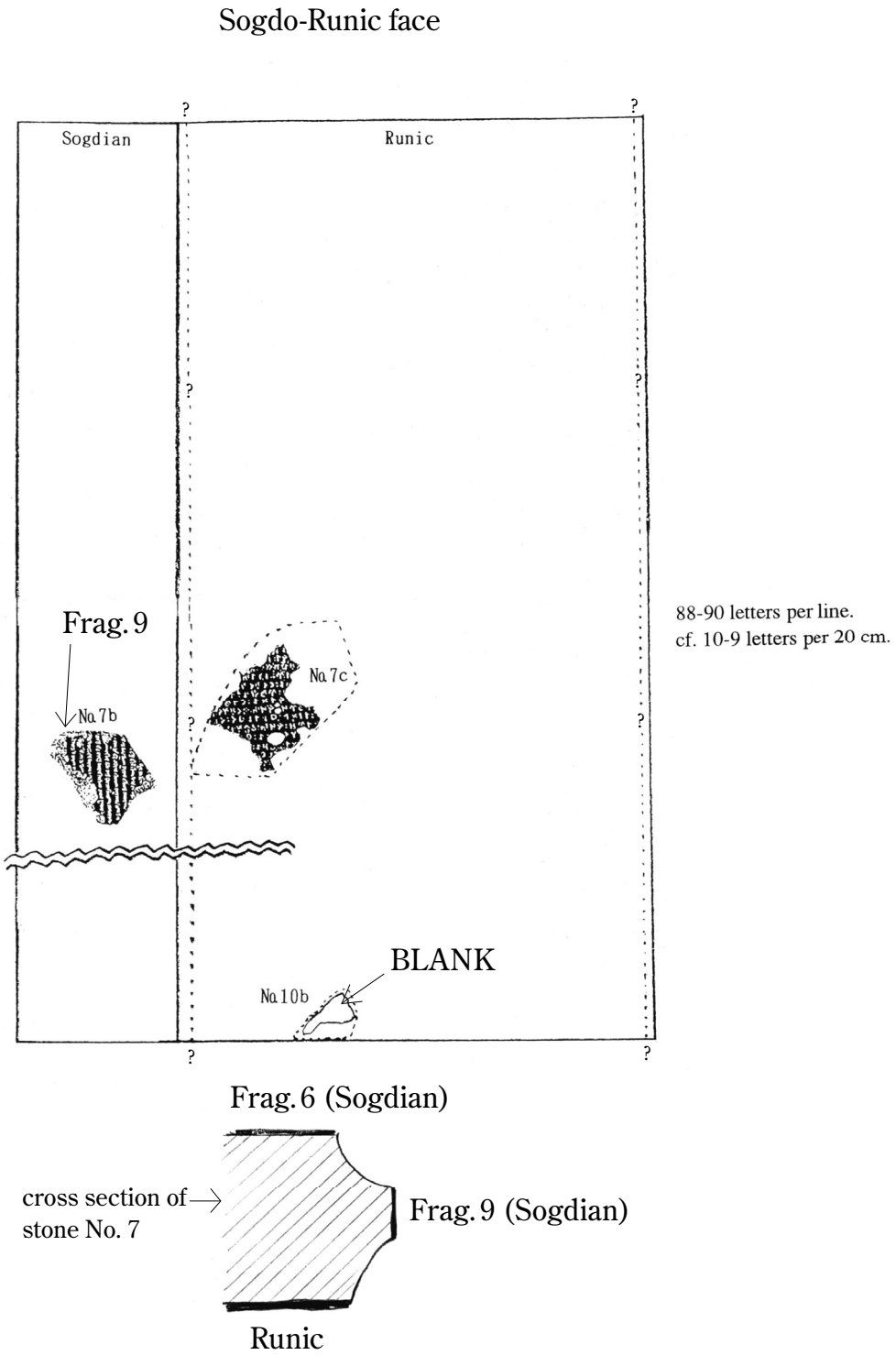
［本論文は科学研究費 B（課題番号 17H02399 代表 井谷鋼造）及び同 C（課題番号 18K00572 代表 吉田豊）による研究成果である。］

Placement of the survived fragments of Sino-Sogdian face



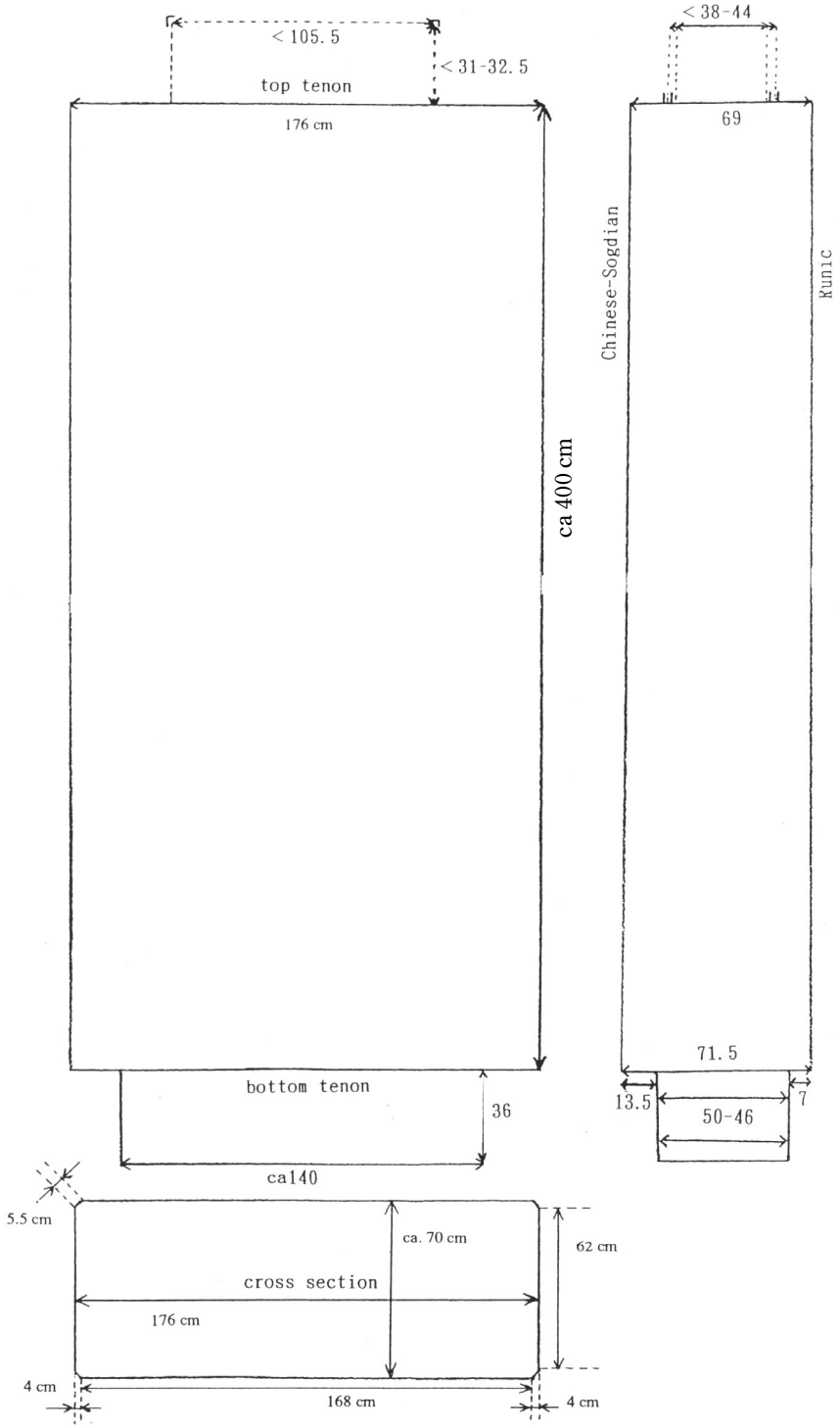
Chinese: front 19, edge 1, side ca. 14
total ca. 34 distance between lines 4.4 ~ 4.6 cm
Sogdian: front ca. 27, edge 1, side ca. 17
total ca. 45 distance between lines 3.0 ~ 4.0 cm

図版１　碑文の断片の復元図１（漢文・ソグド面）

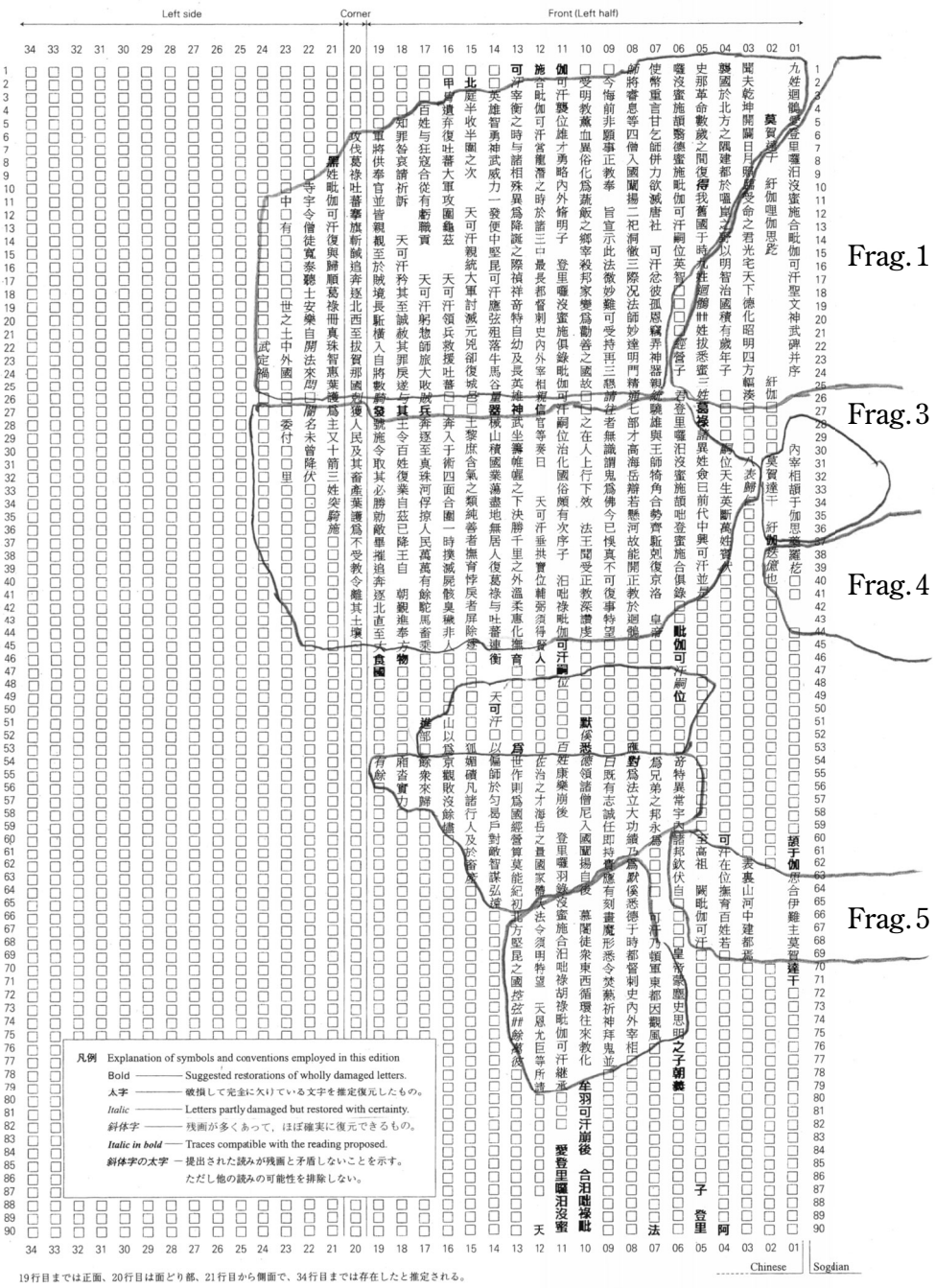


図版 2　碑文の断片の復元図 2（ソグド面・ウイグル面）

Dimensions of the Karalalgasun Inscription as reconstructed

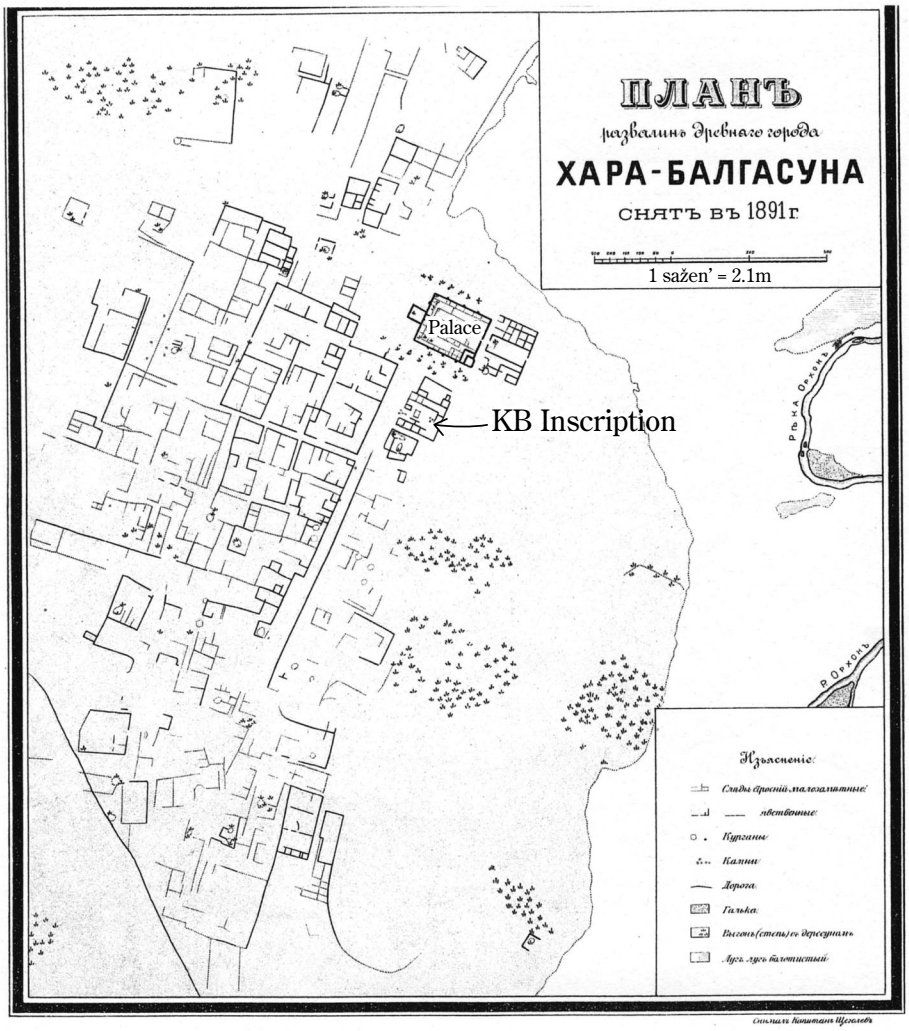


図版３　復元された碑文のサイズ



19行目までは正面、20行目は面とり部、21行目から側面で、34行目までは存在したと推定される。

図版４　漢文版の復元図

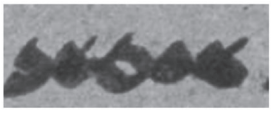
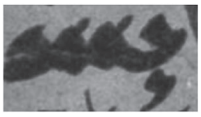


ТАРКУСЪ, С.П.Б.

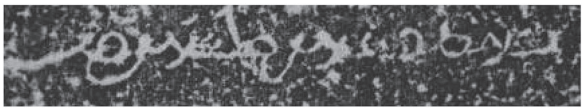
地図１　遺蹟の配置図

Figures (a): Samples of letters

'(alif) of the formal script

 So 14830: 'nt'y  So 14830: l"y

Frag. 9, line 7: *'xš'w'nh*

 Frag. 1, line 15: *nysty 'skwδ'skwn*

Frag. 9, line 6: *γrβ'ky'kh*

Frag. 9, line 5: *γrβ*

Frag. 9, line 7: *t'z-'yk'n'k*

Frag. 9, line 10: *x'γ-'n*

Frag. 1, line 12: *pty-synt*

Frag. 9, line 10: *pyl-k'*

So 14830: ly

Figures (b): Illustrations of the forms discussed

line 1

1(1-1)'lp or 'lp[w]

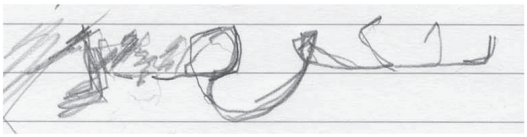
1(1)

13(1)'l-pw

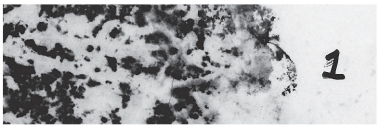
14(1)'l-pw

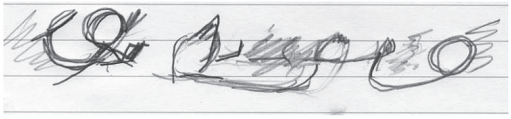
<*41> "l-pw

1(3)(ny)-'kw

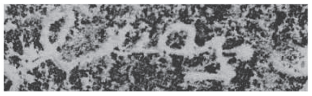


1(4)'[l]p(yn'ncw)


(Kyoto)

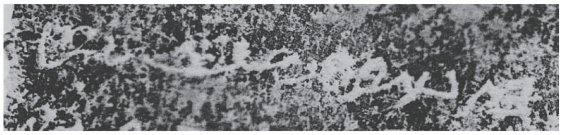


1(5-1)mwnk vs 16(1)mwn'kw


1(5)(Kyoto)

16(1)

1(5-2, 3, 4)ms βγpwr'k np(')[yk



(Kyoto)

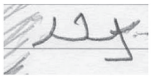
line 2

2(1-1)ny'k

(Kyoto)

2(1-2)xwtpwl-mys[

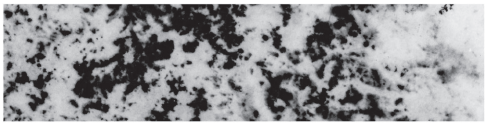
(Kyoto)



-mys

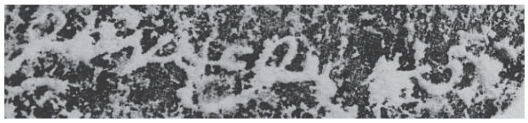
2(3)](•'wy-γ)w(r)tykyn

2(4)YY2 γr](')n γny ZY m[rt'nyh]



(Kyoto)

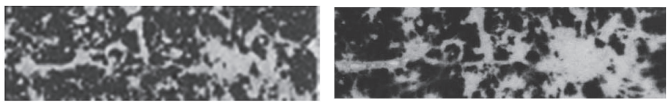
2(5) JH/SW pt]s'k np'xštw, YY2] (•••) np'xštw



2(5) sγ[tm'n

line 3

3(1-1) γw'δwk

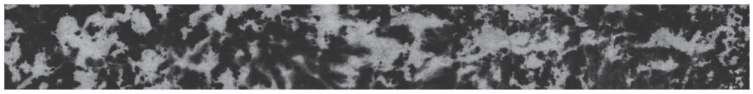


(Kyoto)

3(1-2) 'l-p'yn'cw

(Kyoto)

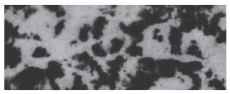
3(1-3) YY t(....) yγ(l-'x) r, JH t(•• 'l-p) yγl-'γyr, YY2 pγ'trx'n BLANK yγl-'xr



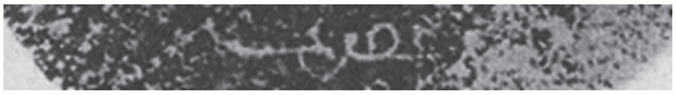
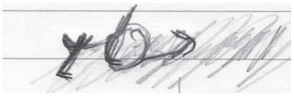
(Kyoto)

Moulding: blank space of ca. 8 cm after *pγ'trx'n*.

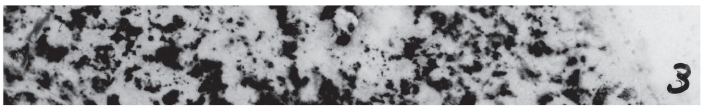
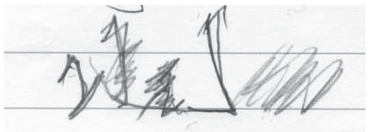
3(1-4)'wtyr or 'wtwr


(Kyoto)

3(3)](•••)r 'wk' BLANK

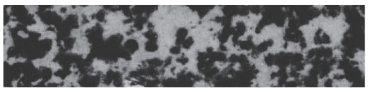
3(4)JH]p•šd(k)w(•)rd(•)ds pc(yp)y[..., SW]p•šδ(k)w [s]rδ•δs pc(yp)y[..., YY2](••••••••)δ(•δ)s(•••••)[


(Kyoto)


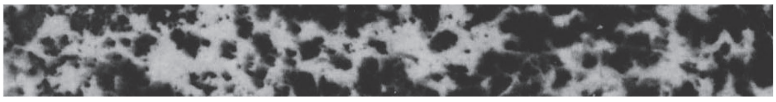
3(5)'wk' BLANK

line 4

4(1-1)JH 'βy-'wny ny, YY/SW/YY2 wm't'y ZY

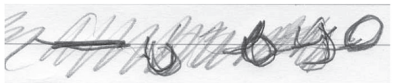

(Kyoto)

4(1-2)JH/SW γny-(n)t, YY2 γ(nk)yn


(Kyoto)

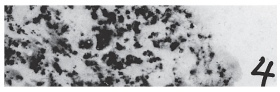
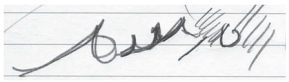
γ(nk)yn w(m't)['n](t)rt[y

4(1-3)JH/SW 'wyγwr x'γ'n, YY2 w(m't)['n](t)

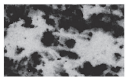


4(1-4)YY2 w(m't)['n](t)rt[y

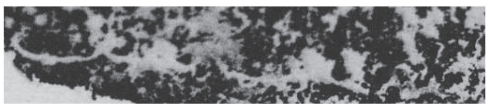
4(4-1)JH]l(t)s(')nt, SW](pty)s(y)nt, YY2](pry)s'nt


(Kyoto)


4(4-2)JH(•)p'r, SW *[y](w)'r, YY2(prw)

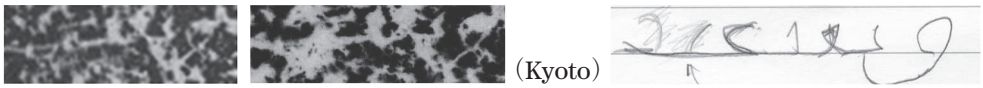


4(5)](••)yk ywk

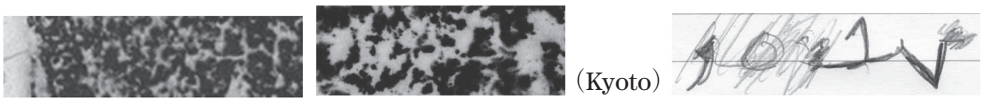


line 5

5(1-2)JH p'r'cy, YY/SW/YY2 p'ryc


(Kyoto)

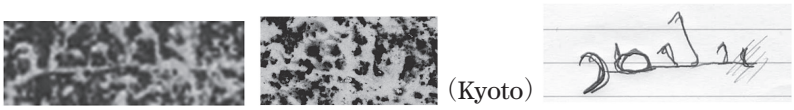
5(1-3)JH/SW xy(p)δ, YY2 γy(rt)r


(Kyoto)

5(4-1)ʃ(M)N

(Kyoto)

5(4-2)JH(w)yd(yt)y, SW/YY2(')yδ(yt)y

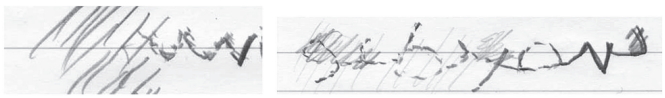

(Kyoto)

5(4-3)(y)x(w)st(')y

(Kyoto)

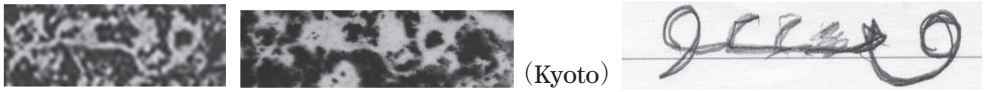
5(4-3, 4)JH(β)γ(w)stry γ••••••, SW *(y)x(w)st(')y x[..., YY2(y)x(w)st(')y(γnk)[yn?

(Kyoto)



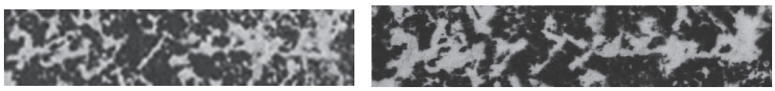
line 6

6(1-1)JH p(')y(')'w, p(r)y(r)'w, etc., SW *pc"w, YY pr'yw.



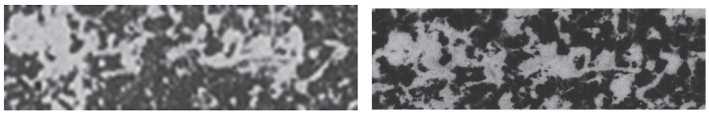
(Kyoto)

6(1-2)"šn's knty



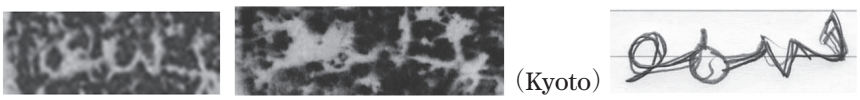
(Kyoto)

6(1-3)JH kynβr mnd, SW ky••• m(')δ, YY kyZY i s(r)δ



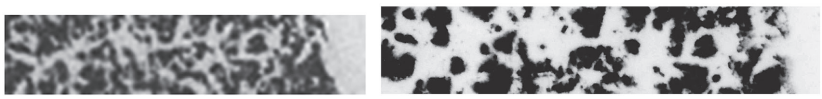
(Kyoto)

6(1)-(2)YY2 βxtw[ny(2)tw](γ)



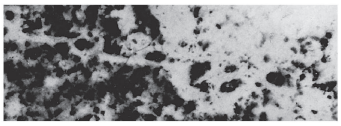
(Kyoto)

6(2)JH /// wm't, SW] wm't, YY2 [tw](γ)wm't

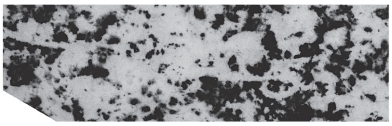


(Kyoto)

6(4-1)JH] •• βγ(y) (γw)nh, YY/SW('xš'w'n)h, /YY2('xš'wn)h

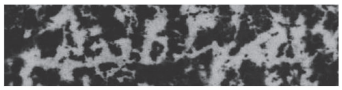

(Kyoto)

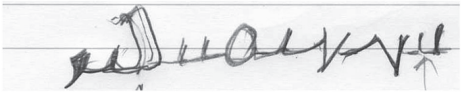
6(4-2)JH(')y t(y)p('y)t ny/ / / /, YY/SW "y-t δ('r'n)t, YY2 'y-t δ('r'n)t


(Kyoto)

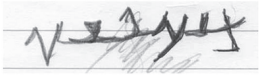
line 7

7(1-2)OH/YY/JH/SW 'xš'wnδ'r, YY2 'xš'w'nδ'r

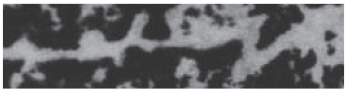

(Kyoto)



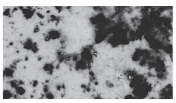
7(1-3)YY2 m(n)x(yr)š

(Kyoto)


7(1-4)šyn for *šyr

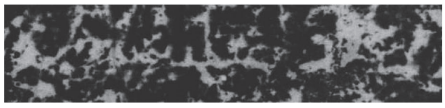

(Kyoto)

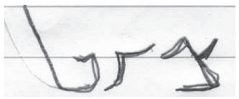
7(4)JH/SW 'l[p, YY(p)[, YY2 '[wl-wγ?

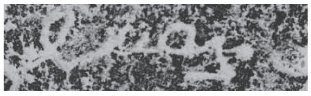

(Kyoto)

line 8

8(1-1)YY m(..), JH/SW m(r)ty, YY2(š)xy.

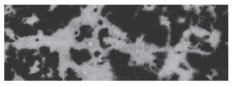

(Kyoto)



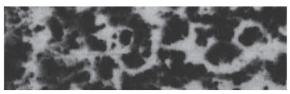
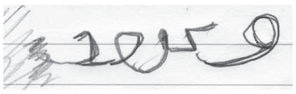

Cf. mwnkw 1(5)

8(1-2)OH/YY/JH/SW <ctβ'r> kyr'nw, YY2 kyr'n

8(1-3)wyzp'


(Kyoto)

8(1-4)pckwyr


(Kyoto)


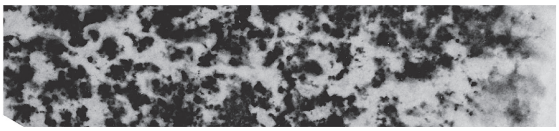
8(1)-(2)SW(p)[t(2)y](m)wxs, YY [wy(2)](δβ')xs.

Frag. 2

Frag. 1

8(4)JH p/////(4)///(•szn)y γrβ'kyh, SW p[r(4)](•sz)ZY γrβ'kyh,

YY p[r(4)py](r'y)ZY γrβ'kyh.

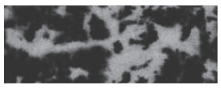


(Kyoto)

line 9

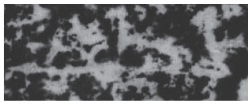
9(1-1)βr'yδt

9(1-2)ZKn



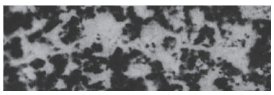
(Kyoto)

9(1-3)OH δynδ'ry, JH dynd'(r)y, YY/SW δβrδ' ZY, YY2 *δβrδ' ZY



(Kyoto)

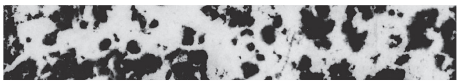
9(1-4)JH βwty'm or ywty'm, SW/YY2 xwty 'M



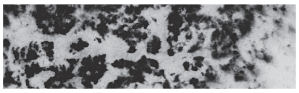
(Kyoto)

9(2-1)OH(t)γyw, YY(..)yw, JH/SW/YY2 pr'yw

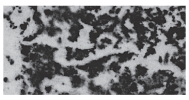
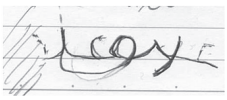
9(2-2)and 9(2-3)JH zkw βγpcystrw, SW/YY2 kw βγp(wr)st(n)w


(Kyoto)

9(2)-(4)JH γ/ / / /[(4)](š/γ)td'rt, SW x[rt ...(4)](γ)tδ'rt, YY2 x[r'(4)](m)tδ'rt


(Kyoto)

9(4)JH 'sp'yš/'sp'ys, YY/SW 'sp'(δy), YY2 'sp'(δy)['n]

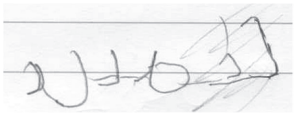

(Kyoto)


line 10

10(1-1)JH(dβ)ty(k)y, SW(δβ)ty(k)y, YY2:(δβ)tyk(w)

10(1-2)JH 'nγwncy, SW 'nxwncy, YY/YY2 'nxwncw

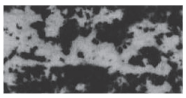
(Kyoto)



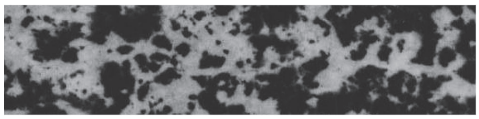
10(1-3)JH(zw'z)-y('nt), SW *(pt)z-(')'nt, YY2 "z-y<r>'nt

(Kyoto)

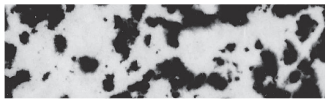
10(1-4)JH:(w'βd), etc., SW(w'βyδ), YY2(w'βr).


(Kyoto)

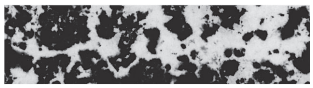
10(1-5)JH 'yny '(dp)t, SW 'yny 'δpt, YY2 'yny(n'p)t


(Kyoto)

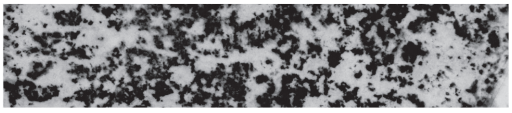
10(2-1, 2)JH(y)ty(•)prm[']('y), SW(rty)prm('n), YY2 pr'yw mδy


(Kyoto)

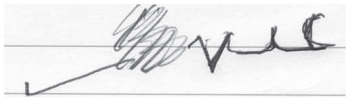
10(2-3)JH/SW γrβtwk'n, YY2('w)ytwk'n.


(Kyoto)

10(4-1)JH](k)pγ p(y)z'nt "(s)t, SW](k)pγ p(t)z('n)t "(s)t, YY("γ')z-'nt "(γ)t

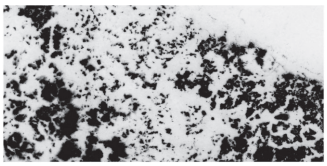


(Kyoto)



10(6-1)OH .. ctβ'r ptšmr. . . . .δ . . .tw, YY](..)ctβ'r p(tš)[m'r?, JH ///(t)ctβ'r ptšm(rt)

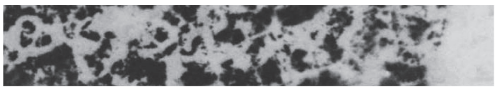
•••δ• •••tw///, SW](t)ctβ'r ptšm('r)•δ• •••tw[, YY2](n)ctβ'r ptšm('r••••δ•••)[



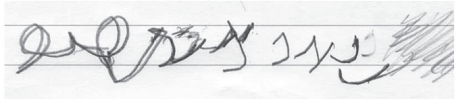
(Kyoto)

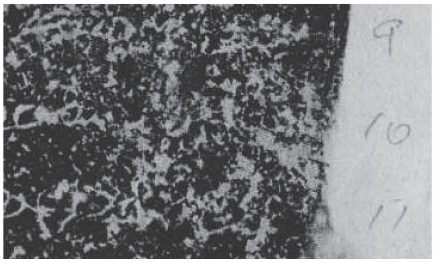
line 11

11(1-1)JH 'spyšy-my-k(')rw, SW *'spyšy-m(s)k(wn)w, YY(2)[•](p•)yšy-m(s)k(wn)w

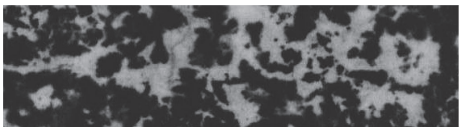


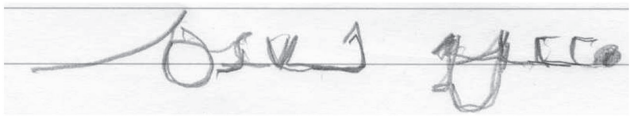
(Kyoto)



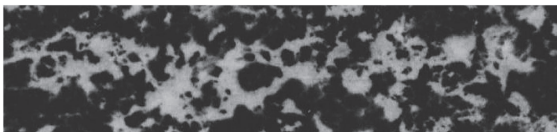


11 (1-3) JH (p') y y ('n) t, SW * (pt) y- (syn) t, YY (2) 'rky βynt


(Kyoto)

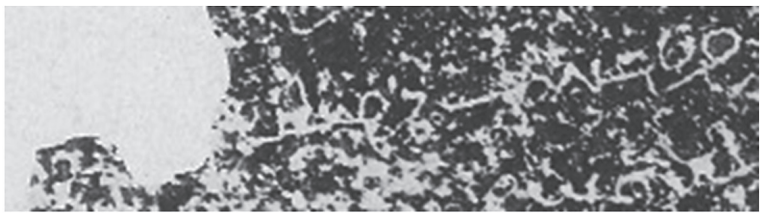


11 (1-4) JH (p) 'ty 'pyšm/ (r) t, SW (p) 'ty 'pyšm (r) t, YY (2) 'krty p (tkr'y) t


(Kyoto)

11 (2) - (4) JH *ptcγšδ ////š*, SW **ptcxšδ['r 'nt ...]š*, YY2 ptcxš (') [(4)] (y)

11 (6) JH ptcγt kw (n) d' pty (mw), SW ptcγt kwnδ' pty (mw) [z'k', YY2 ptcγt kwnδ' (p) ['r]ZY[

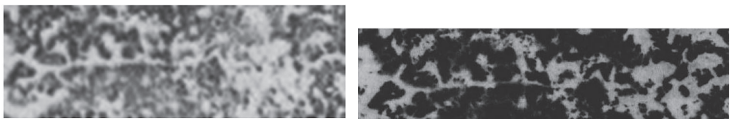


line 12

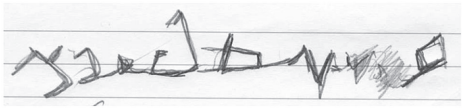
12(1-1)JH(wy)p(y)t or ”p’t, SW/YY2(wyδ)p(’)t

(Kyoto)

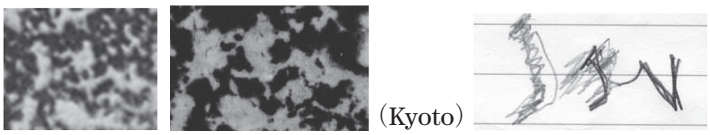
12(1-2)JH pšγtd’rym, SW pšγtδ’rym, YY/YY2(”)γtδ’rym



(Kyoto)

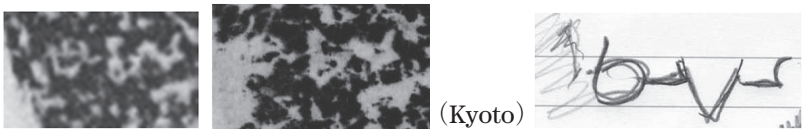


12(1-3)JH γm(d)or γm(y), SW γm(y), YY2 xyδ



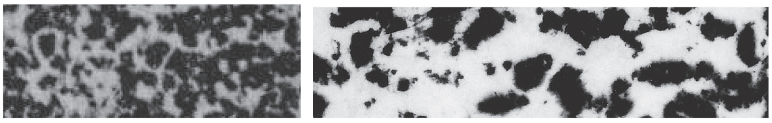
(Kyoto)

12(1-4)JH ’št///, SW ’št[, YY2 ’krt(y)



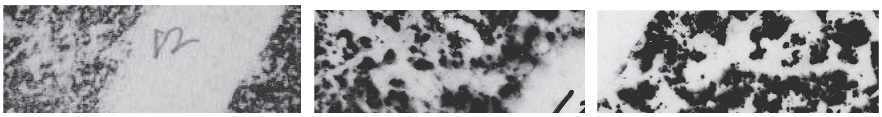
(Kyoto)

12(2-1)JH/SW γr’t’kw, YY2 γr’(m)’kw



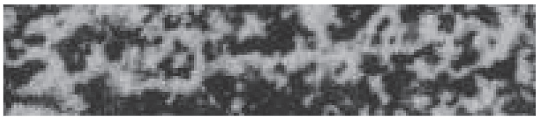
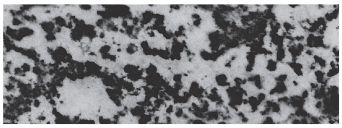
(Kyoto)

12(2)-(4)JH s////(4)//d(’)rym, SW(s)[wγtw(4)]δ(’)rym, YY/YY(2):(s)[w(4)](c)ym

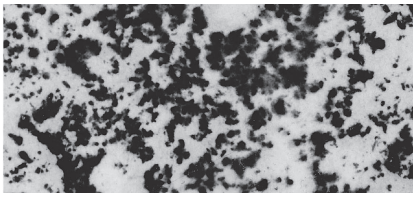


(Kyoto)

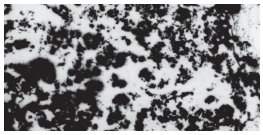
12(4-1)JH s(nβ)w(š)βγy, SW *(š'n)w(x)βγy, YY(2)(γr)'n βγy



(Kyoto)

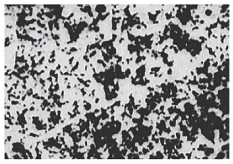
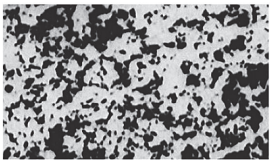
12(4-2)JH/SW/YY2 βγy m'rm'ny


(Kyoto)

12(6-1)JH /•γšy(z)kw(y), SW *(')xšy-(wn'kw)(?), YY2('sky?)ZY

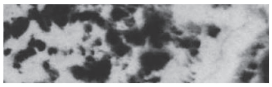

(Kyoto)

12(6-2)JH βγy 'γšy-wny, SW βγy('xšy-wny)(?)(•••), YY2 βγy mry nywrw'n


nyw rw'n

βγy mry(Osaka)

line 13

13(1-1)JH [wy]dβγs, SW [wy]δβxs, YY2 [w](yδβx)s


(Kyoto)

13(2-1)YY 's(ky. . . .), JH 'γ's(')tk(w)γsyr γrβ, SW '(s•s•••w)xsyr γrβ, YY2 '(sky c'δ)r γrβ

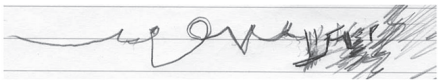
13(2/4)JH(w)/ / / /[']krtw d'rt, SW(w)[... ']krtw δ'rt, YY2(')[](k)rtw δ'rt

line 14

14(2)JH p(yry), SW p••••, YY2 p(yr'y)

line 15

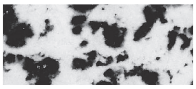
15(1-1)JH p(š)m'γprn, YY/SW/YY2('šm)'xprn.

(Kyoto)


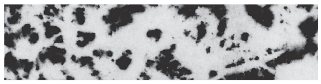
15(1-2)k(w)z-py

(Kyoto)

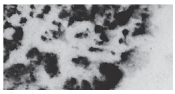
15(2-1)YY s'n, JH s'(t), OH/SW s'(r), YY2 *s'(r)


(Kyoto)

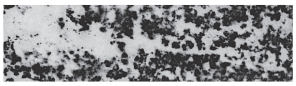
15(2-2)JH ptz'nty, SW ptz'nty, YY2 p(t•••)nty

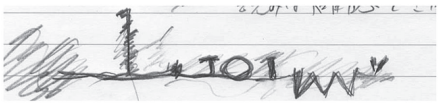

(Kyoto)

15(4-1)SW/YY2 [z-]'wr

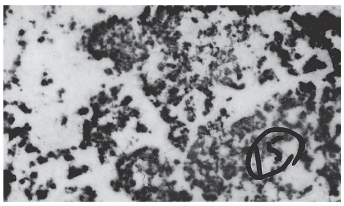
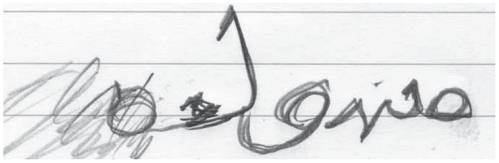

(Kyoto)

15(4-2)JH/SW 'xš'w'nδ[']ry(w)[']δy, YY2 'xš'w'nδ('r••••••••)


(Kyoto)

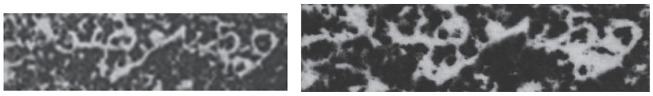


15(4-3)YY2 wyspδ(ryt)[

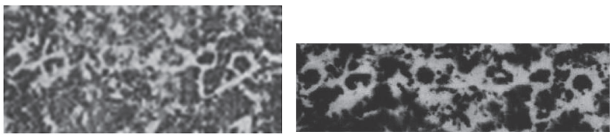

(Kyoto)


line 16

16(1-3)JH ptškw't, YY/SW ptškw'nh, YY2 *ptškw'nh


(Kyoto)

16(1-3)OH/JH pw(rn)βγty, SW *pw(rny'n)ty, YY2 pw(yrw)xty


(Kyoto)

16(1-5)JH '(š)t n'm, SW(t)[wγ ZY] n'm, YY2 t(yk)'yn n'm

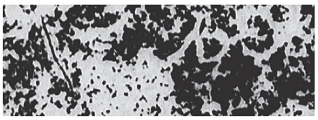
(Kyoto: t(yk)'yn)

(estampage: t(yk)'yn)

16(2)-(4)JH(cn)t////(4)///(t), SW 'ny'z-'nk[(4)](w), YY2 'ny'z-'nk[(4)](#)

16(4-2)JH d(β)yš('n)t z'////, SW δ(β)yš('n)t z'[yh, YY2](L')xypδ[

16(6-3)JH/SW cywyδ p't(šrγw), DMSB cywyδ p't mrxw, YY2 cywyδ p't(••••)


(Kyoto)

16(7-1)JH / / /kryd', SW tn]kryδ', YY2](k)[••](')n

16(7-2)JH 'šmrw, SW('z)m(n)w, YY2('ncm)nw

line 17

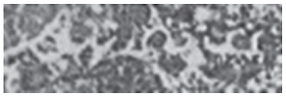
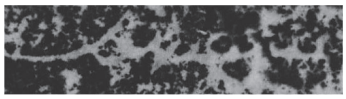
17(1-1)OH *wn'kw*, YY *w'nkw*, JH/SW/YY2(p)wkw

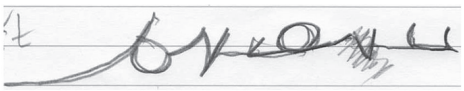
(Kyoto)

17(1-2)JH '(')γw(nš), SW *'(')x('ns), YY2 "xw'š

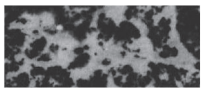
17(1-2)JH '(')γw(n)št, SW '(n)xw('s)t, YY2 "(x)w('š)t

(Kyoto)



(Kyoto)

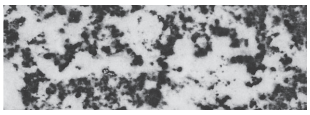


17(1-3)YY δ(βt-ykw), JH d(ysy)w, SW δ(βtyk)w, YY2 δ(βty)w

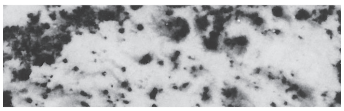

(Kyoto)

17(1)-(2)JH k'////(2)///šy-wn'k, SW/YY2(')[(2)x]šy-wn'k

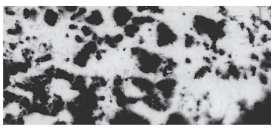
17(4-1)JH(p)y(š)ydt, SW(n)y(š)yδt, YY2: *(pyst)δ('r)t


(Kyoto)

17(4-2)JH pt(y•)d •••t, SW pty•δ•••t, YY2(rty δnn)


(Kyoto)

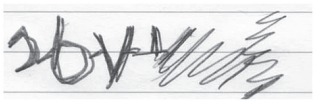
17(6-1)OH c'δr(!), JH/SW(nm'c), YY2 *(z-)mn(w)


(Kyoto)

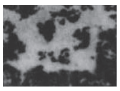
Line 18

18(1-1)JH(w)'γ•••//••(š)ty, SW(w)'γ[•• βr'y](š)ty, YY2 y'(k)[wβ_βr]('yš)ty

(Kyoto)



18(1-2)OH/JH 20, YY/SW/YY2 40

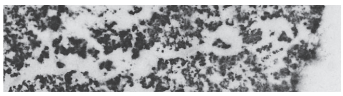

(Kyoto)

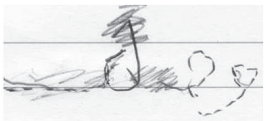
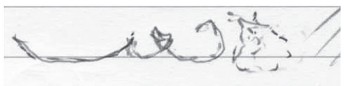
18(1-3)JH p///, SW p[r], YY2(pr)

(Kyoto)

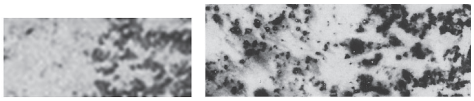
18(2-1)JH p(r pw)prd, YY pr(s..p.)δ, SW pr wysprδ, YY2 pr š(yr)p(')δ

18(4-1, 2)JH///'syd' kw(n)d', SW]'syδ' kw(n)δ', YY2](•)syrk kw(r)δ


(Kyoto)

18(4-3)JH/SW ••••••••, YY2 **mr(t) [xm'yt]**.


(Kyoto)

18(6-1)JH/SW]t(yn), YY2 ky](m')k

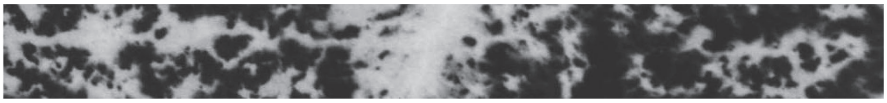
(Kyoto)

18(7-1)krt'k/knt'k

18(7-2)JH δynyntskwn, δββyntskwnw, or δβryntskwnw, YY2 δβr'ntskwnw

line 19

19(1-1)JH prwr(y)t'(•k)kr(n), SW prwrt['](k)*(ZKn), YY2, prwrt['k M]N k(ws)'n

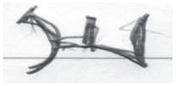

(Kyoto)

19(1-2)JH twγr(y)k'tny, SW twγr(y)k(c')ny, YY2 twγr'y(s)tny

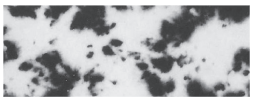
(Kyoto)

19(1-3)JH 'ny 'ty, YY/SW 'ny 'ny, YY2 'ny-'ty

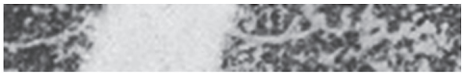
(Kyoto)

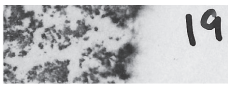


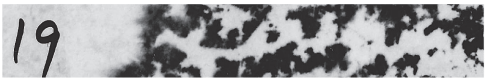
19(2-1)JH('s)pty, YY/SW/YY2(xw)ty


(Kyoto)

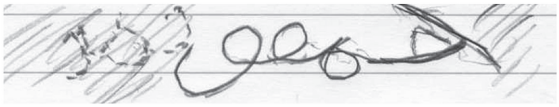
19(2)-(4)JH t/////(4)///d(•t), SW t[.....(4)]δ(•t), YY2 [s(4)']n



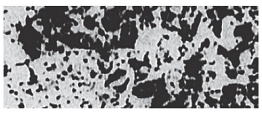




(Kyoto)


(estampage: Frag. 4)

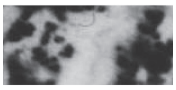
19(6)JH γ('nt)/γ(w'y), SW/YY2 γ(n')y


(Osaka)

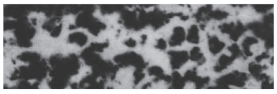
19(7-1)JH / / /γd'rt, SW]γδ'rt, YY2](t)δ'rt

line 20

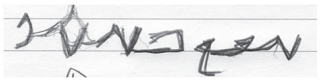
20(1-1)YY2(r)[t]y


(Kyoto)

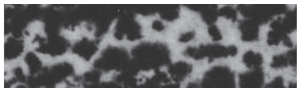
20(1-2)SW ptw'sty, JH/YY2 ptwysty.


(Kyoto)

20(1-3)OH s'rβ'γty, YY/JH s'rβγtyJ, SW(xrl-w)γty, YY2 **xrl-wγty**

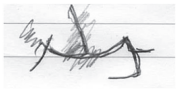


20(1-4)JH '(nw'z)kr, YY/SW 'nβrz-kry, YY2 'nβrz-kr.

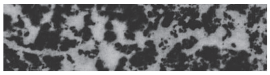

(Kyoto)

Cf. 20(7)'nβrz-kr w'sty

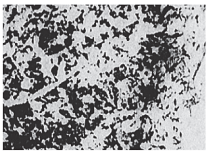
20(1-6)JH mnd, SW *m(')δ, YY2 m('y)δ

(Kyoto)


20(1-7)JH(')'st(n')k, SW(')'st('r)k, YY2(')'st(ny)k


(Kyoto)

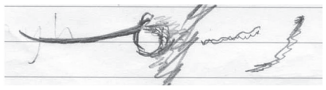
20(6)JH /p(cw)m', SW]p(c')m', YY2](')mn


(Kyoto)

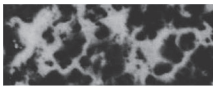
20(7)YY2 [p](r)wyš'nt

line 21

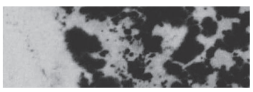
21(1-1)JH/SW p(y•)t, YY2(pyz)t

(Kyoto)


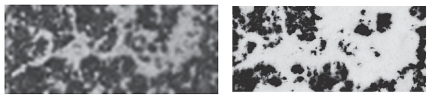
21(1-2)JH/SW p(')šk'r, YY2 p(r)šk'r


(Kyoto)

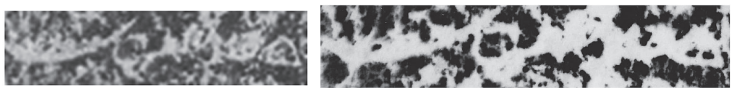
21(1-3)JH/SW kw pt[(2)]t, YY2 kw('n)[y(2)γr](β)


(Kyoto)

21(2-1)JH rtšy ~ ptšy ~ ktšy, YY/SW(βr')šy, YY2(pr')šy


(Kyoto)

21(2-2)YY wym'nt, JH/SW/YY2 wyš'nt.


(Kyoto)

21(7-1)JH ///(y)m(w)m(d'), SW](')mwmyn, YY2]mwmyn

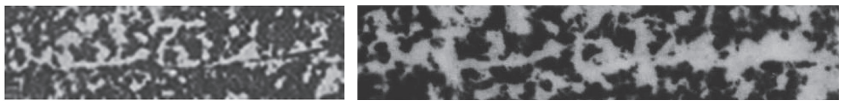
line 22

22(1-1)JH ...(t)/ny(or ..γšny, etc.), SW(••t)ZY, YY2 [p'](š)

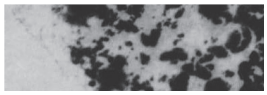
22(1-2)JH/SW γrβ, YY [γ](r)β, YY2 [w]'β

(Kyoto)

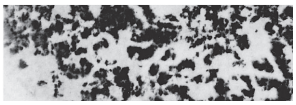
22(1-3)JH(')'zy(ty)t(y'd)ny, SW *'('z'ty)t(y *δn), YY2("z'ty)t ZY


(Kyoto)

22(1-4)JH pylk', YY/SW/YY2 p(rnxw)[nt'k]

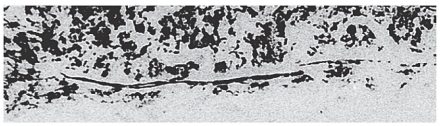

(Kyoto)

22(2)JH(np)////, SW/YY2(p)[ts'k]


(Kyoto)

22(6)JH/SW [p]ts'r, YY](•)s'r.

22(7)JH pr βγ(y)(•), SW/YY2 pr βγ(y)


(Osaka)

line 23

23(1-1)JH ••'γšy, SW](w)γšy, YY2 wγ](š)y

(Kyoto)

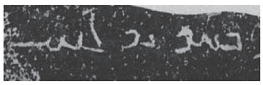
23(1-2)YY('y)w, OH/SW 'yw, JH/YY2 cw

(Kyoto)

line *33 = Frag 9, line 2

JH βγy ny, SW βγy ZY, YY2 (βγ) y ZY

JH d (yw') t, SW δ (ynh), YY2 δ (w••)

Cf.  βγy ZY δynh (Frag. 8, line 2)

line *34 = Frag 9, line 3

JH (r) m (•) (w') 'yw, SW (r) m['] (p) r'yw, YY2 ••• (pr) 'yw

line *35 = Frag 9, line 4

JH prβry' (.) t, SW prβ'yr (') t[, YY2 prβ'yrt[δ'rt?

line *36 = Frag 9, line 5

JH (z) ds•••, SW δp[yry'kh, YY2 1-(LPw) [

JH ••• (kyyw) •••, SW •••w•••, YY2] ('p) ryw[

line *39 = Frag 9, line 8

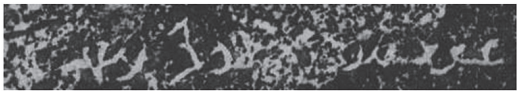
OH/YY/JH/YY2 ky, SW pr

line *40 = Frag 9, line 9

JH ’γš’w’nty d/ / /, SW ’xš’w’nty δ[, YY2 ’xš’w’nty-(h) [

Frag. 8, line 4

JH ’krty •••(n)yd s(γ) [, SW ’krty(cyw)yδ sx••[, YY2 ’kr(ty) [cyw]yδ sγ[tm’n



Frag. 8, line 5

JH ’βt’d’nyh[, SW ’βt’δ’nyh[, YY2 ’βt’δ’ny’ [

Frag. 8, line 6

JH dβ’nz pty(r’yd) [, SW δβz(’)pty(’r•••) [, YY2 δβnz pty(’r •••) [